

---

# このキノコ人間が。

天城春香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

このキノコ人間が。

### 【Zコード】

N8369V

### 【作者名】

天城春香

### 【あらすじ】

或る人物の日常を日記と言つ形態を用いて描くものです。物語には起伏があるかもしれませんし、無いかもしれません。この人物は狂い続けるかもしれませんし、まともになるかもしれません。章数は多くなつてしましましたが、どこから読んでもたぶん問題ありません。ご安心ください。

2011年8月15日（前書き）

これは私の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は私が完全に狂つた場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月15日

8月15日（月）晴れ

今朝、最初に耳に飛び込んできたニュースは、県内に一つしかない動物園のうち、家に近いほうから一匹の猿が逃げ出した、というものだった。インターネットよりも先にテレビで知った。ニュースがインターネットより早く私の耳に入つてくるとは珍しい、と思っていたが、今日はパソコンの電源を入れるより先にテレビの電源を入れていたのだ、ということに、ニュースを知つて五分後に気がついた。私は狂つている。

私は狂つている。体内時計が狂つていて昼夜逆転した生活を送っているとかそんなやわな狂いかたではなく、本当に気が狂っているのである。こんなことを自称しても信じない人が大半だろうが、医師は私を指して「君、気が狂つているよ。すぐに仕事を止めて福祉で暮らしなさい」と言つた。とんでもない医者である。それを聞いた私は市役所へ赴き、福祉の手続きを取り、それ以来福祉で暮らしている。全く、自分が狂つていると自覚している人間を狂つていると認定して福祉として金を提供するとは、とんでもなく狂つた世の中である。そしてとんでもなく狂つた私である。ちなみに福祉で支給された金は親の財布に収まっている。

私は狂つている。この狂いは、きっと直らないだろう。そんな気がしているのではなく、後で書くがこれには根拠があつて言つているのである。だから私は日記を書くことにした。この狂いが進行すると、きっと私は最初に人の顔が認識できなくなる。次に、絵に描かれた記号としての顔も認識できなくなる。そして最後に、文章も認識できなくなる。文章が認識できなくなると、日記が書けなくなる。この日記が途切れたその日が、私の狂いが極に達した日、とい

うことになる。そんな記録が残したくなつたので、私は今日から日記を書く。日が開いたら、二日分書く。とにかく短くても、毎日分書くのだ。そうしている限り、私は完全に狂つたことにはならない。病院や市からは完全な狂人と認定されて入るが、私の中では、まだ私は完全な狂人ではない。そう考えている。でも狂つている。少しは狂つている。

今日の晩餐にはオムレツが出た。オムレツとは通常、ホテルなどでは朝食として饗されるものである。しかし我が家では、番に出た。何がおかしい。おかしなことなど何も無いではないか。夜にオムレツが出ることの何が変だと言うのだ。私は狂つているが私に食事を饗してくれる母親は狂つていらない。狂つていらないから働けているのだ。そしてオムレツにはキノコが入つていた。シメジではなかつた。シイタケでもないようだつた。エリンギでも、当然マツタケなどでもないようだつた。味の無いキノコだつた。このキノコのせいで、私は狂い続けているのではないか。そんな気はしている。しかし私にそんなことをやる母は、狂つていらない。働けているのだから、狂つてなどいないので。

2011年8月1-6日（前書き）

これは私の日記ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は私が完全に狂つた場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月1-6日

8月1-6日（火）

母は通訳の仕事を続けている。父はどうなっているのか、最近音信不通なので分かつていいない。とにかく働くとすれば必ずといっていいほど断られるほど狂った私にとって、親の存在は生命線である。つまり私はいわゆる「一トと呼ばれているものに分類される、ということになる。不本意ではあるがそれが真実となってしまうのだから仕方がない。そんなわけだから、当然近所づきあいなど全くといつていいほど私には無い。ではどうやって一日を過ごしているのかと言つと、恐らく世の大多数の「一トと同じである。何もやつていらない。いつか罰が当たればいいと思つ。親が死ぬクラスの罰が当たればいいと思つ。

父は音信不通であると書いたが、別に行方不明なわけではない。私個人に対して音信普通なのである。狂った私に対し、全くコンタクトを取ろうとしない。つまり私は肉親に無視されているのである。それほど狂うということは罪深いのか、と考えたが、確かに罪深い。親は私が生まれたとき、きっと私に期待をかけただろう。将来は狂つた人間にきっとなれよ、とは間違つても願わなかつただろう。私は死んだほうがいいかもしけない。ああ、嫌になる。こんなことに対する意見ばかりが正常だ。

明後日は人と会わなければならぬ。私のように狂ったもの同士が保健センターのサロン（なんという言葉を使うのだ）に寄り集まるのである。寄り集まつて何をするのかと言えば、なにも建設的行為を行わないのだから困りものである。とにかくひどい。何も起こらない、という事実がひどい。そんな集まりがあさつてに控えている。

昨日書いている途中に書くことを忘れてしまっていたが、私が狂つて いる原因とは何だろ。ところで突然話は変わるが、今日の晩餐として饗された牛丼にも、無味の私の知識には無いキノコが入っていた。私はこれを食べた。母親が作った牛丼に入っていた無味のキノコを食べたのである。なぜなら、私に食事を残す権利など無い。狂った人間が親に逆らうと社会的制裁を食らうのである。根拠は無いがきっとそうだ。ところで私が狂っている原因とはなんだろう。

2011年8月17日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月17日

8月17日（水）

今日は外に出た。ということは、昨日は家から出なかつた、ということだ。昨日の日記が家庭内の事情の描写に終始していたのはそのためである。ともかく今日は外に出た。しかも日中である。狂った奴が田中に出歩くと善意の普通の人と視線が衝突して酷い目に遭う。そうに決まっている。と覚悟を決めていたかもしない。私が住んでいたのが都会であったのならば。しかし私が住んでいるのは宮崎県という行けども行けども田舎が続く土地であるため、平日の日中には外に出ても人と会うことは少ない。この点に関してだけは、宮崎と言う土地に感謝している。しかしきつと近所での私の評判はすごぶる悪いに違いない。だって狂つてばかりで稼いでいないのだから。近所の普通の人から話を聞いたわけではないが、そう思われているに決まつている。

宮崎という田舎であつても、コンビニくらい存在する。ちなみに宮崎にローソンが来たのは90年代末である。田舎だ。実に田舎だ。悪いことは言わない、田舎暮らしなんかに憧れないほうがいい。といつても狂つた人間の忠告など誰も聞かないか。それにしても誰に見せるつもりも無いのに、私は誰に忠告しているんだ。エア友達か。ともかく私は家から出て、コンビニに入った。そしてコンビニに入ってしまうと、酒の「コーナー」に向かつてしまつた。そして親の財布から抜き取つた百円玉を使って酒を買つてしまつた。飲んでしまつた。そしてコンビニを出て三十歩歩き、吐いた。酒に関するといつもこうだ。今度からは飲まないよう気をつけなければならない。

宮崎という田舎の平日でも、たまに人とすれ違う。今日は一人とすれ違つた。その人はすれ違いざまに私に視線を向けた。寝癖を見

たのだろうか、それとも狂った人間が珍しいのだろうか。私のように誰が見ても狂っていると分かる人間は、珍しいに違いない。都会だったらきっと、狂った人間が数多く闊歩しているだろうから、私が特別に視線を向けられることなく済んだらどう。田舎が憎い。都会が羨ましい。田舎で死にたくない。都會の雜踏の中で死にたい。そしてきっと、「こんな街中で死ぬんじゃねえ」と悪態をつかれるのだ。それでも田舎で死ぬよりずっといい。

昨日に続いて今日も晚餐は丼ものだった。親子丼だ。鶏肉がささみしか使われておらず、しかも硬い。狂った人間には豪華すぎる食事である。卵と鶏肉と玉ねぎのほかに、キノコが入っていた。味は無かった。昨日のキノコと同じキノコだ。

2011年8月1-8日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

8月1-8日（木）

本を読むときは必ず没頭するようにしている。そうしていないと私はもっと狂うしかやることがなくなってしまう。何でもいいから何もしないよりは何かやれ、とは母親の口癖である。……だつた。でも今はあまり言われない。諦められているのか、それとも呆かれているのか。

今日は保健センターのふれあいサロンへ行く日なので、母に送つてもらつて保健センターへ行つた。サロンといつてもやることといえば私のように狂つた人たちが集まつて喋つたりボードゲームをやつたりするだけの集まりである。私は喋ることもボードゲームも得意ではないのでいつも本を持つていく。そしてずっと本を読む。喋りもせずに、人を見もせずに。きっとこの日記を誰かが見ているとしたらきっと私のことを軽蔑するだろう。狂つた私でもそのくらいのことは予想ができるのである。

サロンから帰つてきてパソコンを開いていたらメールが届いていた。そこには「あなたの書いている日記について、お話したいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来て下さい」と書かれていた。差出人の名前はどこにも書かれていなかつた。怖かつたのですぐに削除した。

今日の晚餐は豚キムチが出た。「ご飯と豚キムチ、それだけである。味噌汁などと言うぜいたく品は私の食事には出ない。今日もその中に昨日と同じ形状のキノコが入つていた。もしかしたら私が狂う原因も、夕食後に必ず数時間意識を失つてしまつのも、このキノコが原因かもしれないと思い、今日は思い切つて残してみた。するとキ

ノコだけ残った皿を見て母が「食べなさい」と言った。働いていない私には拒否権など無い。そんなネット内の世論のような言い方だつた。その通りなので仕方なく食べた。そして今日もまた、さつきまで意識を失つてしまっていた。きっと私はもっと狂うだろ。そして文章を書くために保っているなけなしの正氣も失い、この日記は終わるのだ、きっと。

2011年8月1-9日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月19日

8月19日（金）

もうすぐ週末が来る。嫌だ。週末になれば狂っていない人々が外を出歩くだろう。そしてそれらの人々は、狂った私のことを注目するだろう。だから私は外に出られなくなる。家の中に閉じこもって読書とインターネットばかりやつていなければならなくなる。最近は読書をしていてもインターネットをやっていても気分が悪くなる。暗い気持ちになる。これは狂いが進行した証なのだろうか、それとも常人に近づいている証なのか。どちらにしても嫌だ。狂うか鬱になるかの一択。どちらも嫌だ。

今日読んだ本には、狂った人間が出てきた。しかし最後には大人になつて、狂いから脱した。タイトルは「時計仕掛けのオレンジ」といった。若いということは狂っているのだろうか。だとしたら私ももつと歳を取れば、狂った状態から開放されるのだろうか。歳を取つても狂い続けるとしたら、そんなひどい悪夢は無いようと思える。そうなるくらいなら、狂いが臨界点に達して何も認識できなくなる時期が早く来てくれたほうがいい。読書をしても心が豊かになつた気がしない。これは本が本だからだろうか、それとも私のせいだろうか。近頃、悪いと感じることが全て自分のせいであるような気がする。

「お話ししたいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」昨日削除した匿名のメールの文面がまだ思い出せる。「お断りします」とか返信くらいしておくべきだったかもしれない。もし本当に来週の月曜日にドン・キホーテに行ったりしたら、誰かが待ち構えているのだろうか。それともいたずらだつたりするのだろうか。どっちがいいか、と訊かれれば、どっちも

気が重い、と私は答える。だからセルシンを一錠余分に飲んだ。特に何も変わらなかつた。

晚餐にキノコ鍋が出てきた。エノキやシイタケやシメジや白菜に混ざつていつものキノコも浮いていた。何の工夫も無い、私にキノコを食べさせるためだけの食事だった。母は勝手に私の取り皿に、いつも私に食べさせている味の無いキノコを入れた。やけになつて馬鹿食いした。満腹になつて眠くなつた。だからさつきまで寝ていた。この怠け者。死ね、私め。

2011年8月20日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月20日

8月20日（土）

昨日の「時計仕掛けのオレンジ」で図書館から借りた本を全て読み終わってしまった。読む本がなくなるということは、インターネットしかやることしかないということはインターネット内のふとした書き込みが気になつて気分が沈んでしまう危険性が増えるということであり、それを避けるためには私は図書館へ行かなければならなかつた。私に本を買う経済力など無い。狂つた人間にお小遣いを渡すような親も私の家にはいない。親の財布は鍵のかかる化粧箪笥の引き出しの中に入れられてしまつていた。週末は外に人の目が増えるので外出は避けたい、と昨日書いたが、仕方がないので目を伏せながら家を出た。

そして自転車に乗つて図書館を目指した。母と兼用の、錆び落としが欠かせない十年以上使つてゐる自転車である。自転車は好きではない。周囲の景色が流れるのが早すぎて混乱してしまうし、何より転ぶとほぼ確実に怪我をしてしまうからだ。しかも死なない程度の怪我だ。車に轢かれて死ぬよりつらい目に遭うことになる。だから自転車は好きではない。乗れなかつたらよかつたのに、と思うのだが、幼稚園児の頃、まだ両親が私に期待していた頃に、私は練習してしまい、自転車が乗れるようになつてしまつた。だから仕方なく自転車を使って、本を返却して新たに数冊の本を借りた。カウンター越しの相手なら声を出すのは平氣だ。このあたり、私がまだ正氣を保つてゐるよつた気がしてほつとする。

「お話をしたいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」木曜日にパソコンに入つていた匿名のメ

ールがまだ記憶から消えない。メールマガジン以外のメールが届くことは稀だからだ。いや、初めてだつたかもしれない。私はパソコンを使っていてよかつたと思えたことがまだ一度も無い。それなのに、毎日パソコンを開いている。そしてインターネットを覗いている。あまり楽しい趣味ではない。でも、他にやることが無い。樂しくなる方法を検索すればインターネットは樂しくなるだろうか。

今日の晩餐は焼きそばだつた。それなのにまたキノコが入つていた。どうしてキノコが入つているんですか、と私は母親に敬語で尋ねてみた。母親は私のことを無視した。ついに私は家族全員から無視されるようになつたのだ。ついに、などという言葉を使ったところで嬉しくもなんとも無い。

2011年8月21日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月21日

8月21日(日)

ふと思いつき、ヤフー知恵袋に「味の無いキノコって存在しますか」と書き込んでみたが、反応が怖いので書き込んで以来まだそのページを開けずにいる。これは狂っているのではなく、単に私が元来臆病なだけである。そしてこのまま放置し、忘れかけた頃に見てみて何の反応も返ってきていないことに少しだけ落胆し、また「私は狂っている」などとの日記に書くのだろう。だから私はこの書き込みを自分の記憶から消すことに決めた。

今日は日曜日であり、外に出ると人の往来が平日より激しく、つまり狂っている私を奇異の目で見る眼球の数が増えるのである。だから私は外に出ないことに決め、本を開いた。しかし集中できなかつたので、座禅でも組んでみるとした。あまりにもくだらない行為である。しかし私にはもう、くだらないことくらいしかやることが無いのだ。そして座禅は十分足らずで挫折した。あまりにも頭が静かになつて狂いが加速しそうになつたからだ。文字や動画や音楽といった刺激を常に与え続けていなければ狂うような気がして、読書やインターネットを中断するのが怖い。まるで急ヶ者の言い訳である。

「お話をしたいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」試しに何も見ずに木曜のメールの文面を思い出してみたところ、ほぼ完璧に記憶できていたので自分でも驚いた。明日はドン・キホーテに行つてみよう、と昨日より精神の調子がいい私は決断してみた。しかしこの決断も明日の朝には鈍っているかも知れない。

それにしても、ここまで書いたものを読み返してみると、今日の私はまるで正気のようである。ということは、当たり前だが私は狂つていないということになり、狂っていないのに働いていない私ただのカスということになる。いや、狂っているから働けないなどと言っている奴もカスである。つまり私はカス呼ばわりされる運命から逃れられない、ということになるのか。こんなこと、とてもインターネットに書き込んだりなどできない。ただの泣き言じやないか。

夕食は饗された。しかし母親はまだ私のことを無視し続けている。夕食に出たのは塩鯖だった。キノコはどこへ行つたのか、と思ったら小鉢にキノコが入つているものが鯖の隣に置かれていた。食べなかつたら今度はどうなるんだろう、と考えながら、私はおとなしく出されたキノコを食べた。やはり味は感じられなかった。

2011年8月22日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月22日

8月22日（月）

目覚めた私はバイパス下のドン・キホーテへ向かった。「お話ししたいことがあります。来週月曜日にバイパス下のドン・キホーテに来てください」という、先週木曜日に送られてきたメールの文面がまだ忘れられなかつたからだ。到着してから、もし来なかつたらどうなつっていたのだろう、と考えた。そして何者かが家に襲いに来るのではないかという被害妄想に達してしまい、私は震えた。そんなことを考えながらドン・キホーテを歩き回つた。この店には物とう物が詰め込まれていて、こここの近所に済んでいる人間は買い物に困ることは無いだろう、と思われた。しかし金銭を少しも持っていない私にはこれらの積み上げられたものが全て無駄に思えた。どうせ買えないのだ。

午後になつても、何も起こらなかつた。もしかして私が呼び出した人物を特定して話しかけなければならぬのか。狂つた末にコミニニケーション能力を失つてしまつた私にそんな高度なことが可能なのだろうが、いや不可能だ、と帰る時間を計算して焦り始めて私は考え始めた。すると、背中に何者かの気配を感じたので、私は振り向いた。しかし何者かは私の視界から外れた。逆方向に振り向いた。何者かはそれでも私の視線から外れた。何度振り向いても、一回転しても何者かは私の背後の視界の外から出ようとしなかつた。姿を見せずに何をするつもりなのか、分からなくなつた私は恐ろしくなつて入り組んだ店内を転びそうになりながら駆けて、店からも出て自転車に飛び乗り、振り向きもせずに一目散に家へと帰つた。そして自室に飛び込んだ。もう自室から出たくない、という気持ちが、自分の部屋まで戻つた私を支配していた。

それでも晚餐のためには部屋から出るしかなかつた。私に饗される食事は夜の一食のみである。食べなければ死んでしまう。例えキノコが混じっていたとしても。今日の晚餐はカレーだつた。当然のようにキノコが混ざっていた。諦めの境地に達していた私は、キノコ入りのカレーを腹に押し込んで自室に急いで戻つて横になつた。

2011年8月23日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

8月23日（火）

あれは確か火曜日の深夜だつたか。だから水曜日の日記に書いてもいい事柄だ。

私は深夜、外を出歩いていた。田舎の深夜は通行人がほぼ皆無なので安心して出歩くことができる。しかしその日は、安心できないようなものと出くわした。それは猿だった。野性の猿か、と思ったが、ずいぶん前に動物園から猿が逃げ出したというニュースをテレビで見たことを思い出した。猿と目が合つた私は、歩みが止まった。猿も動きを止めた。しばらく睨み合つた私と猿は、数分間静止していただろうか。双方とも、どちらからとも無く視線を外し、それぞれ別の方向へ歩み去つた。通報したほうがよかつたのかもしれないが、深夜だし、私は狂っているし、それは無理だ。

帰るとメールが届いていた。「はじめまして。猿です」で文面が始まっている上に匿名だったのですぐに削除した。どうも最近、不審な人々に私のメールアドレスが駄々漏れしている気がする。何か嫌なことの前兆でなければ良いのだが。

昼間、一人部屋でじつとしていると、自分がすごく罪深い人間であるような気がしてきた。なので、自分に罰を与えたほうがいいのではないか、と思い立ち。しかし有効な方法がすぐに思い浮かばなかつたので、壁に頭をぶつけてみた。ごん、と大きな音がした。家中に音が響き渡つたに違いない。しかし、在宅で通訳の仕事をしている母から咎められたりすることは無かつた。ずっと無視されているのだ、当たり前だ。私はもう期待もされていないのだ、当たり前だ。死んだほうがいい、と思つた。しかし、死ぬ勇気が出なかつた。保留である。駄目だ。私はダメだ。

また匿名のメールが届いていた。「昨日は楽しいデートでしたね」と書かれていた。昨日、誰かに会ったか、と思い返してみたが、ドン・キホーテで姿を見せずに私の背後を付け回した人物しか思い浮かばなかつた。あれがデートだと言える頭があるなら、その人物は十分狂つている。私より狂つているかもしれない。そういえば明日は病院へ行く日だ。病院へ行つて狂いを治療するのである。もう一年くらい通つているが、ただ薬を処方されるだけで、一向に狂つた頭が改善される兆候は見られない。あの病院はヤブなのではないか、と私は少し思つてゐる。

昨日書き忘れたが、私は背後を姿を見せず付いて来る謎の人物に、一言だけ声をかけられた。「あなたはきっと治らない」と一声。その言葉には十分な説得力が会つた。自分でも自分の狂いが治るとは思えなかつたからだ。そんな些細なことは覚えていながら、今日の夕食は覚えていなかつた。キノコを口にしたことだけは覚えているので、献立は思い出せない。

それと書つても、ついさつき、冷蔵庫から酒を勝手に奪つて飲んだからだ。数分前まで、私はいい気分になつていた。その拍子に晩に何を食べたのかを忘れた。だから今日の日記は時系列がとつちらかっている。明日はちゃんと書こう。読み返したときに意味不明では困るから。

2011年8月24日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月24日

8月24日（水）

起きると、一階から家族のものではない男の声が聞こえた。それが誰なのか、私にはすぐに予想がついた。母の担当編集者である。母は週に一度か二度、定期的に編集者と居間で打ち合わせをしている。とても部屋から出られない。狂った私などを見知らぬ他人に見せて編集者を不快にさせて編集者が母に近寄らないようになつて母の仕事が減つて収入が減ると夕食すら出してもらえないかもしない、そうなると私は苦しい餓死を体験しなければならなくなる、そう思つた私は、編集者が帰るまで自分の部屋の自分の布団の中でうずくまっていた。一生そうしていつたかつたが、編集者が帰つたのと今日は用事があつたので毎日には布団から出た。

用事とは通院である。狂つた私は狂いを矯正するための薬の処方箋を貰いに行くために、一週間に一度病院へ行かなければならぬのである。診察には期待していない。いつも「何か変わつたことはありましたか」「何も起こりませんでした」「そうですか。ではお薬出しておきますので」で終わつてしまふからだ。きっとあの病院は収入源確保のために私のことを狂つていると診察し続け、処方箋を出し続けているに違ひない。でも今は実際狂つてるので通わないわけにはいかない。もし治つたら盗られた金額分の復讐をしに行こう。私は狂つた頭でそう思つた。

そんな気持ちに支配されていたからか、午前中ずっと寝ていてそれから起きてすぐ外に出たせいで気分が悪くなつたのか、それとも昨日盗み飲んだ酒が残つていたのか、今日の晚餐は食べ終わつてすぐ吐いた。吐いたものの中には原形を保つてゐるキノコが含まれていた。いつぶりだらう、私がキノコを消化吸収しなかつたのは。

2011年8月25日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月25日

8月25日（木）

生活そのものに価値と言つものが数値として示されたりすることの無い世の中でなくて本当に良かった、と思う。そんなことになるとしたら人々の生活の価値の数値で順位が生まれてしまうし、私のような人間の生活などにはとても低い数値がつけられて凹んでしまうだろうし、激情家が低い数値を付けられたりなんかしたら怒り狂つてきっと犯罪に手を染めるだろう。それも派手な犯罪だ。だから人間の生活が数値化されていなくて本当に良かつた、と思う。思ったからどうなんだ、とは聞かないで欲しい。ただ思いついただけだから。

今日は木曜日なのでふれあいサロンへ連れて行かれた。ふれあいサロンでは交流会が行われていて、参加者にはお菓子が配られたりフルーツポンチを作つて食べたりなぜか「上を向いて歩こう」を合唱させられたりした。「上を向いて歩こう」は嫌いな歌だ。なんか皮肉に聞こえる。それに上なんか向いたところで手の届かないものばかりが目に入つて気が重くなるばかりである。そんな歌じやないことくらいは分かつてゐるが。

帰つてきてパソコンを開くと匿名のメールが届いていた。「先日のデートは楽しかったですね。次のデートは日曜日にしましょう」とだけ書かれていた。私には「デートなどと言つ高等で狂つていない人間がやることを行つた覚えなど無い。きっと間違いメールだろう。日曜日にドン・キホーテで私を付回した人物から送られてきたメールだとしたら。だとしたら、不気味すぎて思わず震えてしまうだろう。狂つているが故に社会的な力を何も持つことを許されない私はそのくらいしかできないのだが。

今日の晩餐にはキノコの丸焼きが出された。まるで私が昨日キノコを消化せずに吐いたことを知っているかのような献立である。そ  
ういえばキノコを食べずに迎えた今日は、やけに調子がよく、ちょ  
つとした考えまで生まれ、気持ちも心なしか前向きになっていた、  
ような気がする。しかし、キノコの丸焼きを食べないわけには行か  
なかつた。もしかしたら、と気体を込めて口に入れてみたが、やは  
り味の無いキノコだつた。吐かなかつた。

2011年8月26日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂つた場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

8月26日（金）

早朝、まだ父も母も妹も起きていらない時刻に、冷蔵庫から酒を盗み飲み、昼まで寝ていた。昼間、母が部屋に閉じこもって翻訳の仕事を精を出している隙に、また冷蔵庫から酒を盗み飲んで夕方まで寝ていた。こんなに無駄に過ごした一日はそう無いだろう、と思う。そして私はきっと夜も眠るのだ。他にやることが無いんだから。

ハローーワークにいかなくちゃ、と起きている間に（酔つてはいたが）私は思った。働かなければ私は一生狂つたままだ、と感じたからだ。でもそう決意してからすぐに、私は酒を飲んでしまった。狂いたいのか正常になりたいのか、自分でも自分に問いたい。そして問い合わせたところどちらんとした答えは返つてこないだろ？。何せ酔つていたのだから。

酔つっていて記憶が曖昧なのが、どこかに電話した気がする。どこに電話したのかは覚えていないが、「月曜日に来てください」と返された。月曜日はどこかに出かけようと思つ。どこに出かけるのか見当も付かないが、明日には思い出せるんじゃないか、と私は未来の私に余計な期待をかけた。

酔つっていて眠つていたせいで、晚餐には出られなかつた。深夜、よつやく酒が抜けて目が覚めて、トイレに行こうと部屋を出ると、扉の前にキノコを茹でて刻んだものが皿に盛られて置かれていた。酒のせいで空腹だったのでこれを食べた。すると意識が朦朧となつて、トイレに行つたのか行かなかつたのか分からぬまま、私はついさっきまで寝ていた。これを書いている今も、起きているのか起きていなかの自分では判断できない。でも、狂つてはいないと思

う。馬鹿になつているのだ。

2011年8月27日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月27日

8月27日（土）

昨晩食べなかつたせいで、空腹で眠れなかつた。そこで早朝、冷蔵庫に何か食べるものは無いかと漁つてみたがそのまま食べられそうなものは見当たらなかつた。生野菜、パックのままのハム、バターパン。仕方がないのでテレビをつけるとアニメでカードの対戦をやつていた。勝たないと人類が危ない、らしい。カードゲームで。遊び相手が居て羨ましい、と思っていたら窓の外に猿の姿が見えた、気がした。早晨だし、寝ぼけていたせいで見えた幻覚だらう。空腹を紛らわせるために部屋に戻つてまた布団を被つた。

昼間、パソコンでインターネットをやつているとメールが届いた。匿名だつた。「猿です。遊びませんか?」とだけ書かれていた。昨日の人物からだらうか。本当に去るからメールが送られてきた、と言つことはあるまい。どうしようもないでの無視して削除し、このメールをこなかつたことにした。しかしこうして日記に残してしまつた。この段落を消すべきか、書いている今も悩んでいる。

酒の効能を思い知り、もっと飲みたいと思った。しかし飲むと馬鹿になる。その証拠として、酒に酔つたまま書いた昨日の日記は馬鹿みたいだ。だから我慢しなければならない。いや、狂つていており酔つた馬鹿で居るほうがいいのかもしない。そう考えるとますます飲みたくなつた。しかしこれ以上勝手に飲んだら家族にばれてしまつ。ただでさえ言葉を交わしてくれない家族が酒を盗んでいるという事実を知つたらどんな手段に出るのか。考えるだに恐ろしかつたので、私は気合を入れて我慢した。息を止めたり、腕立て伏せをやって無理矢理疲れて昼寝してみたりした。

昨日電話したところを、夕方になつて思い出した。何の前触れもなく。急に思い出した。私が電話した先はハローワークだった。「月曜日に来てください」と言われたということは、私は月曜日にはハローワークへ行かなければならぬ。しかし狂った私が今更ハローワークへ行つたところでまともに仕事を見つけることなどできるのだろうか。到底そうは思えない。しかし約束してしまつた。約束を破るのは怖い、これ以上人を失望させることは怖い。月曜日にはハローワークへ行かなければならなくなつてしまつた。

晩、昨日は何も口に入れなかつたせいで食事をいつもの倍のスピードで食べてしまつた。いつものように味の無いキノコ（恐らく私が狂つている原因）も入つていたが、構わず食べた。食事にがつつく私の姿は、浅ましかつた。母はそんな私をただ無言で睨んでいた。父と妹は、私に視線すら向けなかつた。

2011年8月28日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

8月28日(日)

家に知らない女の子が訪ねてきた。誰も応対しないので仕方なく玄関に向かつた寝起きの私に向けられた女の子の一言は「さあ、遊びましょう!」だった。滝本竜彦の小説が思い出された。その人物の小説どおりの展開だと私はやたらと自罰的な人物と言うことになつてしまつ。自分のことを狂つてる狂つてるとこんな風に日記に書き続けている私は自罰的な人間なのか。そうなのかもしない。そういう考え方ながら私はぎこちなく女の子と話し、おつかなびっくり一緒に遊んだ、その内容については詳しく書かない。子供がやるような他愛もない遊びで、そのあまりの幼稚さに泣きそうになった、とだけ書いておく。

女の子がやってきたのはきっと幻覚だつたのだ、さつきまで一緒に遊んでいたのも幻覚だつたのだ、と私は夕方、女の子が帰つてから思った。しかし私の手元には女の子から手渡された箱があつた。誕生日プレゼント、とのことだつた。私の誕生日は既に通過した水曜日、つまり23日だ。遅すぎやしないか、と訊いてみたかつたが訊けなかつた。「ああそう、じゃあいらないね」と言られて手元から奪い取られるのを恐れたから、かもしだれ。自分でどうして素直に受け取つたのか理解ができない。

箱を開け、誕生日プレゼントを腕に巻いてみた。似合つているか似合つていなかで言えば、不釣合いな代物だつた。しかも私は特別に用事があるとき以外は外に出ないので、家の壁にかけられる時計で事足りてしまう。女の子には申し訳ないが、このプレゼントは無意味だ。

そういうえば、女の子の名前を聞いたのか、聞いたとして覚えているのか自分でも分からない。今思い出そうとしても、出てこない。あれは本当に幻覚だったのかもしけない。じゃあどうして手元に腕時計があるのか。それは知らない。

死ぬ夢を見た。死のショックで目を覚ますと深夜だった。もう晩餐は出ないだろう、と予想しつつも、もしかしたら、と期待して居間に下りてみると、何の用意もされていなかつた。私は絶食しなければならないようだ。餓死が冗談では済まされなくなってきた。

2011年8月29日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月29日

8月29日（月）

今日は月曜日であり、今日から日中に外を出歩く人の数が少なくなると思うと少しは気が楽になる。でも今日は外に出る幼児がない。これは楽だ、今日は一日寝て過ごそう……と思つていたのだが、ハローワークへ行く約束を醉つた勢いでやつてしまつたことを思い出してしまつた。忘れていたほうが幸せだったのに。なので、昼まで寝てから私は家を出た。仕方なくだ。約束を破つても殺されはしないだろうが、狂つた心が許してくれない。お前は狂つているくせに人との約束まで破るのか、お前はつくづく価値の無い人間だな。自分にそう言われそうな気がするので、仕方なくだ。

ハローワークでは狂人用の受付があり、そこで職を探すに当たつてのアドバイスを受けた。「身なりはきちんと整えてください」「働きたい」という意思を先方にしっかりと示すこと」などといつた内容だつた。受付の人は中年の女性だつた。暇な主婦だろうか、と思った。私は暇な主婦より暇な人間だ。本当に価値の無い人間だな。

ハローワークから命からがら帰つてきてパソコンを立ち上げるとメールが届いていた。匿名のメールだつた。「私の名前です。覚えて置いてください」と書かれ、その続きに名前が書かれていた。私は人の名前が覚えられない。現に今、パソコンを閉じて日記を書いている今、思い出そうとしても思い出せないくらい人の名前に関する記憶力は弱い。なぜなら人の名前には意味が無いからだ。勇、という名前だからと言つて勇敢とは限らない。恵子、という名前だからといって恵まれているとは限らない。関連性の無い記号だから覚えられないのだ。だからメールは消さないでおいた。名前を思い出したくなつたら見返せばいい……ん？ どうして思い出したいんだ

るつ。

晚餐にはオムライスが出た。もちろん味の無いキノコが混入されていた。味が無いせに、そのキノコが喉に入ると急に吐き気がこみ上げてきた。しかし食卓で吐いたらきっと後処理は自分でやらなければならなくなる。自分のものとは言え嘔吐物の後処理は嫌だ。だから頑張つて全部飲み込み、トイレに入つてすぐ吐いた。きっと明日も栄養失調だ。

2011年8月30日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂つた場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

8月30日（火）

起きると足がふらついた。何も食べていないのである。しかし、キノコを食べて狂い続けるのと、こうやってキノコを消化するのを拒否し続けてやがて餓死するのではどちらがましだろう。少し考えてみた。キノコを食べずに正氣でい続けたほうがいいのかもしれない、といつ考へが頭に浮かんだ。私の死期は近づいているのかもしない。

窓から空を眺めた。キノコを消化せずに眺める空はいつもより青く見えている気がして、空を見るくらいしかやることの無い自分の立場に珍しく危惧を抱いた私はハローワークへ向かった。しかし、私の担当者（昨日決まつたらしい）は月曜日と金曜日にしか出勤していないので今日のところは帰ってください、と言われてしまつた。私はこの正氣でこられる時間をどう使えばいいのだろう、と悩みながら家に帰つた。

家に帰つたのを狙い済ましたかのように、家の電話が鳴つた。翻訳作業が忙しい母がいつまで経つても電話に出ないので、私が出てみた。すると少女の声が「はーい、私でーす」と名乗つた。誰なんかわからぬので名前を訊くと、「昨日のメールに書いたけど?」と帰つてきた。昨日のメールには確か名前が書いてあつたはずだ。思い出そうとしたが思い出せなかつたのでこちらから尋ねると、「榎本なごみだよ」と帰つてきた。どうして電話してきたのか尋ねてみると、「あなたが出ると思つたからね」と帰つてきた。どういうことが分からなかつた。どうして私が出ると思つたから電話したのか、私にどんな用事があつて電話してきたのか、さっぱり分からなくなり、もしやこの榎本なごみ（何度も書かない）と忘れてしまう

なる人物は私を騙そうとしているのではないか、いや自由に使える金を少しも持っていない私を騙してどうする気だ、笑うのか、嘲笑するのか、そんな頭のおかしい考えが続々と浮かんできて怖くなつたので私は電話を切つた。するとすぐに電話が鳴つた。取ると、「ひどいな、急に切るなんて」と榎本なごみの声が聞こえたので私は受話器を叩きつけて部屋に戻つて布団を被つて夕方まで震えていた。

そして夜になり、晩餐の出る時間になつた。ひじきの煮物の中にキノコが刻まれていた。昨日はこれを消化しなかつたから調子がよかつた。しかし調子がよかつたからと言つて良いことは何一つとして起こらなかつた。狂つていたほうがましだ、狂つていることに頭を抱えていたほうがましだ、そう考えた私はキノコごとひじきの煮物を口に入れた。

2011年8月31日（前書き）

これは作者の口述ではないことを明言させて頂きます。又、登場人物、又は作者が完全に狂った場合、連載を終了とさせていただきます。ご了承ください。

2011年8月31日

8月31日（水）

朝、起きると私は狂っていた。まるで現実が幻覚に用に見えていた。空の色も昨日ほど青く見えない。昨日の日記を読み返してみると、まるつきり普通の駄目な人間の生活そのものが書かれていた。狂っていないと私はこんな感じの生活を送ることになるのか。怖くなつたので、私は日記をすぐに閉じた。これからは日記を書くときはキノコをちゃんと食べよう、と心に固く誓つた。常人のまま駄目人間と言われるくらいなら狂つた駄目人間と呼ばれるほうがましである。

部屋の中のものが壊されることに恐怖を覚える。例えば、日曜日に榎本なごみから貰つた腕時計、これが壊れることを考えただけで、私の胸はまるで悪い相手に恋しているかのように締め付けられる。実際、昼寝中に、何者かに腕時計を壊されるという夢を見た。それがあまりに恐ろしかつたので、ショックで目を覚ましてしまつた。目覚めると窓の外に猿がいた。ずいぶん前に動物園を逃げ出した猿のよう見えた。というか、ここに猿がいる理由で最も納得できるものがそれだつた。窓を開けて追い出そうとすると、猿が喋つた。「あなた、お暇そうですね。退屈な生活、大変結構。羨ましいものです」きっと夢に違ひなかつた。

それから、いつ目覚めたのか、自分でも分からぬが、とにかく晩になつた。晚餐にいつものようにキノコが入つていたの私はむさぼるようにこれを食べた。悪夢を見てしまうのも、現実ではないようなものを現実のように認識してしまうのも、私の狂いかたが足りないせいだ。私よ、もっと狂え、そしてこんな悩みなど感じない身体になつてしまえ。

2011年9月1日（前書き）

これは作者の日記ではありません。あくまで創作でありフィクションです。私は正常な人間です。

9月1日（木）

起きると、と言つてもそれまで寝ていたわけではない、だらだらと僕近くまで布団に寝転がつて暇つぶしをしていたのだ、とにかく起きると、階下から母と男の声が聞こえた。情事の声などではない。私は母の浮氣現場など想像したくも無かつたし、大体母に浮氣できるほどの魅力があるとも思っていない。とにかく、階下から母と男の声が聞こえた。男の声には聞き覚えがあつた。それは毎週家に来ては母と打ち合わせをしている編集者の声だった。母と男は今度母が翻訳する本について話し合つているようだつた。その詳細については、ここには書き記せない。話半分しか聞いていなかつたし、もう夜になつてしまつた今となつては、何を言つっていたのか一言も思い出すことが出来ないからだ。

それに、ちよつとした事件が起こつた。母と編集者の声が途切れたと思うと、階段を上つてくる音が聞こえてきた。そのとき、一階に居たのは私だけだつた、と思つ。二階には私の部屋と妹の部屋と母の仕事部屋があるので、妹は学校へ行つてゐるし、母はもちらん私の部屋の真下の居間に居るので、私しか居ないことは明らかだつた。それなのに足音は階段を上つてくる。誰だ。きっと編集者だ。何の用があるんだ。少なくとも私に用があるわけではないだろう。母は編集者に私の存在を、私が狂つてゐるという事實を隠しているはずだから。

ところが、足音は私の部屋の前まで来て、扉をコンコンと叩いた。「入つてますか？ 入つてますよね」と言つて、了解も得ずに編集者は私の部屋に入つてきた。あまりにも突然の出来事だったので私は呆然としていた。私の部屋に、見ず知らずの男が、無許可で闖入

してくるとは。何をするつもりなんだ、と訊きたかったが見知らぬ人間が怖かつたので私は何も言えずにいた。すると編集者は調子付いたのか、私の机の上においてあつた、榎本なごみに貰つた腕時計を手に取つた。「いやあ、いい腕時計だ。実にいいものだよ、これは。

「君には勿体無い」そう言って編集者は腕時計を握りつぶした。私はしばらく、何が起こったのか分からなかつた。呆然としたままの私を置いて、編集者は部屋を出て行つた。後に残つたのは微かな煙草の臭いとガラクタになつた腕時計だけだつた。

そういうは、今日はふれあいサロンへ連れて行かれる予定の筈だったのだが、母は私に話しかけてくることは無かつた。私も、別に行かなくても問題は無い、と考えていたので何も起こらなかつた。とにかく、物を壊されたことだけが鮮明に頭に残つていた。

私は自分の持ち物が壊されることに恐怖を覚える。そんなことを、昨日日記に書いた。すると、それが予言であつたかのようなことが起こつた。これは何だ。何なんだ。私の日記には妄想を現実にする力もあるのか。そんな気の狂つたことを考えてしまつたので、今日は晩餐を貪るようになつて、キノコが混じつていても含めて貪るように食べた。もっと狂え。もっと狂つて、こんな痛みなど感じないようになつてしまえ、私よ。

2011年9月2日（前書き）

これは作者の日記ではありません。創作です。創作に決まります。

2011年9月2日

9月2日（金）

今、起きたところである。今が現実なのか夢の中なのか、狂っている私には判断できない。しかし机の上には壊れた腕時計が置かれている。昨日、編集者に腕時計を破壊されたことは事実のようである。いや、その事実を認識している私も夢の中にあるのかもしれない。そう考え出すと混乱してきた。だからこれ以上気にしないことにして、今日、起きているか寝ているかの間に起きた出来事をここに書く。

榎本なごみが訪ねてきた。彼女は誰に案内されるでもなく、自発的に、言い換えれば自分勝手に家に上がりこんできた。そしてそのまま階段を上つて、私の部屋に入つた。彼女が最初に気にしては壊れた時計である。「壊しちゃった？」と、榎本なごみは尋ねた。「違う、昨日母の担当編集者に壊されたのだ」と、私は真実をありのまま伝えた。「そつか」榎本なごみは怒りもしなかつた。自分がプレゼントしたものが勝手に壊されたというのに。「負けちゃダメだよ。狂っちゃダメだよ」と榎本なごみは言つた。何に負けるとうのか、私が狂つたところで何の不都合があるのか、私には納得できなかつた。しかし私が何を言い返したのか、ここで記憶が途切れているので分からない。とにかく、榎本なごみは晚餐の時間より前に帰つた。それだけは覚えている。

「キノコは食べないほうがいいよ」と、どのタイミングで言われたのか思い出せないが、とにかくそう榎本なごみに言われた。「食べなくても死なないよ。死になつたら警察に駆け込めばいいよ」いいや、食べなかつたら私は死ぬ。晩しか食事を出してもらえないのだから。私はそんな感じの反論をした、ような気がする。そ

れに対して榎本なごみがどんな反応を返したのか、それも思い出せない。きっと昨日キノコを馬鹿食いしたせいで、記憶能力が狂ってしまっているのだろう。

今日の晩餐の内容も思い出せない。しかし、きっとキノコが入っていたのだろう。今も私は狂っているから。

2011年9月3日（前書き）

この日記はフィクションです。作者は正常な人間です。こんな生活はしていません。

9月3日(土)

パソコンでインターネットに興じていると、猿脱走のニュースが再び報じられていた。未だ行方は不明なり、とのこと。ちなみにこのニュースは地域ニュースのページで見かけた。暇な私はそんなどうでもいいページすら閲覧するのである。インターネットに載っている情報などほとんどがどうでもいいものである、と言う人も時々あるが、間違つてはいないと思つ。ニコニコ動画や2ちゃんねるを閲覧していると、特にそう思つ。

今日が土曜日だったことを午後になつてやつと思い出し、先週もそうしていたように母と兼用の自転車を駆つて図書館へと向かつた。そこで本を返却し、本を借り、無料の給水機で大量に水を飲んだ。家で飲む水道水は残暑のせいなのか、ぬるいのである。家で飲めるものと言えば水道水か、無許可で飲む酒くらいしか無い。ほとんどの家にあるといつ、冷蔵庫で冷やされた麦茶は我が家には存在しないのである。

家に帰ると母と聞き覚えのある男の会話が聞こえてきた。男の声は編集者のものだつた。腕時計を壊された記憶がまだ鮮明に残つていたので、私は家には入らずに自転車をリターンさせて、本屋で立ち読みして時間を潰した。冷房が効いているとはいえ、何時間も立ち放しでいると、寝すぎて体力の低下した私は倒れそうになつた。しかし、あの変な編集者と同時に家に居ることなどできなかつた。来週から編集者が来たときはどうするべきか、私は真剣に検討する必要があつた。

立ち放しで何時間も立ち読みしていると、腰が痛くなつた。横

になつても腰の痛みは引かなかつたし編集者が居たという恐怖のために胃袋が縮み上がつていったしなので、私は夜になつても晚餐を取りに部屋を出ることをしなかつた。そのまま、深夜まで寝ていた。ついでつき日が覚め、腰が痛くなくなつて居間へと降りてみたが、やはり何の用意もされていなかつた。私にキノコを食べさせなくて良いのだろうか。というか、私はどうして毎日義務のように味の無い名前も知らないキノコを食べさせられているのだろうか。改めて考えてみたが、分からなかつた。不条理とはこのことだらうか。

2011年9月4日（金曜日）

これは作者の口述ではありません。創作です。

9月4日（日）

そういえば新学期が始まっていたのか。学校など、私とはかなり縁遠いものになってしまっているため、気づかなかつた。気づく必要も無かつただろう。私がまだ正常で、学生と呼ばれる身分だつた頃、新学期は……思い出したくないことに気がついた。新学期を迎える暗澹とした気分をまた味わいたくなど無い。だからこれ以上学生時代のことは思い出さないことに決めた。そして私は一度寝した。

昨日の日記には「狂」の字が一度も出てきていることに、今読み返してみて気がついた。昨日の私は正常だつただろうか？　いや、ずっと狂つていた。狂つたままインターネットして狂つたまま図書館へ行つて水をがぶ飲みして狂つたまま狂つた人間に危害を与えるとたぐらむ悪の担当編集に怯えて狂つたまま何時間も立ち読みしたのだ。何の実もない一日だった。きっと今日もそうだ。今日やつたことといえば、電話を取つたことくらいだ。

大雨が降つていたので、今日は外に一步も出なかつた。晴れいても用が無ければ出ないが。そして電話があつた。母がいつまで経つても出なかつたので私が居間に下りて受話器を取つた。榎本なごみからだつた。「ん。あなたが取ることは予想できていたよ」榎本なごみは預言者なのだろうか。「違うよ。ところでそつちは大丈夫？」台風近づいてるらしいけど榎本なごみの家にも台風が近づいている、ということになるだろう。「私の家は大丈夫。住んでないから」「どういうことなのか分からなかつたので、私は尋ねた。「だから、住んでないから。雨とか平氣なんだ」分からなかつた。

珍しく母に話しかけられた。「夕飯、何か食べたいものとがある

? 「冷蔵庫の中にあるもので作れるもの、と私はリクエストした。その日の夕餉は、卵とトマトを混ぜ合わせて炒めたものと、焼いたキノコが出た。私が順調にキノコを食べ続けているから、母は無視をやめたのだろうか。とにかく、私は今日もキノコを食べた。

2011年9月5日（金曜日）

この日記は架空のものであつて、断じて作者の口記などではありません。

2011年9月5日

9月5日（月）

また月曜日だ。学校なんか行かなくなつてかなりの週数過ごしているのに、月曜日になると憂鬱になつてしまつ。これは何症候群なんだろう。そして、こう感じる私は果たして正常なのか。医師は狂つていると判断するけど、私は果たして本当に狂つているんだろうか。次の通院日は明後日だ。

悪の編集者の手によつて破壊された腕時計を、今日、ようやくゴミ箱に入れた。今までは壊されたまま机の上に置きっぱなしだったのだ。しかし、このゴミ箱の中身を回収してくれる人物は、この家には存在していない。

なので私はいつものように、深夜、つまり9月6日になつたついつき、一階の居間のゴミ箱に自分の部屋のゴミ箱を移し変えに行つた。そうすれば、母は黙つて居間のゴミ箱の中身を回収してくれるので。これに気づくまで、私は捨てたいもので床が埋まりそうになつて困つていた。

そして、ゴミをゴミ箱に移し変えていると、偶然降りてきた妹と鉢合わせた。妹は眠そうな目で、私のことなど完全にいなかのようにおから視線を逸らし、水を飲んで電気を消して自室に戻つていつた。私がまだ居間に残つていたのに電気を消したのだ。妹の私に対する無視の度合いは徹底している。

これから眠るつと思うのだが、さつきまで居眠りしていたため少しも眠くない。仕方がないのでこれから図書館で借りた本でも読むことにする。野崎まどという作家の「パーフェクトフレンド」とい

う本だ。内容はまだ読んでいないので全く知らないが、私はフレンドと言う言葉に惹かれてこれを借りたのだろうか。まさか。今さら友達なんか、私には無理だ。

2011年9月6日（金曜日）

この文章は作者の日記ではありません。架空のものです。

2011年9月6日

9月7日（火）

そういえば昨日はハローワークの狂人専用窓口の私の担当者が出勤する日だった。行けばよかつたのではないだろうか、と起きてからすぐに思い出し、後悔した。しかし今後悔してもどうにもならない。時間の無駄だ。しかし狂っているためやることの無い私には、無駄な時間が沢山残っている。だから思う存分後悔できるのだが、それは気分が悪い。でも後悔くらいしかやることが……などといった負のスパイラルに脳が突入してしまったので、パソコンを立ち上げた。後悔するくらいならインターネットでもやつていつた方がまだ健康的だらう、と思ったのだ。しかし早速気分の悪い書き込み（一ートに対する支援などさつさと打ち切つてしまえ、といった意見）を見てしまい、さらに気分が悪くなつたので読書に切り替えた。

昨日読み始めた野崎まど「パーフェクトフレンド」は、普通だった。文字は普通よりも大きく、なんと午前中のうちに読み終えてしまった。内容は、タイトルがそうなのだから当たり前のだが、友情に関する話だった。狂ってしまった私などと友達になりたがる人間は、この世に存在していないだろう。もう悔しくもなんともないが。本当に、もうなんとも思つていない。

午後、午前中にやろうとして中断していたこと、つまり後悔をやつしていると、窓の外に猿が現れていた。まだ動物園に戻っていないのか、などと言つた感想を抱きながら、部屋から見える機会の少ない自分以外の動くものを観察していると、猿は窓を叩いた。そして「そろそろ入れてくれませんかね」と言つた。何故？ と私は返した。「いや、まだ残暑が厳しいもんで」私の部屋にはエアコンが取

り付けられていて、これを利用することについて家族から咎められたことは無い。「当たらせてもらえませんかねえ、エアコンに」猿が言った。そうとしか考えられない風に、猿の口は動いていた。きっと狂っているせいで見えている幻覚だ。私はベッドに横になり、布団を被った。窓を叩く音は、しばらく続いた。

2011年9月7日（金曜日）

これは作者の日記ではなく、フィクションです。フィクション日記です。

2011年9月7日

9月7日（水）

気力が出ない。何かをやるのも面倒だが、何かをやらいでいると気がさらにな狂つてしまいそうで、しかし何かを始めるという行為には必ずストレスがついて回るものであり、その少しのストレスで狂いが極限に達してしまいそうで、空が青くて窓を開けると風が涼しくて叫んでみても家族の誰からの反応も無く、私の狂いは進行しているようだつた。

病院へ行つた。病院へ行く日は、居間に下りると机の上に診察費と保険証、それから診察券と狂人者手帳が置いてある。私はこれらを持つて病院へ行き、診察費以外のものは病院から帰つたら机の上において自分の部屋に戻る。すると、晚餐の時間までに何者か（恐らく家で仕事をしている母）がいつの間にか回収している。

病院では、自分に気力が沸かない事を話した。「それなら、何か趣味を見つけると良い。お金がないなら、お金のかからない趣味を読書にもインターネットにも飽きた。何か他にやるべきことは無いのか。すると医師はこう言つた。「それは自分で探しなさい」丸投げされた、と少なくとも私は感じた。丸投げされた、と私だけは感じた。私だけだろうか、この発言を丸投げと判断するのは。

家に帰り着くと、母と編集者の話し声が家中から聞こえていた。だから私は逃げた。逃げても編集者は私の部屋に乗り込むかもしれない。そして何かを破壊するかもしれない。そう考えると編集者を家に置いたまま家を離れることがとても不安だつた。しかし編集者に近づくのはもっと怖かつた。

本屋で立ち読みして時間を潰して、夕方近くになつてから家に戻つてみてもまだ編集者は家に居た。というか、私がこつそり家の扉を開けると、今まさに家を出ようとしていた編集者と鉢合わせた。

「やあ」「そう言つて編集者は私の腹を殴つた。私は吐きそうになつた。しかし、堪えた。「お、君、吐きそうになつたね。君の胃液で僕の服が汚れたら、もっと殴つていたところだつたよ」と、編集者は母と話していたのと同じトーンでそう言つた。私は玄関で膝から崩れ落ちた。編集者はそんな私の脇をすり抜けて帰つていった。腹の痛みはなかなか引かず、晚餐を取ることも困難だった。だから今日も何も食べなかつた。まだ痛い。気力が出ないとか言つている場合じやないくらい痛い。痛いのは嫌だ。嫌だが、狂つた私にそれを拒絶する権利はあるだろつか。

2011年9月8日（前書き）

これは作者の日記ではなく、フィクションです。作者又は主人公が完全に狂った場合、連載は終了させていただきます。ご了承の上、作品をご覧ください。

2011年9月8日

9月8日（木）

あれは何日前だったか。今日は日記を読み返すのが面倒な気分なために正確に確かめることはしないが、榎本なごみは「私、住んでないから」と発言した。あれは一体どういうことなのだろう。住んでない？ ホームレスだって道端に住んでいる。ホームレスでない人間は家に住んでいる。住んでいない、とは、一体どのような状況なのだろう。などと考えていたら、榎本なごみが家に来た。母が応対しなかつたので私が応対したところ、玄関先に居たのは榎本なごみだったのだ。

部屋に上がってきた榎本なごみに相談してみた。狂った人間でも仕事をすることは可能なのか。そして質問している最中、ハローワークの狂人担当窓口の私の担当者の出勤日が明日であることを思い出した。あと、榎本なごみの私の質問に対する答えはこうだつた。「人間には、可能なことと不可能なことがあります。信じていれば夢は叶う、だなんて、卑怯な言葉だと思いませんか？ まるで人間に無限の可能性があるみたいじゃないですか」 意味が分からなかつたので、私はそうかと答えた。

一人揃つてもやるべきことは特に無かつたので、それぞれ別の本を読書して過ごした。私はおかゆまさきという作家の本を読んだ。ものすごい文体の本だった。ものすごく、頭が悪いことを追求した文体の本だった。頭が悪い文章を書くことも、出版することも、正氣ではきっとできないだろう。この作家もこの作家の作品を認めた編集者も、この本を購入した図書館も狂っているかも知れない。私も作家にならなれるかも知れない。「信じていれば夢は叶う、だなんて、卑怯な言葉だと思いますか」 榎本なごみがさつきと同

じ」とを口にした。

榎本なごみは夕方には家を後にして、そして夜になり、晚餐には珍しく凝った料理が饗された。餃子である。キノコが入っているのかどうかは、中の具が細かく刻まれすぎていて分からなかつた。あの狂いの原因と思われるキノコは味が無いのだ、みじん切りにされたら全く分からぬ。でもきっと入っていたのだろう。あのキノコを母が私に食べさせないとほどても思えない。ところで、どうして母は私にキノコを食べさせたがるのだろう。家族が狂つた人間になつて、何の得があるというのだろう。狂つた頭ではそれを想像することができなかつた。なので、考えないことにした。

2011年9月9日（前書き）

これは私の日記ではなく、完全にフィクションです。

2011年9月9日

9月9日（金）

そういうえば、昨日は毎週木曜日に連れて行つてもらつている筈の保健センターのふれあいサロンへ連れて行かれなかつた。いつも母に連れて行かれる時間に、榎本なごみが尋ねてきて、その間母は私に一切の干渉をしてこなかつた。榎本なごみが来た事を、母は承知していたのだろうか。しかし、私を無視しながら親としての義務だけは無言で果たし続ける母が、私に対してもんな態度を取るとは思えない。狂つてしまつた私なんかに気遣いなどということをやるとは思えない。母は一体どうしてしまつたのだろうか。

昼間、水を飲みに居間に移動すると、母と鉢合わせた。口中は翻訳作業でほとんど部屋に閉じこもつてゐる母と偶然鉢合わせることは稀である。昨日は私を思いやつてくれたような気がするので、もしかしたら無視されなくなつたかもしれないと思い、私は一昨日のことを母に話した。あなたの担当編集に腹をしこたま殴られましたよ、と私は伝えたのだ。母は私を無視した。やはり昨日のことは思いやりではなく、単に連れて行くことを忘れていただけなのかもしれない。

それからハローワークへ行つた。そして狂人専用窓口で私の担当者になつてしまつたパートタイム勤務らしい中年女性と話をした。そこで私は、狂人は作家になれるか、と尋ねてみた。「それは無理よ。狂つた人間が編集者さんと打ち合わせができるとは思えないわ」と返された。そうだな、と私は思った。

晚餐にはやはり無味のキノコが出された。ここで少しキノコの描写をしておこう。いつも晩に出されるキノコは笠が大きく、赤色を

していくその中に白い斑点がある。インターネットでベニテングダケと画像検索したら出て来そうな形状と色をしている。しかし毒物を口にしたときのような反応は私の身には現れていないので、きっと違うだろう。精神に異常はきたしているけれど。

2011年9月10日（記書き）

これは作者の田畠ではなくフィクションです。田畠の書き手と作者とは何の関係もありません。全く関係ありません。

2011年9月10日

9月10日（土）

起きると母に久しぶりに話しかけられた。その内容は「これから取材旅行だから」というものだった。母は翻訳家である。翻訳家に取材旅行などと言つものが存在するのかしないのか、翻訳という職業に詳しくない私には分からなかつた。もしかしたら旅行に行つたまま帰つてこないかもしだれ、などという子供じみた想像で不安になりながら、私は母を送り出した。母が居なくなつた家には、父も妹も居なかつた。一人とも、私が寝ている間にどこかへ出かけて行つたらしい。

冷蔵庫を覗くとそこには冷凍食品とキノコが大量に詰め込まれていた。これらの食事で凌げ、あとキノコもちゃんと食べろ、そういうことなのだろう。キノコを食べると、私の気の狂いは加速する。しかし、食べなければならない。そう言い聞かせるような視線を、母は出かけに私に向けていた、ような気がするのである。狂つているせいでそんな被害的妄想が浮かんだだけなのかもしだれないが、私はキノコをちゃんと食べることにした。食べないと後が怖いからである。

夜。父も妹も何の連絡も無く、帰つてこなかつた。仕方が無いので冷凍食品のチャーハンを解凍し、キノコも茹でて食べた。いつぶりだらう、私が台所用品を使つたのは。狂つているくせに私は食べ終えた食器とキノコを茹でるのに使つた鍋はちゃんと洗つて拭いて食器棚に戻した。こんなにも正氣的な行動が取れるのであれば私の狂いはやがて解消されるのかもしだれない、と期待してみたが、すぐにキノコの影響が出て私は狂つた。そして気がつくと、私は自分のベッドで自分に布団を巻きつけていた。狂つている間に私はどんな

行動を取ったのか、それはいつものように覚えていない。母はいつ帰つてくるのだろう。父と妹はどこへ行つたのだろう。私はこのまま死ぬまで放置されるのだろうか。こうして日記なんか書いている場合、だらうか。

2011年9月1-1日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、完全にフィクションです。実在する人物・団体・企業とは一切の関係がありません。

9月1-1日（日）

朝、テレビを見ているとプリキュアが戦っていた。富崎はプリキュアの放送地域だったろうか、と思い、見終えてから検索してみると、放送地域ではあつたが放送時間は土曜日の午前中ではなかつた。私が住んでいるのは本当に富崎なのだろうか、それとも狂ったせいで自分が住んでいるのは富崎だと思い込んでいるだけなのだろうか。一体どんな狂い方をすれば、自分が住んでいるのが富崎だと思い込むようになるのだろうか。

私は富崎について、思い入れも思い出したいことも一切無い。確かに私が生まれ、育つたのは富崎で、富崎から引っ越した記憶も無いのだが、その間に、墓の中に持つて行きたい思い出は一切含まれていない。私の頭の中に入っているのは思い出したくないことばかりだ。富崎という土地が私を責め苛んで狂わせた、と言つても過言ではないだろう、と私の狂つた頭は考えている。郷土愛が無いのは狂っているせいだろう。それにしても今日は日記によく「狂う」という字が出てくる口だ。

こんな日はきっと嫌なものを見てしまうだろう、と思つていたら、窓の外に猿が現れた。猿は窓の外から家の中をじっと眺めていた。入れてもらいたそうだったので、家には現在誰も居ないことだし、思い切つて窓を開けてみた。すると猿はするりと家の中に入ってきた。それから猿は居間で夕方までくつろいだ。その間、私は窓を開けっぱなしにしておいた。

去り際、猿は「あなたは正常になれますよ」と私に言葉を残した。猿が喋ることくらいで、今更驚いたりしない。何せ私はくるつてい

るのだ、この猿は幻覚に違いない。猿の言葉も幻聴に違いない。私が正常になれるなんて、夢にも思っていない。自分が正常になつた夢すら、一度も見たことが無い。

家族は今日も姿を見せなかつた。夜、冷凍食品とキノコを食べていると電話が鳴つた。榎本なごみからだつた。「明日、料理を作りに行つてもいいですか」とまるで私の現在の状況を知つてゐるかのような提案をしてきた。私は承諾した。どうせ誰も私を咎めたりしないのだ。このくらいの行動、取つたところで誰も困つたりしないだろう。

2011年9月1-2日（前書き）

これは作者の日記ではありません。登場する人物・団体・企業は架空のものです。団体も企業も今日の分には登場しませんが。

2011年9月1-2日

9月1-2日（月）

むらさきというものが人生を変えるとしたらそれはきっと傑作な幻覚であり、堂々巡りの末に出た結論としてはとても不適切とも言うことができるために日付が変わってからこの日記を書いている自分は本当は9月1-3日の人間なわけなんですが、どうにもこうにも腐つているような酒によつているような気がしてならない私の渡しの私の私の私の私の私の私の太くの致す所にも大腸菌が至るところに至つていて、そう言う願いを思つていたところで不徳のいたすところだつたりもするのかもしれないと考え

上の段落は、自分で何を考えて書いてあるのか分からない。晩のキノコを食べて狂つた状態で文章を書くところになつてしまふ。だから私はキノコを食べたくない。しかし家族からはキノコを毎日食べるようになると強要に近い形で暗に言い聞かされている。だから、家族の中で最も権利のない私はキノコを食べ続けるしかないのだ。

今日も家族は帰つてこなかつた。母も父も妹も、一体どこへ消えてしまつたのか。警察に相談でもしてみようか、とも考えてみたが、警察に職業を聞かれたときに、私はきっと黙り込んでしまう。それが事実であるくせに、私は自分が狂つた無職の人間であることを他人に話すことを探れていますのだ。生意気にも。

昼間、ハローーワークへ行こうとした。しかし、自分に一体何の仕事ができるのか考えをめぐらせてみたところ、上のような文章を書いてしまつほど狂つている自分にはきっと何もできないだろう、そう思つてしまつたため、私は家から出られなかつた。そこを我慢す

るのが社会人というものだ、ということは頭では分かっている。しかし、体が動かないのだ。実際に無能であるくせに、無能であることを社会から指摘されることを恐れています。これは狂っているとかいないとかではなく、単に私が臆病なだけである。

2011年9月1-3日（前書き）

この日記は架空の人物のものであり、作者の生活とは一切関係ありません。

2011年9月13日

9月13日（火）

午前中に目覚める。すると母の部屋からキーボードを叩く音が聞こえてくる。母はキーボードを押す圧が強いのだ。それにしても、取材旅行に行つたのではなかつたのか。いつ帰つてきたのか。私は一言も声をかけてくれなかつた。午前の早い時間に帰つてきたのだろうか。私の身に一体何が起つたのか、理解ができない。

昼、榎本なごみが訪ねてきた。人が来たのに相変わらず母は部屋から出てこない。編集者が来たときくらいしか応対しないのではないか、とすら思えてくる。それか、宅配便が届いたときくらいか。この日記を付け始めてから、家に一度も宅配便が届いていない。誰も何も、私の家に届けていない、ということになる。我が家は世間から孤立しているのだろうか。それとも普通はそう言つものなのだろうか。

母は翻訳家であり、父は役所勤務の公務員であり、妹は大学生である。妹はともかく、父は母宛の贈り物がたまには届いてもいいものではないのだろうか。ということを榎本なごみに話してみると、「うーん、お歳暮なんかは届くんじゃない？ 年末に期待してみたら？」と返された。榎本なごみは私より世間というものに精通しているようだ。

榎本なごみはビニール袋に食材を入れて訪ねてきた。それは何だと私は玄関で訪ねた。「昼ごはん、作つてあげようと思つて」と言つて、榎本なごみは家に上がりこみ、台所に入り込み、調理器具を勝手に使って料理を始めた。上に書いた会話は、その最中に行われたものである。

榎本なごみが作った料理は野菜炒めだった。とても簡単なもので、私でも材料さえ与えてもうれれば作れそうなものだった。しかし他人の作る料理の味は新鮮で、普通の野菜炒めとは味が違うような気がした。きっと、気がしただけだ。

私は基本、一日一食の生活を送らされている。だから、昼に食事を摂った今日は、夜になつても食欲が沸かなかつた。だから私は、いつも晚餐を取る時間になつても居間に下りなかつた。母は私を呼んだりすることはなかつた。深夜になつても、ドアの前にキノコが置かれている、ということもなかつた。ちなみに晚餐の時間の最中、床に耳をつけてみると、ここ数日姿を消していた父と妹の声も聞こえてきた。ここ数日、家族は一体どうしていたのか。訊いても答えられないだらう。私は家族に無視されているのだから。原因を究明しようとしても、きっと無駄だらう。私は狂っているのだから。きっと幻覚だ。狂つて幻覚を見たのだ。しかし、今日は狂いの原因と思われるキノコを食べなかつた。明日の私は正氣でいられるだろうか。今更正氣になることに、私は耐えられるだらうか。

2011年9月1-4日（前書き）

この日記は作者の日記ではなく、実在の人物・団体・社会とはまったく関係ありません。

9月14日（水）

昼、今日も榎本なごみが来た。昨日まで家族が消えていたことを話すと、「薬を飲み忘れたんじゃありませんか?」と言われた。しかし、私の認識している限りに於いて、病院で処方されているセルシンヒドグマチールに幻覚を抑える作用は無い筈だ。家族が消えていた現象は、幻覚などでない。これは確信を持つて言えるが、家族は自発的に姿を消していたのである。断じて、私が認識できなかつたわけではない。と話すと、榎本なごみは首をかしげ、昼食の調理に戻った。今日も榎本なごみは昼食を作りに家に来ていたのである。そして私たちが昼食を食べ終えるまでの間、母は一度も部屋から出でること無かった。トイレに立つこともしなかつたのである。母は榎本なごみを嫌つてているのだろうか。それとも、何か理由があるのだろうか。

大体、榎本なごみはいつたい何者なのか。先々週あたりから、ドンキホーテで私を付け回して以来私に構うようになつてゐるが、私は榎本なごみのことをほとんど知らない。とりあえず何かしら知つていたほうがいいだろう、と思つたので、まずは年齢を聞いてみた。すると榎本なごみは指を口に当て、「ひみつです」と言つた。きっと言えないような年齢だから言わないのだろう、と私は判断した。自信を持つて言える年齢であれば、それをそのまま口にする筈だ。

今日も晚餐は取れなかつた。榎本なごみの作つた昼食が夜まで腹に残り続けたせいである。昨日に續いて今日もキノコを摂取しなかつたことになる。このままだと、私の狂いも解消されたりするのだろうか。そんなことはない、そんな気がした。なぜなら、さつきまで私は狂っていたからだ。……さつきまで。朝の時点では、私は狂

つていなかつた。夕方からついさつきの深夜にかけてまで、私は狂つていた。私の狂いには時間が関係しているのかもしれない。

2011年9月1-5日（前書き）

この手記は作者の手記ではなく創作であり、作られた代物です。  
今、同じことを何度も書いたような気がします。

9月15日（木）

見知らぬ男に殺される夢で目が覚めた。そして目が覚めた私は、夢の中で私を殺した男が見知らぬ男ではなく、母の担当編集者であることを思い出した。いつたいどうしてこんな夢を見たんだ。そんなにあの編集者の方が怖いのか。と思つていると、階下から声が聞こえてきた。それは母と編集者が居間で打ち合わせしている声だつた。

話がひと段落ついたのか、母と編集者の話はいつたん途絶えた。すると、これはもう「いつものように」と表現してもいいのかもしない、階段を上つてくる音が聞こえてきた。編集者が上つてくる音だろうな、と思っていたらその通りで、編集者はまたしてもノックもせずに私の部屋の扉を開けた。今度は何を破壊するつもりなのか、そんなに私にストレスを与えて何のメリットがあるというのだろうか。愉快なんだろ？ もしそうだとしたら、私も今度やってみようか。

夢の中で見知らぬ殺人者として登場した編集者は何も壞さなかつた。その代わり私に言葉をかけた。「僕は君が生きていることに価値を感じないんだよね」私も同感だったので、首を縦に振った。「狂ってるなら、薬、飲んでるんだろ」「あれ、効かないから。いくら飲んだって無駄だよ。君は気が狂った末に自殺して死ぬ。そして死体から漂う腐敗臭で、死してなお周りの人迷惑をかけるんだ」ならば私にどうしろというのだ。「君、死ぬときは焼身自殺するんだよ。そうすれば死体の処理も楽だし、灰になるから腐敗臭もしない」まるで私が自殺することが決まっているかのような言い方だつた。「決まってるじゃないか。頭狂者の末路なんか、みんな同じだ」

東京？「頭狂」それは私の知らない言葉だった。

晚餐にキノコが出た。赤く、白い斑点のある、味のないキノコを私は今日も食べなければならなかつた。「うどんの具として出されたのだから残すことは容易だつたが、食べないでいるといつも冷たい家族の視線がさらに冷たくなりそうで、口に入れないのでいかなかつた。これできつと、私は明日も狂うのだろう。そしてやがて焼却炉に身を投げ込むのだろう。今日、私は、編集者に頭の中を殴られた。

2011年9月1-6日（前書き）

これは作者の日記ではなく、創作であり、実在の人物、団体、会社名とはいっさいの関係が無いので残念だと作者は思います。

9月16日（金）

起きてから気がついたのだが、昨日、私は母にふれあいサロンに連れて行つてもらえたかった。編集者が来ていたからか。まあ、私をふれあいサロンなんかに連れていいくことと仕事の打ち合わせのどちらが大切かといえば、それはもちろん仕事上の付き合いなのだろうから、仕方がないのだ。大体、私はふれあいサロンに行きたくて仕方がないわけでもないことだし。しかし一度ならず一度も休んでしまった。来週以降、行きづらい。いつそのまま行くのをやめてしまおうか。行つても何も起こらないわけだし。

と思っていたら、母は私を呼び寄せ、車に乗せた。どこへ連れて行かれるのか尋ねてみると、保健センター、と答えが返ってきた。保健センターは毎週木曜日にふれあいサロンが開かれる施設の名前である。一日遅れの今日行つてどうするつもりなのだろう、と思つて尋ねてみたが、母は舌打ちを返した。これからやりたくないことをやらなければならない、そのことを嫌がつてゐる風だつた。今日の母は感情が剥き出しだつた。

保健センターの生活保健窓口に連れて行かれた。母が自分と私の名前を告げると、奥から私に数ヶ月前に狂人手帳を手渡した、私の担当者らしい人物が現れた。そして母は私の狂人手帳を担当者に手渡し、何らかの手続きを始めた。私にもなんだかよく分からぬ用紙が手渡され、氏名と住所の署名を求められた。そして母と担当者は生活補助金の話を少しして、窓口から立ち上がつた。帰りの車に乗りながら、母は「ああ面倒くさい」と呴いた。保険金が入るから良いのではないか、と私は思つたが、「働くのどっちが入つてくると思う?」と返された。入つてくる、というのは、家に金が入つ

てくる、といふことなのか、と問い合わせしてみると、またしても舌打ちが返ってきた。私の理解力の低さにイラついたのだろう、きっと。

あと、これはもうついででいいだろ、今日の晚餐にもキノコが入っていた。昨日より量が多くかった気がする。

2011年9月17日（前書き）

この作品は作者の日記ではありません。実在の人物・団体・組織名とは一切の関係がありません。

2011年9月17日

9月17日（土）

今日は週末であり狂っていない人間が大挙して外に出歩いているので外へ出たくなどなかつたが、借りていた図書の返却期限が来ていたので、図書館に出かけないわけにはいかなかつた。外に出ることも自転車に乗ることも好きではないが、図書館は嫌いではない、人がうるさくないからだ。と思っていたのに、図書館へ到着すると、一人の狂人が暴れていた。図書の返却期限が過ぎていることを注意されたのがきっかけで、図書館員に文句をつけ始め、それがエスカレートしたらしい。私はそそくさと図書を返却して図書館を出た。そして狂人がいなくなるまで家で待機しようと思い、一旦家に帰ることにした。

家に帰ると電話がかかってきた。今日も母は電話に応対しなかつた。なので私が出てみると、やはり榎本なごみからだつた。母は榎本なごみからかかってくる電話を察知することができる特殊能力でも有しているのだろうか。などと考えながら、榎本なごみと少し話した。その際、頭狂というものについて知っているか、と尋ねてみた。「一日前に編集者から言われた言葉だ。『すいません、知りませんねえ』と返された。謝られたのなんて何年ぶりだろう。

図書館へ戻ると狂人の姿は消えていた。まるで最初から狂人など來ていなかつたかのような雰囲気だつた。それが不気味でなんとか気持ち悪かつたが、本を何冊か選んで借りた。私は図書館員に文句をつけたりしなかつた。そうする理由がないからだ。しかし、私は狂っているから、図書館員になんらかの因縁でもつけるべきではないだろうか、と変な義務感に少しだけ駆られた。しかし図書館を出入り禁止にされたら本を調達する手段が無くなつてしまふので、

そうはしなかつた。もしかしたら私はもう狂っていないのかもしない。

そして晩、食事に混ざっていたキノコを食べると、私はあっけなく狂つた。そういうえば私以外の家族に饗される食事にはキノコは入つていいだろうか。母に尋ねてみた。「入れるわけないじゃない、狂うわよ」どうやら母は私だけを狂わせたいらしかった。その真意は分からぬ。なぜならキノコを食べて狂つたからだ。

2011年9月1-8日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、実在の人物・団体・組織名とは一切の関係がありませんよ。

9月1-8日（日）

キノコを食べたくない由を母に伝えてみたといふ、「馬鹿じやないの?」と一蹴されてしまった。なぜ私は母によつて狂わされ続けるのか、なぜ私は来るつていなければならぬのか、それらを尋ねてみてもきつと答えてはもらえないだろう。母は私に冷たい。世界が私を貶めようとしている。

昼ごろ、母は私に「部屋を出るよ」と言つてきた。何があるのかと思ひきや、なんと母と編集者の会食に出席させられた。こういうことは一人きりで行つべきではないのか。それと私は編集者と顔を合わせたくない。母と編集者と私は、ファミリーレストランで昼食を摂つた。母と編集者は仕事の話を交えながら和やかに話し、編集者は私がいないように振舞つた。安心はしたが、母も同様だつた。母も私がいないうに振舞つたのだ。私はどうしてこの場に呼ばれたのか、何度も尋ねた。しかし一人は私を無視し続けた。これは何の罰なのだろう。

たつた一行動だけ、会食中に母が私に干渉して來た。それは、ジップロックに入れられた刻んだキノコを、私が注文したオムライスに載せる、というものだった。食べる、ということなのだろうか。そう尋ねてみても母も編集者も私のことを無視した。なので私はキノコ」とオムライスを食べた。それから狂つたので、会食がどう終わつて私と母はいつ家に戻つてきたのか、わからない。

晚餐は饗されなかつた。なので夜は、本を読んでいた。図書館で借りた本の中に、「頭狂」というタイトルの本があつたのだ。作者はバナナ・バナナという、国籍不明の覆面作家だつた。いや、これ

は小説である、とも本には書かれていなかつた。もしかしたらノン  
フィクションかもしだれい。ちなみに訳者は母だつた。

2011年9月1-9日（前書き）

これは作者の日記ではなく架空のものであり、実在の人物・団体・組織名とは何の関わりも持つていません。

2011年9月19日

9月19日（月）

昼間、いつものように何もやることがないので本を読んでいるとベランダにサルが現れた。私は猿の見分けがつくわけではないが、今日現れたサルは、なぜか頭が良さそうに見えた。この間サルと話したからそういう感覚に目覚めたのかもしれない。そこで私は、サルに話かけてみた。お前は本を読むか、と。「お前、とはご挨拶ですね」とサルは言った。そこで今度は丁寧語に直して、同じことを問い合わせた。「読みますよ。私は本を読むサルなのです」サルは今度は答えてくれた。

動物園に戻らないのか、と私はサルに尋ねてみた。もちろん、応対してほしいので丁寧語で。「私が動物園から逃げ出したサルだと思っているのですか」私は8月に見た動物園から逃げ出したサルの映像を鮮明に覚えているわけではない。しかし、目の前にいるサルは、動物園から逃げ出したサルなのではないか、と感覚的に、そう思つたのだ。日本で野生のサルなんかそう生息していないだろうし、日本で会える野生のサルは大体が動物園から逃げ出して野生化したサルだろう。そうも思った。「もう少ししたら、動物園に戻つてやろうと考えていますよ」とサルは言った。そして何も言わずに、ベランダから出て行つた。話相手のいなくなつた私は、読書に戻つた。

晩、いつものようにキノコが出た。この味のない赤くて白い斑点のあるキノコは一体何という種類のキノコなのか、と母に尋ねてみると、「マザーよ」と何の困難もなく答えてくれた。マザー。母。今日はなした相手はサルと母。昨日話した相手は、編集者と……いや編集者は私のことを無視し続けたから、母のみ。私の生活には母親というものが密接に関わつているような気がする。それから、こ

れからマザーと二種類のキノコについて検索してみようと思つ。

2011年9月20日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく完全にフィクションです。そういう決まりっています。

9月20日（火）

我が家には私の部屋と母の部屋にそれぞれパソコンがあつて、私の部屋のパソコンは私がまだ狂つていなかつたときに買つてもらつたものだ。このパソコンが壊れたらきっと買い換えてなどもられないだろう。そして一日の大部分の時間が今よりもっと空虚なものになつてしまつだらう。パソコンはいづれ壊れる。ほかの電化製品より早く壊れる。私はそれを恐れている。毎日緊張しながら慎重にパソコンに触れている。

そんなパソコンが今日、異常動作を起こした。インターネットブラウザが立ち上がらなくなつたのだ。これでは検索ができない。インターネットで「マザー」を検索できない。

不安。空虚。嫌な静寂。に襲われた私は、台所の冷蔵庫から酒を盗み飲んだ。そして酔つた私は、自転車を駆けていた。空は曇つていた。行先は図書館だつた。図書館で植物辞典を開き、「マザー」について調べるつもりだつた。

しかし図書館では、植物辞典がすべて本棚から消えていた。持ち出し禁止なので貸し出し中ということはないのだが、誰かがどこかの席で開いているのだ。仕方がないので私は全然興味のない女性作家のエッセイを読みながら植物辞典が本棚に戻るのを待つた。エッセイには女性の本音が書かれていてどうでもよかつた。あと酔いが回つていたため内容はあまり頭に入つてこなかつた。それでもどうでもよかつたことが思い出せるくらいだから、相当どうでもいいことが書いてあつたに違ひない。

結局、閉館時間まで粘つてみても、植物辞典が本棚に戻つてくることはなかつた。一体どこのどいつがこんなに大量に植物辞典を開いているんだ、と腹を立てながら、私は思った。「マザー」はキノコである。キノコは菌類だ。植物辞典に載つているのだろうか。確かめたかつたが閉館時間になつたので図書館から出なければならなかつた。

晚餐にいつものように「マザー」が出た。食べた。夜になつてもまだ酔いの余韻が残つていた。酔つて狂つて、私は気持ちが悪くなつた。しかし吐かなかつた。トイレに行ってみたが、吐けなかつた。

2011年9月21日（前書き）

これは口述とこう形式を使って書かれていますが、  
はありません。フィクションであり嘘っぽいです。  
作者の口述で

2011年9月21日

9月21日（水）

朝、急に吐き気に襲われて、ベッドから飛び降りてトイレに飛び込んで大量の昨日から残っていた酒と胃液を吐いた。どうせなら夜に食べたキノコも吐いてしまったが、ほとんど消化されてしまつた白いなんだかよくわからない物体しか出てこず、キノコを吐いたという実感はなかった。現に私は今、狂っている。

昼間、病院へ行った。狂っているのを治療するため、といつも田で通つてはいるが、一向に狂いが治る気配はない。今日の診察でも狂いが治る兆候は見られない、とのことだった。先生に、ブラウザが壊れてインターネットができないことを話した。他に話すべきこともなかつたからだ。「じゃあ、読書でもしてたらどうだ?」と言われた。言われなくてもそうするしかなかつた。「それが嫌だつたら、何かお金のかからない趣味でも見つけるとか」それはインターネットで検索しなければ探し出せそうになかつた。私には自由に使えるお金がない。大抵の趣味にはお金がかかる。そしてお金のかからない趣味とは何か。インターネットで探さない限り、そんなものは永久に見つからぬような気がする。

帰り際、受付で紙をもらつた。いつももらつてているはずなのに、その紙の名前が思い出せなかつた。狂いが進行しているからかもしれない、と思った。紙には「処方箋」と書かれていて、それを見てやつと紙の名前が思い出せた。この物忘れはなんだらう。人間としての退化か。狂っているせいで変な生活を続けていため、人間として退化しているのか。

晩に、キノコの「マザー」が入つたスープが出された。私はそれ

を黙つて食べた。  
穴に向けてみた。  
たかつただけだ。

食べ終えてから、トイレに入つて、顔をトイレの  
吐けそうな兆候は見られなかつた。兆候、と書き

2011年9月22日（前書き）

これは作者の日記ではなく、実在の人物・団体・組織名とは何の関係もありません。

2011年9月22日

9月22日（木）

今日はふれあいサロンへ連れて行かれた。インターネットブラウザが壊れているため、他人の言葉を聞く数少ない機会となつていて。私は、誰とも話さずに本を読んで過ごした。なぜなら、狂った私は他人と話す技術がないからである。しかし、私以外のふれあいサロンへ来ている狂人たち、ほとんどが他人と会話でできている。それがどうしてなのか、私は狂っているので分からぬ。しかし他人と喋れているふれあいサロンの参加者たちも狂っている。これはどういうことなのか、私は狂っているので。

帰りの車の中で、パソコンのブラウザが壊れたことを母に伝えた。当然のことく無視された。最近はあまり無視されていないので話が通じるのではないかと期待してみたが、やはり親というものは狂った子供には厳しいものなのだろうか。私は親になつたことがないし、きっと今後の人生で親になれる機会も無いだろうから永久にわからない。

帰ると編集者が待ち構えていて、母と編集者が打ち合わせを始めた。私は二階の自分の部屋でじつとしていた。やがて階下から聞こえてくる言葉が止まり、誰かが階段を上つてくる足音が聞こえてきた。きっと編集者だろう、と諦め半分に予想していると、案の定編集者で、やはりノックもせずに私の部屋のドアを開けた。「パソコン、壊れたんだって」どうして知っているのか尋ねると、母から聞いた、とのことだった。「じゃあいらないね」と編集者はケーブルを引っ抜いてテーブルから落とした。私の部屋の床には、腕時計を壊された時とは比較にならないほど大量の残骸が散らばった。編集者は片づけもせずに部屋を出て行つた。

晚餐の席で、母に「そろそろ部屋を掃除しなさい」と言われた。私はいつものように食事に混ざっていたキノコを食べた。そして狂つた。部屋の掃除どころではなくなった。

2011年9月23日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、実在の人物・団体・菌類とは何の関係もありません。

9月23日（金）

榎本なごみが久々にやつてきた。いつものように、母が仕事のため部屋に閉じこもっている時間を狙い絞るように。そして榎本なごみはノートパソコンを持ってきていた。神かもしれない、と私は思つた。もしくは天使か。そうでなければ不審者だ。ストーカーという考え方も思いついた。しかしどして私のパソコンが破壊されたことを予知したようにパソコンを持ってきたのか、と私は榎本なごみに直接尋ねた。「あなたのパソコン、旧式でしたから。可哀そうになつて、買って来ちゃいました」買つて来ちゃいました、で買えるような金額のものではないだろう。「私、お金持ちなんですよ」そういう言つと榎本なごみはにっこりとほほ笑んだ。私は一つの可能性を頭に浮かべてみた。榎本なごみと編集者が結託している、という可能性だ。

早速ノートパソコンを、かるうじて無事だった電源とLANケーブルにつなぎ、セットアップCDを使ってインターネットに繋ぎ、「マザー」という名のキノコについて検索する。これをすべて、榎本なごみと一緒にやつた。その結果、何も出てこなかつた。インターネットの世界には「マザー」というキノコは存在しないらしいのだ。「お母さんが嘘をついたんじゃありませんか？」あの人、あなたの味方じゃないみたいですから「そうか。ところで榎本なごみは母と顔を合わせたことも無い筈である。「あなたからお話を伺う限りでは、そういう気がしてなりません」そう言つと榎本なごみは憤慨したような表情を作つた。ものを貰つておきながら、私は失礼なことに榎本なごみに疑念を抱いた。

部屋の破壊されたパソコンの残骸は、未だにそのままにしてある。

ごみ箱に突っ込もうと思つたが、デスクトップのモニターが分厚いパソコンだったので、入りきらなかつたのだ。

それから、榎本なごみが帰つてから母によつて出された晩餐にはいつものようにキノコが出た。昨日と同じく、食べた後は狂つてしまつて片づけるどころではなかつた。しかしインターネットくらいはできた。狂つてもできるのだ、インターネットというものは。キノコ、マザー、という検索ワードの間に、サル、という思いつきの言葉を挟んでみた。すると一件ヒットした。「隠しページによるこや」とそのページの頭には書いてあつた。キノコ関連で隠すようなことがどこにあるのか、と私は思つた。

2011年9月24日（前書き）

この作品は作者の口述ではありません。 フィクションです。

9月24日（土）

家族が動物園へ行つた。私は家にいた。特に動物園に行きたかったわけではないし、動物園に行きたいか、と尋ねられたわけでもない。それでも家族が私を置いて動物園に行つたことは分かつた。部屋でインターネットをやつていると、階下から家族の会話が聞こえてきたのだ。その話の断片をつないでみると、これから自分たちだけで動物園に行く、上にいる穀瀆しには伝えなくてもいいだろ、放つておこう、という内容の会話だつた。その間の戸締りをどうするつもりなのかについては、何も聞こえてこなかつた。私に家から出ないよう言わなくてよかつたのだろうか。とにかく、家族は動物園に行つた。私を置いて動物園に、恐らく遊びに行つた。遊び以外の目的で動物園に行く理由が分からなかつたから、そう思ったのだ。

これはチャンスだつた。私は編集者に破壊されてからずつと部屋に残つていて、ごみ箱にも入りきらないので捨てられないパソコンの残骸を、家族がいない隙に一階のごみ箱に捨てるにした。少しずつ分解して自分のごみ箱に入れ、下のごみ箱まで持つて行つてこれを映す。これを数度繰り返すと、下のごみ箱もいっぱいになり、私のごみ箱にもその余りが出た。自分のごみ箱に残つた余りの残骸については、後日どうにかすることにしよう。

インターネットでもう一度キノコ「マザー」について調べてみることにした。昨日と同じく「キノコ サル マザー」で検索して昨日の晩に見たページを見てみた。そこによると、このキノコを食べて自失した人がいる、このキノコを食べて動物と話せるように錯覚した人がいる、このキノコを食べて以来狂人として暮らしている人がいる、という、死にはしないが恐ろしい毒をもつたキノコである、

と書いてあった。現在は絶滅している、とも書いてあった。

じゃあ、このキノコはなんだろう、と晚餐に出されたキノコについて私は思った。晚餐は母が帰り際に買ってきたほつともの弁当だった。その「ご飯に、無理やり味のないキノコが混ぜ込んでもった。このキノコの名前はマザーで本当に合っているのか、と母に確認をとつてみた。「マザーで合ってる」と母は答えた。しかしインターネットで調べたらマザーというキノコは絶滅している、と私はどの方向にか分からないがとにかく念を押してみた。すると母は「あんたの分のプロバイダ、解約しておいたほうがいいわね」と言い出した。それは勘弁してください、一度と調べないから、と私は母に頼み込んだ。

2011年9月25日（記録用）

これは作者の口述ではなくフィクションですよフィクション。

9月25日(日)

早朝、私は誰も起きないうちに一階に下りて、冷蔵庫から酒を盗み飲んだ。日曜日の私にはやることがなく、やることのない私は酒に狂つて眠つておくくらいしか世間への迷惑をかけずに過ごす方法がないのだ。もちろん、世間への迷惑とかのくだりからあとは後付けのきれい」とである。狂つた私に世間への迷惑がどうのいつの、そんなことをどうに考える能力などない。

午後、そろそろ読書にも飽きてきたこの、猛烈に酒が飲みたくなつた。アルコールというものは中毒症状があるのかもしれない。そういう点に於いてはおくすりと同じようなものなのかもしれない。そう思つた私は、台所へと向かおうと何回か思つたが、今は昼だし、家族がいる可能性がある。家族の目の前で酒を盗み飲むことは、さすがに狂つた私でもできない。なので私は必死で我慢した。手が震え、厚くもないのに汗が出た。酒はやめておいたほうがいい、と私は思つた。

夜。晚餐に於いて、食事を前にした私は、食前酒を飲んでもいいか、と許可を取ろうとしてみた。もちろん許可是下りなかつた。「あんた、酒にまで狂うつもり?」とすら言われてしまつた。キノコを食べさせて狂わせているのはお前だろ?、と言い返したくなつたが、酒に狂つているのは事実だし、私の発言権はこの家では猛烈に小さいのだから言わないでおいた。酒に振り回された一日だつた。

2011年9月26日（記録用）

この作品はフィクションであり、作者の立場などでは断じてあります。断じて。

2011年9月26日

9月26日（月）

キノコを食べた直後はあまりにもあまりな状態に陥るので自分でも狂いすぎているのがわかるから、その時間に日記は書かないのだが、それ以外の時間である現在、日記を書いている私は、どの程度狂っているのか、自分ではわからない。狂っていることだけは自覚できるのだが、その度合いが分からぬのだ。だから、この日記に書いてあることも、どの程度真実なのか分からぬ。私の主観で変なものが見えていて、それが幻覚だと気づかないまま日記に書いてしまっているかも知れない。家族は私が狂うより前から居たのは分かつているが、榎本なごみも、サルも、私に危害を加える編集者も、実在しているという証拠は私の中にしかないのだ。狂っている私の中にしか。

もう調べないと母と口約束したにもかかわらず、キノコの「マザー」が気にかかった。絶滅したとネットには書いてあったキノコをどうして母が持っているのか。図書館へ行って調べようとしてみた。しかし月曜日だったので閉館日だった。東京には月曜日でも開館している図書館が存在するらしい。東京がうらやましい。宮崎が疎ましい。

晚餐の直前、酒の発作が来た。体が急に酒を欲しがったのである。しかし盜み飲める時間ではなかつたので、我慢するしかなかつた。我慢しながら味のないキノコの入つた晚餐を黙つて食べた。この症状がとても嫌だ。酒の発作が起ると気分が悪くなる。しかも吐き気が伴わない。つまり、食べると狂うキノコを吐くことができないのである。苦しい。

2011年9月27日（記書き）

いの田舎はファイクションであり、作者とは何の関係もないまま  
ん。いやこませんとも。

9月27日（火）

今日は狭間の日だ、なんてことを思った。今日は何も起こらなかつたからだ。こんな日の日記には何を書けばいいのか、なんだか悩むが、読むのは自分しかいないのだから、「今日は何事もなかつた」と書けばいいのではないか。でもそんなことを一度やつてしまふと、明日からも日記が一行で終わってしまう日が続いてしまう気がする。だからこうしてだらだらとわざわざ「今日は何事もなかつた」を引き延ばしている。

少し考え方をしてみた。榎本なごみとは何者なのだろう。嫌いではない、私を邪険に扱わないからだ。むしろ構つてくれてうれしい。しかし何者なのだろう。何らかの形で調べられるのなら調べたい。しかしネットで検索してもわかるわけがないだろうし、じゃあハローページ？ うちにハローぺージなんてあつただろうか。探してみたが見つからなかつた。

晚餐の席で、母に何気なく尋ねてみた。最近は何があつたのか知らないが、母は普通に言葉を交わしてくれる。いつものように味のないキノコを口に入れながら、母に尋ねてみた。編集者の名前は、一体なんというのか。「榎本なごみっていう名前よ」母は親切にも編集者の下の名前まで教えてくれた。しかし編集者と榎本なごみの名前が一緒だと日記に書いていて混乱するので、といふか現在私は混乱しているので、これからも編集者ることは編集者と表記することにする。それにしても、一つの意味で何者なんだ、榎本なごみは。

2011年9月28日（初書き）

この話は作者の口述ではなくフィクションです。虚構です。

2011年9月28日

9月28日（水）

一週間に一度は水曜日に病院へ行かなければならぬのだが、今週は通院の週ではないので今日は家にいた。ずっと家にいた。家から一歩も出なかつた。昨日も一歩も出なかつた気がする。こんな生活を続けていても太つたりしないのは、母が晩しか食事を出してくれないおかげなのだろう。感謝すべきか。

昼間、榎本なごみが家に来た。編集者のほうではなく、私に親切なほうである。この親切に私は甘えているのだろう。こう書くことにすごく抵抗があるが、私は榎本なごみの親切に甘えている。もうすぐ依存になるだろう。私は依存しやすい性格をしている、と自覚しているから。

そんな榎本なごみは私に行つた。「外を歩いてみよ。血行が良くなつて精神的にも健康的になれるよ」その提案を、私は渋つた。家から出て、幼少期からずっと過ごし続けている近所の風景を眺めながら歩き回るなんて、考えただけでうんざりする。「やってみよう、一歩踏み出せば結構行けるもんだよ」私は榎本なごみに礼を言いたくなつた。こんなにも私のことを考えてくれる人物なんて、きっと今現在のところ榎本なごみただ一人だろう。私は彼女に頭を下げて、彼女の提案を断つた。「そつか」と榎本なごみは「いつでもいいから、いつかやつてみてね。ウォーキング」と言い残して、彼女は去つていった。

晚餐の席で、母に東京に行きたいと言つてみた。すると母は私を無視した。さすがにこの頼み事は都合が良すぎる。私は動物園に連れて行かない程度には、家族に冷たくあしらわれているのである。

大体今から東京に引っ越すとなると、福祉の面倒な手続きをもう一度やらなければならない。それでも、旅行で行ってみるくらいはできないうだろかと、私は醜く食い下がった。母は私に「キノコを食べなさい」と言った。

2011年9月29日（前書き）

この出版はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。  
かつて十円ですね。でも何の関係もありません。

9月29日（木）

今日はふれあいサロンに連れて行かれた。そこでは、最近働き始めたことを自慢げに話している人物がいた。その仕事の内容とは、ビル清掃のアルバイトらしかった。サロンに集まつた人々から、人々に「すごい」「すごい」と言っていた。ふれあいサロンに通うような狂人たちまともに働くことをとても困難なことと設定している。私だってそうだ。だから自慢げに話していた人物は、私より立派なのだろう。私より年上だし。私より太っているし。

その人物に気力を大量に使って話しかけて、オセロ（ふれあいサロン）には数種の盤ゲームが常備されている。暇つぶしのためのだろ（う）つをやつてみた。負けた。オセロの勝ち方とは、角の隣の位置に自分の色の意志を置かないことと、相手に自分の色を囲ませるようになることだと、インターネットで見たことがある。その人物もその勝利法を知っているらしい石の置き方をしていた。

晩に家に帰り、いつもの味のないキノコが入つた晚餐が終わつた後、待望の吐き気が襲つてきたのでトイレに入つてみた。しかし吐き気はこみあげてくるのになかなか吐けなかつた。私にはこの吐き気の原因が分からなかつた。これを書いている今も、気持ち悪さは続いている。数分おきに込み上げてくる。でも吐けない。この気持ち悪さが続く限り、私は歯を磨くことができない。食べ物と箸以外のものを口の奥に突つ込むとえづいてしまうからだ。だから今の私の口の中は非常に不潔である。

2011年9月30日（前書き）

この物語はフィクションであり、事実・実在・実存などとは何の関係もありません。

2011年9月30日

9月30日（金）

一昨日榎本なごみに言われたことをずっと気にしていたわけではないが、忘れる理由がなかつたので忘れなかつた。なので私はそれを忘れるために、というかやさしくしてくれる人の言いつけを守るために、一人でウォーキングに出た。ネットでも吐き気というものは胃の血行が悪くなつていてるせいだと書いてあつた。最近、常に腹の底で吐き気が渦巻いてるので、少しでも歩くことでこの症状が改善されないか、と期待して私は近所を歩きに出たのだ。でも晚餐後のキノコを吐くための吐き気は必要だと思つている。

近所の情景は見れば見るほどうんざりした。何も思い出というものがなきからだ。幼少期、私には友達がいた。今は狂つている私も、子供のころは友達というものが存在していたのだ。ただ、中学校に入学するとともにここに引っ越ししてから、私は友達が作れない体質になつていた。転校を機に人見知りになつたのかもしれない。それとも幼少期の友達は、親同士が仲が良かつたからそれに影響されるように付き合つっていた友達だつたのか。新しく引っ越しした先で、母は友達を作らなかつた。ずっと部屋にこもつて翻訳作業に精を出している。いや、子供が中学に入つてから親同士が仲がいいからと言つて友達になつたりする相手なんかできるものだろうか。そんなわけないな。歩いているとそんな考えが次々と浮かんできて、私の気は沈んだ。ついでに吐き気も沈んだ。

晚餐後、母は誰かと電話していた。きっと編集者だろう。電話口で時折「榎本さん」と言つていたから。母と編集者は友達と呼べる関係を築いているのだろうか。そんなわけないだろう、きっと。仕事相手に友情を感じるなどということは、多分、無いと思う。私が

仕事をやっていた時も、そうだったからそう思ったのだ。ところで  
私と榎本なごみは友達だろうか。これは違う、とはつきり断言でき  
る。何故なら、私は榎本なごみに対して何もやっていないからだ。  
友達というものは何かをやつたりやり返したりするものだ、と私は  
知っている。

2011年10月1日（記書き）

これは作者の口述ではなく、フィクションです。

2011年10月1日

10月1日（土）

今日は朝に目が覚めたのだが、起きると寒かつた。冷たい空気を大きく吸い込むと、吐き気がこみ上げてきた。私の胃は弱くなっているのかもしれない。何が原因なんだろう、最近飲んだ酒のせいだろうか、と思いながらトイレに行つて、便座に向けて腰を曲げてみた。しかし吐けなかつた。昨晩飲んだキノコもとっくに消化してしまっているだろうし、今更吐いたって胃液しかでないだろうことは分かつっていた。それでも吐き気は引かなかつた。

昼ごろ、屋内が暖かくなるとともに、吐き気は引いて行つた。と同時に、榎本なごみが訪ねてきた。そしていつものように私と榎本なごみは居間に入ったのだが、そこへいつも榎本なごみが来ている間は部屋でずっと仕事をしている母が部屋から出て、居間に入つてきて、榎本なごみと顔を合わせた。初対面である。初対面のはずである。母は榎本なごみに向かつて、「あら、榎本さん、来てたんですね」と言って、水を飲んで部屋に戻つていつた。私は榎本なごみに、何も訊ねなかつた。怖かつたから何も訊ねなかつた。あの編集者と榎本なごみが何らかの関係性を持つているかもしれないことを、想像するだけで恐ろしかつた。恐ろしさのあまり、私は今日榎本なごみと話した内容を忘れた。今思い出そうとしても思い出せない。

それなのに、母は晚餐の席で言つた。「榎本さんがあんたを訪ねるなんて、珍しいわね」と。私はきっと狂つてているのだ、だから母がそんなことを言つてているように聞こえるのだ。私はそう決めつけて、晚餐に混ざつていたキノコを搔き込むように口に入れた。そして飲み込んだ。そして部屋に戻つて狂つてそれが少し正氣に戻つて、

今これを書いているのだが、本当に何者なんだ、榎本なごみという編集者は。  
少女は。榎本なごみという編集者は。

2011年10月2日（前書き）

これは作者の日記ではなくフィクションであり、登場する人物・団体・風景は架空のものです。

10月2日（日）

朝、早く目覚めたので一階の居間で朝のアニメを見ていた。見て見ていたわけではなく、今日も始まるであろう退屈な一日の時間を潰すために見ていたのだ。こう書くと言い訳臭くなつて嫌だが、事実である。それでアニメを見ていると、妹が一回に下りてきた。テレビの音がうるさくて目が覚めたのかと思っていると、妹は私の傍らからリモコンを取り上げ、電源ボタンを押した。すると朝の一週間を振り返る系のニュース番組が始まった。何が起こったのか、私には理解が及ばなかつた。なので、きっと私が狂っているせいでこんなことになつてているのだろう、と強引に自分の中で納得することにした。

吐き気が昼になつても收まらないので、仕方なく歩きに出た。見たくもない近所の風景から少しでも離れるため、少しだけ遠出することにした。と言つても前回より少し長い距離歩くだけである。家から40分近く（時計も携帯も持っていないので体感時間）歩くと、私がかつて通つっていた高校の前に到着した。その高校の校舎の中に、榎本なごみと言えなくもない影を見かけた。ような気がする。しかし今朝のテレビのこともあるから、これも私の狂いが見せた実在ではないものだったのかもしれない。

晚餐の席で、私はテレビの電源を入れてみた。すると夕方のアニメをやつていた。母にテレビが今点いているか確認をとつてみると、「ついてるわよ」と帰ってきた。じゃあ私が今朝見ていた番組は何んだろ？、という思いが頭の中を過つたが、それについて深く考えるには私は既にキノコを摑りすぎしていて、頭の中が狂い始めていたのでそれは不可能だった。

2011年10月3日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、完全な純然なフィクションです。

10月3日（月）

危うく一日日記を飛ばしそうになつたことをきっかけに、日記を書き始めた当初の日記を読み返してみた。すると、今より長く書いていることに気が付いた。私は今、日記を書くことを面倒くさがっているのか。他にやることもない癖に。それとも狂っているのが進行しているせいで書ける文章量が減っているのか。そんなわけがないだろう。何でもかんでも狂っているせいにするのはよくない。こんなことを考えてしまふのは私が狂っているせいだろうか。

昼間、榎本なごみが来た。学校はいいのか、と尋ねてみた。すると榎本なごみは、「私、学校行つてないよ。あなたと同じところがあるから」と言った。一昨日高校の校舎内で見た榎本なごみは幻だったのか、それとも私の見間違いだったのか、そもそも榎本なごみは私に対してため口を使うほどフランクな性格をしていたのか。何もかもが思い出せなかつたのは私が狂っているせいだろう。いや、何もかも狂っているせいにするのはよくない。それともこんなことを考えてしまうのは私が狂っているせいだろうか、いや、何もかも狂っているせいにするのはよくない。

何もかも狂っているせいにするのはよくない。だから晚餐に今日もキノコが出たが、それを食べなければならぬと考えてしまうのも自分が狂っているせいだと考えるのはよくない、と思い、普通に食べた。するといつものように食後に大きな狂いがやってきて、意識が飛んだ。意識が飛んでいる間、自分が何をやつていたのか全く思い出せない。これは私が狂っているせいだろうか。いや……

2011年10月4日（前書き）

この日記は作者の現実とは一切の関係がなくフィクションです。  
すべて想像であり、作者の頭の中の出来事であります。

10月4日（火）

昨日、榎本なごみが来ていた。その際、キノコ「マザー」について調べてもらうよう頼めばよかつたのではないか、と脳前に起きた私はぼんやりとした頭でそう思つた。自分で調べることは母に禁じられているなら、他人を使えばいいのではないか。しかし、こんなにも榎本なごみに依存するように頼るのは、いつか榎本なごみが家に来なくなつたときにつらくなつてしまふから控えるべきではないのか。このつかり気を抜くと依存してしまう癖は、私が狂つているから出でてくるのだろう、いや、何もかも狂つてているせいにするのはよくない。このフレーズは昨日の日記に異様なほど回数登場している。昨日の私には何があつたのだろう。

昨日の私は今日の私より狂つていたような気がする。まず、吐き気がすこかつた。ほとんどの思考が吐き気に持つて行かれており、まともな想いというものが浮かんでこなかつた。そんな気がする。しかし、それは狂つていたと言つただろうか。単に体調が悪かつたせいではないのか。

吐き気がずっと体を襲つていた原因は明らかである。飲酒が原因である。ここ数日、私は日記には書いていないがほぼ断続的ともいえるタイミングで、家族の目を盗んで冷蔵庫から酒を盗み飲んでいた。酒は恐ろしい。一度飲み始めると抜けてきたころに再び飲みたくなつてくるし、寄つている間は驚くほど退屈な時間が早く飛び、つまり便利すぎるのだ。もし飲みすぎると吐き気がするという副作用がなかつたら、私は永久に酒を飲み続けて、狂つていること以外の理由で入院していたことだらう。アル中とかで。しかし、狂つている私を母は、いや家族は金のかかる入院などというものをさせて

くれるだろうか。いくら福祉で親の財布に金が入っているとはいえ、入院するとその分の金など吹っ飛んでしまう。アル中で入院しても、狂人用の生活補助は適応されないのである。

今日は今日のこととほとんど書いていない気がする。しかし、こんな日もあるものだ。今日は昼前起きて一度寝し、夕方の前に起きて一度寝し、キノコ入りの晚餐を食べて狂つて意識が飛んだ。私は今日は何回寝ているだろう。こんなものは生活とは呼べない。だから今日は私は生活していない。だから今日は日記なんか書くべきではなかったのではないか？ 起こったことと言えば、母に「マザー」について自力で調べることを許可してもらおうと晚餐の席で頼み込んでにべもなく却下されたことくらいだ。

2011年10月5日（記書き）

この出版物はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。

2011年10月5日

10月5日（水）

今日は通院日なので病院へ行った。ちなみに、病院代は病院へ向かう前に母に手渡される。余分な金額は一切ない。自動販売機で水を買うことすらできず、私は病院へ行って40分待たされて5分の診察を終えて処方箋を貰つて家に帰る。今日もそうだった。しかし、その帰り道、私はいつもと違うことを思った。今日はまだ帰りたくない、と思ったのだ。

今日は家に編集者が来ているかもしれない、そんな気がした。大体編集者が来るのは水曜日か木曜日だ。そして編集者が家に来ると、母との打ち合わせを終えた後、私に何らかの危害を加えていく。それは嫌だ。避けたい。だから私は帰りたくなかつた。編集者が家を出るまで、自分が家の外で時間を潰しておこう。そう思った。

私は歩いた。他に何もできなかつたからだ。自動販売機で水を買う金額すら残つていなかつた。薬局による前に薬を受け取らずに薬代を使つてしまえばよかつた、ということに気づいたのは、薬局で会計を済ませた後だつた。遅かつた。狂つているから頭の回転が鈍くなつてゐるのだ。だから私は歩くしかなかつた。見飽きた病院から家への道を行つたり戻つたり曲がつたり曲がらなかつたりしながらただひたすら歩き続けた。すると民家の塀の上を四足で歩くサルを見かけた。

サルは私を見つけると、提案した。「そろそろ動物園に帰ろうと思つのですが、どうでしょう、私に何か筆記用具を貸していただけませんかね？」私はサルの見分けがつくほどサルに詳しくないので、それが何度か家のベランダに現れたサルなのかそうでないのか判別

できなかつたが、こうして人間の言葉でなれなれしく話しかけてくるのだから、きっといつものサルだろう、と判断した。そして私は訊ねた。どうして筆記用具を借りたいのか。「小説というものを、書いてみたいんですよ」それなら動物園で飼育員に人間の言葉で話しかければいいのではないだろうか。ものを書くサル。きっと動物園の新しい売りになるだろう。「それができれば、いいんですけどねあなた以外に、話が通じないんですよ」文脈が通じないのか、言葉が通じないのか、私にはわからなかつた。しかし分かることは一つだけあつた。私の言葉は人間には伝わらない。

病院で、私の言葉は医師に伝わらなかつた。診察が始まると、医師は「最近、なにか変つたことはあつた?」とフランクに話しかけてきた。私は自分なりに精いっぱいの言葉を使って、最近あつたことを話した。すると医師は、「そうですか。じゃあお薬出しておきますんで」と私を診察室から追い出した。私の話は他人には通じていない。榎本なごみや編集者は私の妄想の產物かもしれないのわからない。

だから筆記用具は貸せない、と言うと、サルは去つていった。サルは動物園に帰るのだろうか。疲れたので続きは明日書く。

2011年10月6日（記書き）

この田畠は作者の創作であり、フィクションです。同じ意味の言葉を一度繰り返すほどフィクションです。

10月6日（木）

昨日の続きから書く。夕方になつてサルと別れて家に帰ると、部屋が荒らされていた。今日は編集者が来ていたのか、と母に尋ねてみると、来ていた、と答えが返ってきた。どうして私の部屋を荒らしていたのに、きつとここまで荒らすと大きな音が立つただろうに、どうして止めなかつたんだ？　と母に尋ねてみると、「じゃあ、あんた、止めてもらえるだけ働いてる？」と尋ね返された。私は何も言い返せなかつたが、働いていないだけでどうしてこんな扱いを受けなければいけないんだ、と（向こうにとつて）理不尽な怒りも湧いてきた。しかしそれをぶつける相手はどこにもいない。病院にもいない。

今日はふれあいサロンに連れて行かれたが、そこにも怒りをぶつけていい相手はいない。ふれあいサロンの狂人たちが、自分より立派な人間に見えた。部屋を荒らされて心が弱つっていたせいもあるだろう。ふれあいサロンでは、名前を知らない一人の中年女性に「あなた、病んでますね」と言われた。病んでなければこんなところに寄り集まつたりしないだろう、と思ったが、それをわざわざ伝えるのも面倒だった。

晚餐を終え、部屋に戻り、そしてようやく荒らされた部屋の片づけを始めた。どこをどう荒らされて、どこをどう片づけたのか。それを詳しく書くと、日記がとても長いものになつてしまつ。それは手首が痛いことだし、自分がこの惨状（これを書いている時点でまだ片づけは終わっていない）を、「荒らされていた」という文字列を見ただけで思い出せればそれでいいので、詳しくは書かない。とにかく部屋は編集者に荒らされていた。編集者、榎本なごみに荒ら

されていた。あの人物以外、わざわざ部屋に上がりこんで荒らすような人物を、私は知らない。世界中にはいくらでも居るかもしれないが、名前を知っているのはその一人だけだ。

2011年10月7日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物・団体・事件とは一切関係ございません。

2011年10月7日

10月7日（金）

ほとんどすべてが荒らされた部屋の中で、パソコンだけは無事だった。前回は編集者にパソコンを壊されたというのに、今回の編集者はどんな心変わりがあったのだろう。それとも、一度手を付けたものには一度手を付けない、などという個人的なルールもあるんだろうか。とにかくノートパソコンは無事だった。編集者と同じ名前の、榎本なごみという人間からもらったノートパソコンだけは平氣だったのだ。

パソコンを立ち上げてみると、「マザー」という文書ファイルがデスクトップに作られていた。そんなもの、作った覚えはなかった。誰かが作ったとしたら、編集者か。きっとろくなことが書いてあるわけがない。そう考えた私は、そのファイルを無視することにした。削除はしなかった。今後、読みたくなるかもしぬなかつたからだ。私は編集者に興味がない、わけではない。あいつは一体何なんだ、という疑問は頭の中にいつもこついている。

そんな疑問が残る頭の中の、残りの大半は吐き気に支配されていて、今日も吐いた。確か三回くらい吐いたと思つ。三回のうち二回は胃液しか出なかつた。残りの一回は飲んだばかりの酒が出た。部屋を荒らされるという惨事が起こつたのだ、飲まずにやつてなどいられなかつた。でも酒のせいで胃が荒れているようで、ずっと胃もたれにも似た腹の重さが治まらない。それでも飲まずにはいられない。私は新しい死因を作つている最中なのかもしれない。狂い死になんて世の中的に認められたものではない、もっとまともな、社会的に認知されている死因を作つている最中なのかもしれない。

胃が荒れていたので晚餐を口に入れると一苦労だった。それでも絶食が続くと吐き気が収まらない氣がしたので無理して食べた。胃が荒れているのにカレーだった。キノコはルーにみじん切りになって入っていた。それから、晚餐後、狂う前に思い切ってパソコンのデスクトップ上の「マザー」というファイルを開いてみた。「1. キノコ人間の作り方について」から始まる、長い文章が続けていたが、そこまで見たところで狂ってしまったので、残りは覚えてない。

2011年10月8日（記書き）

この作品はフィクションであり、作者の田辺豊ではあります。

2011年10月8日

10月8日（土）

今日は図書館へ出かけた。母には調べるなと言われたが、私は菌類大辞典という本を探した。やはりどうしても「マザー」という名のキノコが気になったからだ。そして菌類大辞典と言う本は見つかった。誰も本棚から取り出してなどいなかつた。私は索引で「マザー」を探した。存在しなかつた。ページをめくつて確認してみた。やはり見つけられなかつた。

図書館では榎本なごみと編集者と出会つた。編集者は私を視界に入れたが、さすがに人前ではやらない主義らしく、編集者は私に何の暴行もしてこなかつた。榎本なごみと編集者は、仲がいい風でも家族と言つて風でも険悪と言つた風でもない距離感を保つたまま並んで立ち、私の前に現れた。一体何の目的があつて私の前に現れるんだ、と私は私の幻覚かもしれない一人に、声に出して訊ねてみた。二人は何も答えなかつた。あれは狂つた頭が見せた厳格だったのかもしれない。いや、きっと厳格だったに違ひない。一人は何もせず、ただ私を見て立つていたのだ。それなのに、周囲からは注目されていなかつたのだ。

晚餐前に、デスクトップに知らぬ間に置かれていた「マザー」というタイトルの文書ファイルを開いてみた。それによると、「マザー」というキノコを人に攝取させ続けることで、その人間は認識を勘違いし続け、誰かに依存せずにいられなくさせる。主に依存相手が母親になることから、子供を子離れさせたくない親が使用することがあるため、「マザー」と言つ名がつけられている、とのことだつた。しかし図書館の菌類大辞典にはそんな名前のキノコは載つていない。それに私を子離れさせないでいても、母は負担が増

える一方だろう。私のことを邪険に扱っているし、きつとこの文書に書かれていることは間違っている。それか、私の認識が間違っている。

2011年10月9日（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物・事件・依存症とは何の関係もありません。もちろん作者の生活とも何の関係もありません。

10月9日(日)

いつも一階の冷蔵庫から盗み飲んでいる酒は「大八車」といつて、とにかく量だけはたくさん入っている、きっとその分安く味も大したことないであろう日本酒である。私はこれを、いつもつまりなどというものが無いで飲んでいる。そして今日読んだ本によると、つまり無しで酒を飲むという行為は、胃に大変な負担がかかるものらしい。私がほぼ毎日のように吐き気に悩まされているのは、日記に書かずに酒を盗み飲み続けていたせいではないだろうか、そんな気がしてくる。だからこれからは、酒を盗み飲んだことも日記に書こうと思つ。今日はかなりの量の酒を盗み飲んだ。飲んで酔つて寝て、起きて飲んで酔つて寝ている間に昼間が終わってしまうほどの量を。このまま飲み続けると、私はやはり狂い死に以外の死因で死ぬような気がしてくる。

寄つている間に図書館で借りた、文芸誌を読んだ。さまざまな作家がまるで申し合わせたかのように似たようなシチュエーションを書いていたため、これはもしかしてテーマが決められたアンソロジーだつたりするのではないか、と表紙を確認してみたが、そんなことは書かれていなかつた。「10年代の自意識を表現する僕らの青春文芸マガジン!」といつキヤツチコピーが書かれていた。青春文芸。いじめや第三者の校内暴力などで予想していたより（というか、普通のライトノベルより）楽しくない高校生活を送ることになつた……といつシチュエーションが、「10年代の自意識を表現する僕らの青春」ということになるのだろうか。単なる暗黒青春もののアンソロジーなんぢやないだろうか。酔つた頭で、私はそんなことを考えた。

その文芸誌の中で、「猿」というただ一文字のペンネームを使っている作家が居た。これは以前道端で会つてそろそろ動物園に帰ると言つていたあのサルだろうか、などと考えてみたが、あのサルは「小説を書いてみたい」と言つたわけであり、「小説を書いている」とは言つていない。きっと偶然、サルという単語に連続して出会つただけだろう。それとも、実はこれはサルが書いているとか。もしそうだとしたら、もつとその部分を押し出してもいいのではないか。しかし「猿」というペンネームの作家につけられたキャッチコピーは「10年代の文芸奇術師」というものだった。内容は暗黒小説ものだった。

とにかく一日中酔つていたので、晚餐も朦朧とした意識の中で食べた。そして吐いた。今、空腹だ。というか、吐いて以来眠れない。深夜に書こうと思っていたこの日記も、実は10日の早朝と呼べる時間に書いている。飲まないようにならないと、私は死ぬ。狂つて死ぬより、きっとひどい、同情されない死に方をする。

2011年10月10日(前書き)

この作品は作者の手稿ではなく、フィクションです。

10月10日（月）

体育の日だつたというのに寝てばかりいた。パソコンから聞こえてくるラジオで「今日は体育の日ですねー」と言つているのを聞いて、今日が体育の日であることに気が付いたくらいだ。今日は何の日、話をネタにする人物は大抵話すことがない人物なのではないだろうか。それから何度も、横になつている間に、つまり日中の間に、「今日は体育の日ということで」などと言つた台詞を耳にした。ラジオのパーソナリティはそんなに話すことがないのだろうか。それとも、こう話し始めるべし、とラジオパーソナリティ入門書にも書いてあるのだろうか。入門書通りの言動を行うのがプロのラジオパーソナリティと言えるのだろうか。どうでもいい。そんなことよりこのところずっと続いている飲酒癖を止めるべきだ。狂うより先に飲みすぎで死ぬから。

ネットで見かけたニュースの中に、サルが動物園に戻った、とうものはなかつた。しかし動物園のホームページを調べてみると、サルが動物園に戻ったことが明らかになつた。ニュースサイトは事件の解決にはあまり興味がないようだ。

そんなサルから、電話がかかってきた。「やあ、こんにちは」と、一階の固定電話の電話口から聞こえてきたその声はサルのものだつた。一体何の用でかけてきたのか。飼育係は何をしているのか。「実は私、小説を書いてみたんですよ」それで、私にどうしろというのだ。「ちょっと読んでほしいんで、メールで送りますね」私は、猿、というペンネームで活動しているらしい小説家が居ることをサルに伝えた。「ほう、それってもしかして私のことだつたりするんでしょうかね。私、これまでこつそり、飼育員の目を盗むように

小説を書いてみたことがあるんですよ。そして書き上げると、その原稿用紙がどこかへ消えているんです。もしかしたら飼育員が勝手に回収して編集者に売り込んでいるのかもしれませんね」私がいまサルと話しているというこの事実は、きっと狂いが見せた厳格に違いない。キノコが見せた幻聴に違いない。そんな気がした。

2011年10月11日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物とかは架空のものです。

2011年10月11日

10月11日（火）

昨日はハローワークへ行きそびれた。今日は私の担当者がハローワークへ出勤していないため、言つても無駄だ。つまり今日はやることがなく、暇だ。だから歩いてみることにした。毎週木曜日に母に連れて行かれる、保健センターまで。いつもは母が車で私の運ぶのだが、歩こうと思えば歩ける距離にある。そして歩いた。息は切っていた。飲酒とだらけは人の体力を奪うものだ、だからこのくらい疲れるのも無理はない。

そこで、試しに保健センターの窓口へ行つてみた。この窓口へはずいぶん前に狂人者認定手帳を手に入れるための手続きの書類を手に入れるために、それからふれあいサロンへの出席手続きを取る時に顔を出したことがある。そのときに私の担当者も決定された。綿祖が顔を出すと、少し待たされて窓口に私の担当者が顔を見せた。そこで私は相談した。自分がこれからどうすればわかるかい、といふ漠然とした相談をした。酒のせいで、そして狂いのせいで頭が回らなくなっていて困っている、とも相談した。「あー、狂ってる人はアルコール依存に陥りやすいんですよ」と言われた。「お酒をやめるには、自分の意志の力しかありませんね」とも言われた。あまり頼りにできない、私ですら頭で理解できている正論を言われただけだった。あまり実のない相談になつた。

母は翻訳家であり、つまり小説に関わっている。小説を訳するのは大変なのか、と晩餐の席で質問してみた。「大変じゃない仕事なんてこの世にはないのよ」と返された。しかし昨日の電話口で、サルは楽しそうに自分が小説を書いていることを話していた。もしかしたら、小説を書くのは楽しいのかもしない。この狂いが治つた

ら、いやこの日記を書き終えて寝て起きたら、自分も少し小説を書いてみようか、と思つた。世の中にはついノベルというものが存在する。ツイッターで書かれる140文字以内の小説だ。あのくらいなら自分でも書けるんじやないか。なんだか今日は妙に前向きな終わり方をしている。まだ頭の中に晚餐のキノコの狂いが残っているのかもしれない。

2011年10月12日（前書き）

この話は私の口説ではありません。フィクションです。フィクシ  
ョンですか。

2011年10月12日

10月12日（水）

パソコンのメールを数日ぶりに開いた。どうせいつもメールマガジンや迷惑メールくらいしか送られてこないので、数日に一度しか開かないのだ。すると、珍しくメールマガジンでも迷惑メールでもないメールが届いていた。件名は「件の小説」である。「件」は「くだん」と読むのだろう、きっと。こういう読みづらい読み方の感じを得意げに使うと印象を悪くしたりするのではないか、と思いつながら恐る恐る開いてみると、「こんにちは、猿です」から文面が始まつていて「小説を書いてみました」と続いて、それから長い長い小説が書かれていた。この「猿」というのは先日読んだ文芸雑誌の「猿」なのか、それとも先日道端で話してそれから動物園に帰つたサルのことなのか、どっちなのか迷つたが、小説家の「猿」だつたら私のメールアドレスなど知つているはずがないし、動物園のサルだとしても私のメールアドレスなど知つていてるわけがない。つまりこのメールは……誰からのメールなんだ？ 分からなかつたが、とりあえず小説は途中まで読んだ。とても長い、本にすれば一冊分になりそうなほど長い小説だつた。しかもサルのくせに人間の男と女が恋に落ちる小説だつた。私はこれを読んでどうすればいいのか。感想でも返信すればいいのだろうか。とりあえず数日かけて読んで、それから考へることにした。結論の保留である。こんなことを繰り返していると、人生を駄目にする。

編集者が私の部屋を尋ねてきた。私がメールに書かれた小説を読んでいる間に、母と編集者が打ち合わせを始めていたらしい。編集者は私の肩越しに私の（榎本なごみからプレゼントされた）パソコンの画面を覗き込んだ。モニターにはいかがわしい画像は表示されていないので恥をかかずに済んだ。編集者はメールの文字を見ると、

「おお、猿先生の新作じゃないか」と言つた。メールの画面はかなり下の方までスクロールしてあつたので、文頭の「猿です」の文字は表示されていないのに、どうしてそんなことが分かるのか。「文章には人間が出るものなんだ。まあ、猿先生は表現が独特だから、ということもある。僕は猿先生の担当になりたくて編集者になつたくらいだから、少し文章を見れば、それが猿先生の書いた文章だということが分かるんだ」と、編集者は雄弁に、しかも友好的に、私に話をしてくれた。ところで今日は私に何もしないのか、と尋ねてみると、「うん、そろそろ君のことを殺そうと思っているんだ。今はその証拠隠滅の方法を考えている最中でね、まだ思いつかないから今日は何もしないよ」と、ひどいことを言つた。こんな物騒なことを平然と口にできるのは、世間知らずな中学生か編集者くらいのものだらう。「そんなことはないさ、僕は他ではこんなことは言わない。相手が君だから言つんだ」まるで私のことが好きみたいなことを編集者は言つた。「君のことは、気にかけているよ。いや、気に障つっている、と言つた方が正確かもしけりね」そうか。私の予測できる死因に、狂い死に、急性アルコール中毒に加え、編集者による殺害が加わつた。

あの編集者は悪人である。私を殺そうとしている、と、晚餐の席で母に報告してみた。「ええ、分かつてるわよ、その人がいい人じやないことくらい。でも、私の本を作ってくれるんだから、付き合っていくしかないでしょ。私は売れっ子じゃないんだから、仕事相手を選べないのよ」母の仕事が順調ではないことを、私は今日初めて知つた。

2011年10月13日（前書き）

この序文はフィクションであり、作者とは何の関係もありません。

2011年10月13日

10月13日（木）

もう週の後半である。そんな今日はふれあいサロンの日だった。いつものように母に車で連れてたどり着くと、そこにはいつもより若い人間が多くた、ような気がした。自分以外の狂人たちの会話から推測するに、どうも今週から新しく10代の狂人が5人も通い始めることになつたらしい。若者たちの間で狂うことが流行つてゐるのだろうか。私は数年間働いていただけの、社会的には若造ではあるが、今日から来ていた若者たちに比べれば歳をとつてゐる。私はどう見られているのだろうか、と少しだけ気になつた。しかしその私を見る目たちも狂いのフィルターを通してゐることにすぐに気づけたので、気にしなくなつた。

ふれあいサロンでは、一人の男が大きな模造紙に大きな絵をサンペンド書いていた。まるで漫画のような、輪郭のしつかりした人物画で、それも美少女だった。どんな美少女だったかと言えば、最近本屋へ行けば平積みされている漫画本の表紙に書かれているような美少女だった。他の男が、その男に、「それ、何かのキャラクター？」と尋ねた。ため口で。「榎本なごみといいます」イラストを描いていた男は答えた。敬語で。

家に帰り、晚餐までの時間を使い、やつと猿の送つてきた小説を読み終えた。まあまあ面白かった、という感想を添えて返信してみた。そのままメールを閉じて、まだ開いていないので、猿からの再返信が来ているのかはまだ分らない。本当に小説家の猿先生が書いた小説だったのかもわからない。どうして猿なる者が私のメールアドレスを知っていたのかも分らない。

晚餐の席で、珍しく母から話を持ちかけられた。「知ってる？ 小説家の猿つてペンネームの人はね、動物園に勤務してるんですねって」どうしてそんな話をするのか、私は母に訊ね返してみた。「昨日、榎本さんと話したのよ。榎本さん、猿つてペンネームの担当になりたくて、その人のことを調べてるらしいわ。でも、全然分からないらしいの」だからどうしてそんな話を私なんかにするのか、と私は再度母に尋ねた。「だって、家族の中で本読むの、あんたくらいですもの」私は父と妹の趣味を知らない。

2011年10月14日（前書き）

この作品は私の日記ではありません。こんなこと、実際には起  
こり得ません。

2011年10月14日

10月14日（金）

昨日から酒を飲まないように気を付けていたが、これが意外と依存していたようで、今私はとてもつらい状態にある。このままだと飲んでしまう可能性があるので、必死で日記に集中している。インターネットでの調べによると、狂った人間や不安神経症の人間は酒にアルコール依存になりやすいのだそうだ。やはりアルコールには不安を和らげる効果があるからなのだろう。病院で処方されている薬にそんな効果があればいいのだが。現在病院で処方されているエビリファイなどという効果のうつすらとした薬にはちつとも不安を和らげる効果がないように思えてならない。遅効性の薬なんだろうか。だとしたらそんな物作るべきではないんじゃないだろうか。薬が効き始める前に即効性のアルコールに手を出してしまってはいけない。それにしても今飲みたい。今は深夜だ。家族は既に寝ている。今なら台所へ行つて冷蔵庫から酒を取り出すことができる。今飲みたい。

でも結局飲んでいない。まだ狂いきつていながら我慢が出来ているのだ、と思う。完全に狂つたら、私は自制というものがきつとできなくなってしまうだろう。そして酒を盗み飲みしまくつてアルコール中毒で死ぬのである。うちの家族に狂っているうえにアルコール中毒な奴を病院に入れてくれる優しさがあるとは思えない。いや、私に家族愛が向けていないだけか。狂つてるもんな。働いてないもんな。母や父や妹は狂人に対して偏見を持っているのだろうか。私は持つていると思う。今日現在の私は、うちの家族は狂人に対して偏見を持っていると思う。

今日は珍しく一日連続でメーラーを開いた。すると小説の感想を

送った猿からの再返信が来ていた。「面白がつていただけ多様で、うれしいです」と書かれていた。どうして私なんかを相手取つてかしこまつているのだろう。私は狂つているのだ。小説なんか書く正常さも持ち合わせていないのだ。それなのに、下手に出られている。もしかしたら馬鹿にされているのかもしれない。ところでどうして私のメールアドレスを知っているのか。と、私はまたメールに書いて返信してみた。まるで猿がメル友になつたかのようである。返信が来るのは明日だろう。私が次にメーラーを開くのは翌日の予定だから。

それから、電話が来た。いつものように母が出ないので、私が出てみると編集者からだつた。編集者は錯乱している様子だつた。「大変だ！ 猿先生は猿だつたんだ！」言つてることが良くわからぬ。それを私に伝えてどうするつもりなのか。私ではなく母にそれを報告したかつたのとしても、どうしてそうしたいのか分からぬ。「僕はどうすればいいんだ！ 猿なんかを馬鹿みたいに尊敬しちまつて！ ああ恥ずかしい！」恥らうのは個人の自由である。しかしそれを私に伝えてどうじょうといつのだ。本当に。あと今日もキノコを食べた。

2011年10月15日（前書き）

この日記はフィクションであり、登場する物や人は実在のものではありません。

2011年10月15日

10月15日(土)

今日はいきなり晩餐の席での話である。たまには時系列がバラバラの日記を書きたい時だつてある。私が晩餐を摑つていると、母が誰かと電話をしていた。どうやら相手は出版社の誰かであるようだつた。「はい。榎本さんが? ええ」と心配そうなトーンで話していたので、何があつたのですかと尋ねてみると、母の担当編集者が色々分け合つて代わることになつた、と私に教えてくれた。昨日の電話で、今まで母の担当であつた編集者は錯乱している様子だつた。首にでもなつたのだろうか。そこまでは教えてもらえなかつた。

それにしても週末である。今週は、振り返つてみると榎本なごみが現れなかつたような気がする。読み返してみればどこかで会つているような記憶が呼び起されるのかもしぬないが、今週は酒に阿呆のようく浸つっていたという記憶の方が大きいので、榎本なごみと何らかの形で会つていたとしても、その印象が頭に残つていかない。記憶を残留させない作用があるので、アルコールというものには。

昼間、メールを開いてみると、猿からの返信が届いていた。「私は珍しい天才なので、かなり大きな組織を動かすこともできます。特定の個人のメールアドレスを調べ上げることも可能なのです」とのことだつた。自分のことを天才と称する人間にろくな奴はないといつ決まつているものだが、相手は猿かもしれない。もしこのメールをサルが打つていたとしたら、確かにタイピングができるメール送信ができる猿など珍しい天才である。だからこのメールの内容は間違つていなかもしれない。どう返したものか分からなかつたので、さらなる返信はしなかつた。

晩餐の席での記憶が、今日はもう一つある。母ではなく榎本なごみが同席していた。私が食べている席の正面の椅子に、榎本なごみが座っているのだ。あなたは本当に榎本なごみか、と尋ねてみると、「ええ、そうですよ」と彼女は答えた。母はどうしたんだ、と続けて尋ねてみると、「さあ、いないみたいでけど?」と首を傾げられた。そうか。私の狂いは進行しているらしい。

2011年10月16日（前書き）

この日記は作者の現実とは何の関わりもありません。

10月16日（日）

全てのものを一まで戻すこととゼロにまで戻すことと、どちらに価値があるのだろう？などと言った抽象的なことを考えてしまうのは、また酒を飲んだせいだろう。ここ数日は止められていたのに、結局また飲んでしまった。これは私が狂っているとかではなく、私の意志が弱いせいだ。

幻想文学のような光景が、最近時々垣間見えている気がする。昨日など、晚餐時の記憶が二つもあるし、最近は自分脳妄想内の人物かもしけない編集者という存在と実在に違いない存在である母が電話で話している光景を目にした。このような光景を見るたびに、私は軽い恐怖を覚えている。私はもう現実には戻れないかもしない。しかしよくよく考えてみれば、現実に戻ったからと言ってそれほど良いことが待っているわけでもない。そんな気がする。このまま狂い続けた方が人生は楽しくなるのではないだろうか。映画などで描かれる気の狂つた人間は大抵楽しそうに、それが観客の恐怖を喚起するように笑っている。しかし当人は実際に楽しそうに笑っている。もし今私が笑つたら、恐ろしい笑顔になるだろうか。

昨日は家に閉じこもりっぱなしだったので、今日は外に出ることにした。行先は例によつて図書館である。そこで私は検索機を用いて、猿という名の作家が存在するのか調べてみた。するといくつかの本が見つかったので、本棚に取りに行つた。「動物園のメリーゴーランド」というタイトルの本を探してみると、そのレベルは小早川つばさ文庫だった。つまり児童文学だった。これがデビュー作であるらしかつた。

児童文学だから読まない、などという理由はないので、借りて持つて帰つて読んでみた。しかしこれが意外と読みづらかつた。まず文字が普通の本に比べて大きすぎる。それからすべての漢字にルビが降らされているのが割と邪魔である。内容は、まあ、夢がいっぱい盛られすぎていて現実感が薄いというか。

私が一人で晚餐の席に座つていると、母と新しい担当編集者が電話で話していた。母は笑顔で本の内容について打ち合わせをしていた。気になるのは、母が新しい担当編集者を「榎本さん」と呼んでいたことだ。榎本という名字の社員が多い出版社なのか、それとも私が見ている光景が幻想なのか、だとしたらどこからが幻想なのか、どこまでが現実なのか。そういえば母の仕事を受け持つている出版社の名前を私はまだ知らなかつたので、母に尋ねてみた。「とうきょう出版よ」と母は答えてくれた。頭狂、という単語を思い出した。それが地名だつたか状態の名前だつたか物体の名前だつたか、聞いた覚えはあるのに思い出せなかつた。もしかしたらそれをまだ知つていらないのかもしれない。日記を読み返せば思い出せるのかもしないが、結構長いこと書いてしまつてはいるし、読み返すのが面倒だし、私が日記に書いていることがすべて真実であるとは限らないのだ。

2011年10月17日（前書き）

この田嶋は作者の生活とは何の関係もあつませんし、思想や経験とも何の関係もありませんってば。

2011年10月17日

10月17日（月）

月曜日なので図書館は休みである。世の中には月曜日でも休まない図書館があるといつ。そんな東京に行きたい、と切に思つ。しかし私一人で東京に引っ越す権利も金銭も家にはない。旅行で図書館へ行つても貸し出しなど行えない。第一、図書館といつものはその土地に住んでいる人間以外には基本的に貸し出さないものである。と思っていたら池袋にある図書館はどこに住んでいる人間にも図書を貸出しするらしい。憧れる。それにしても今日は図書館が休みである。昨日一日で読み終えてしまった作家の猿の「動物園のメリーゴーランド」を返却しに行くことができない。

ふと思い出し、ハローワークへ行くことにした。今日は私の担当者になつてしまつた不幸な中年女性の出勤日である、ということを急に思い出したのだ。しかし、特にこれと言つてやりたい仕事の目処は立つていらない。それでも私は図書館へ行つた。そして少し、仕事をついて担当者の中年女性と話した。特に実のない話を。それから、一応履歴書をもらつた。しかしこれを書くとして、仕事を辞めてから現在までの空白の期間をどう書けばいいのだろう。それから、特技やアピールポイントの欄をどう書けばいいのだろう。部屋で履歴書を眺めながらそんなことを考えているうちに、自分には働く気がないことに気が付いた。ニートが身に沁みついてしまつたようだ。もっと積極的に行動しなければ、さらにこの症状は悪化し、きっと狂いも加速するだろう。なので行動しよう。活動しよう。今日はもうよるなので明日か。

一応ハローワークで紹介された仕事を、覚えている限りざつと書き出してみる。ビルの清掃員。アパートの廊下の清掃員。パソコン

の文字入力。動物園の清掃員。清掃員ばかりである。狂っている人間は人と話さなくてもいい肉体労働に精を出せ、ほかに使い道なんかないからな、そういうわけなのだろうか。そうか。私は体力には自信がない。仕事をやっていた時も毎朝息切れしながら出勤していた。

ところで私は、狂う前はどんな仕事をしていただろう？　思い出そうとしてみたが、思い出すことができなかつた。私の頭がおかしくなつてしているのか、それとももしかしたら私には働いた経験などなく、最初から（どこの？）狂つていて、自分が働いていたと錯覚しているだけなのだろうか。分からぬ。分からぬことが日に日に増えていく。これがなくなつたとき、私は完全にくるつているか、正氣に戻つてゐる。

2011年10月18日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、実在する人物・団体・菌類とは一切の関係がありません。

2011年10月18日

10月18日(火)

もう20日が迫っている。つまり月の終盤が迫っている。そのことを考へるだけで、焦りを覚える。理由のわからない、あ、昨日に続いてまた分からぬといふ単語が出たな、でもとにかく、この焦燥感の理由が分からぬ。年末が迫っているだけなのに、何を恐れているんだ、私は。まだ完全に狂っているわけではない。取り返しのつかなくなるほど無職の期間が長くなっているわけでもない。いざとなつたら狂人手帳をうまく活用して生活保護を受ければいい。きっと通るだろ、手帳があるんだし。そんなことを思つて安心させようとしても、心が勝手に焦つてしまつ。だから今日は酒を家族の皿を盗んで飲んで寝ていた。酒を飲んで寝るという行為は気絶して寝るという行為と同じものであるらしい。それがどう悪いのかはわからないが、脳細胞がたくさん死ぬとか、そんなものだろう。私の脳なんかどうでもいい。この嫌な焦りを感じる頭など半分くらい死んだほうがいい。完全に死ね、と自分に言わなくなつたあたり、これは進歩だらうか。それとも家族にとって厄介な人間が生きようとしているということで、これは悪化なのかもしれない。周囲にとつての状況の悪化。私が生きているという悪い事態、である。

榎本なごみが家を訪ねてきた。手ぶらではあつたが情報を持つてきた。「猿つて作家、知つてる?」榎本なごみの切り出す話題はいつも私の近況を見越しているかのようだ。「あの人、本物の猿らしいよ。動物園で衆人環視の中、パソコンでタイピングして小説書いて、それを飼育係の人が印刷して出版社に持つて行つてるらしいよ。そこまでするくらいならペンネームくらい公開したほうが売れると思うのに、どうして隠してるんだろ」ならばどうして、サルのペンネームが猿であることを知つてゐるのか。「週刊誌に書いてあつた

から「明日は本屋に立ち読みに行つてみることに決めた。それから、そんな情報が入つても、私は編集者ほどのショックは受けなかつた。猿が小説を書いているから何だというのだ。完成したものがいいものであれば、それを人間が作ろうが猿が作ろうがどっちもいいではないか。このまま知能が進化した猿に文化が乗つ取られてやがて地球は支配されるかもしれない、などという永遠のB級映画みたいな想像は浮かんだが、それは私を不安になどしなかつた。そんなことが起こるとは思えなかつたからだ。

榎本なごみは夜まで家について、しかも晚餐の席にまで同席した。母は榎本なごみの分の食事まで用意した。笑顔で。まるで息子が友達を連れていることがうれしい、かのように。普段はあんなに冷たいのに。メニューは親子丢で、私の分にはキノコが入つていた。榎本なごみの分にもキノコが入つていた。榎本なごみは言つた。「このキノコ、おいしいね」私には味が感じられなかつた。

2011年10月19日（前書き）

この作品は作者の日記ではなく、純然たる創作であります。

2011年10月19日

10月19日（水）

今日は予約が入っていた日だったので病院へ行つた。いつものように40分待たされた。5分間の診療の間に、この病院は待ち時間がいつも長いですね、と医師に言うと、「じゃあ警察呼ぼうか？」と返された。どう思考が飛躍したのか、一瞬理解が及ばなかつたが、まあ、狂人を相手にしているのだから、隙あらば警察を呼ぶという強めのカードを切らなければならないのだろう。精神科の医師というものは大変なものだ。私はもうこの病院には行きたくない。しかし選択権がないので次回もきっと行くのだろう。

その帰りに、本屋に立ち寄り、週刊誌を読んでみると、後半のページの隅のほうに「作家『猿』は本物の猿だった！？」というスクープが掲載されていた。しかしスクープと呼ぶにはあまりにも扱いが小さかった。しかもあまり信用のおけない雑誌なので、きっとこれを鵜呑みにするのは余程の……いや、余程の馬鹿にはなれないはずの編集者という職業についている人物はこの情報を鵜呑みにしている。ということは、私が信用できないと思っているこの週刊誌の情報は、意外と正確だつたりするのだろうか。

それから、週刊誌に掲載されているコラムで一本、面白いものがあつた。ほかの記事はただただ人の不安を煽つたり不満をあおつたりするだけのものであるのに対し、そのコラムは人間の穏やかな生活が淡々と描かれていて、人間の日常には起伏がなくてもいいのだ、と思える心強い安心感を得ることができた。そのコラムのタイトルは、柏原歌枝の獄中記、と言つた。ネットの風評被害が原因で犯罪者ということになり、収監されたらしい。獄中での穏やかな生活の片隅に、自分が無実であると繰り返し紙面を通じて読者に訴えられ

てこる、そんなコラムだった。面白い。

面白いコラムで気分が良くなつても飲酒は癖になつてしまつてゐるよひで、帰りついたころには体中がアルコールを求めていた。しかし既に台所では母が晚餐の支度を始めており、台所に置かれている冷蔵庫から酒を盗んで飲むことは不可能に思われた。仕方がないので晚餐後まで我慢することにした。

その晚餐の席で、またしても家族以外の人間が同席した。それは中年の男で、名前を榎本なごみといふらしい、母の新しい担当編集者だつた。「君、先生のお子さん?」と新しい編集者は言つので、うなずくと、「君、狂つているね?」と、まるで医師のように私の症状を言い当てた。「君が作家になれば、話題になるだろ?」狂人を売りにして本を売るつもりか。世間が狂人が本を書くということに慣れたらどうなるんだ。「君に技量があれば、作家を続けられる。話題性だけの作家で終わつたら、それまでだ」今までの編集者に比べて、この新しい編集者は随分と常識的だつた。生活に起伏がなくなつてしまつた、と私は無駄な心配をした。

2011年10月20日(前書き)

この作品は作者の口述ではありません。が、作者はアルコール依存になります。

2011年10月20日

10月20日（木）

今日はも今日のなので、母によつてふれあいサロンへ連れて行かれた。抵抗するのもありか、と思つたが、それは面倒なのでやめておくことにした。現に今、じうして日記を書くのに手を動かすのも面倒くさくて仕方がない。今田はなぜか何をやるのも億劫で仕方がないのだ。

ふれあいサロンにまた新しいメンバーが来ていた。それはあの編集者だつた。母を担当し、私に繰り返し暴行を与えた人物である。直接殴つたりしたわけではなかつたが、あれは紛れもなく暴行だつた。しかし狂つて会社を辞めたからと書いてこんなにも早くふれあいサロンへ通う手続きがとれるものなのだろうか、と思つていたら、編集者は人を殴りつけた。どうやらほかの人間から声を掛けられ、その内容が気に入らなかつたらしい。話しかけられた内容は聞こえなかつたが、元編集者は「俺は狂つてなんかいない！」と言つていた。そんなことを言う人物こそが一番狂つているのである。自覚のある私なんかより始末に負えない。

それから編集者はふれあいサロンが内包されている保健センターの職員の手によつてふれあいサロンを連れ出された。どこへ連れて行かれたのだろう、隔離棟かな、ここにそんなものあつたつて、などと考えながらふれあいサロンから出てみると、保健センターの口ビーに、元編集者はおそらく担当者であろうと思われる職員と一緒に、ソファに座つていた。元編集者は何かを言われており、それを聞いている元編集者は首をうなだれていた。それからしばらく経つと、元編集者は保健センターから出て行つた。来週も来るだろうか。だとしたら、迷惑なんぢやないのか。それを保健センターの職員に

尋ねてみると、「来週はおとなしくしてゐるつて。約束しましたよ」と言つた。どうやら元編集者は来週も来るらしい。迷惑なんじやないだらうか。

サロンで本を読んでいると、急に酒が飲みたくなつた。しかし保健センターに酒などない。このままではどうにかなつてしまふ、そう感じた私は、どうなつてもしまわないはずなのに、耐えきれなくなつて保健センターから外に出た。そしてその周辺をでたらめに歩いていて、比較的近くにコンビニあることを発見した。そのコンビニには酒が売つてあつた。しかし私は個人的に使える金を少しも持つていなかつたので、酒の缶だけ眺めていた。誰かが表れて148円を恵んでくれることを期待しながら、缶酎ハイの缶を眺めていた。もちろん誰も現れず、店員に冷たい目で見られていた。様な気がする。結局私は、2時間近く缶を眺めていた。

帰るとさつそく私は家に常備されている酒を盗み飲んだ。そして酔つて吐いて、私は倒れた。田覚めて晚餐を済ませても、体のだるさは取れなかつた。だから私はこれを書いている現在、とてもだるい。だから今日はもうこれで日記を終わることにする。

2011年10月21日（前書き）

この日記は作者の現実とは一切の関連性のない、架空の日記です。  
もちろん主人公は作者とは違う人物です。

2011年10月21日

10月21日（金）

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんとその息子と娘とたくさんの孫たちが住んでいました。孫たちが働くのでおじいさんとおばあさんは働きに済みました。おじいさんは山へ芝刈りに行くこともなく、おばあさんは川へ選択へ行くこともなく、孫たちは誰一人として浜辺へ行く暇もないほど一生懸命働いていたので、その家族の元には何のファンタジーも起こらなかつたといいます。とう昔話を思い付いた。これに少し脚色を加えれば面白くなりそうな気はあるが、さてどうしたものか。

などという夢を見ているうちに私は病院で目を覚ました。昨日はキノコを口に入れていない、様な気がする。酒のせいと記憶がありである。キノコを口に入れていないとしたら何が原因で病院へ運び込まれたのか。酒が原因だろうか。それとも無意識のうちにキノコを入れ、それで狂つたせいで自分の身に何が起つたのか思い出せないでいるのだろうか。それか、今までのことは全部夢で私は最初から入院していたのだろうか。私が日記に書き留めていたことには色々と不条理なことがあるので、それもあり得る。

病院からはその日のうちに退院させられた。医師から聞いた話によれば、私は急性アルコール中毒による一日酔いで気分が悪いと母に訴えていたらしい。母は深夜に気持ちが悪いと騒ぐ私に耐えられず、救急車を呼んだらしかつた。帰ると、私は禁酒を命じられた。母の田を盗んでこつそり冷蔵庫を覗いてみると、酒は撤去された。これを自縄自縛というのだろうか。それとも、当たり前の処置、と言つたほうが正確だろつか。

酒がない、逃避するのに最適なものがない、そう考えるだけでイライラした。イライラするので私は本を読むことにした。本に集中している間はイライラが少しは解消されるのが救いではあったが、読み終えるとまたやることがなくなつた。そこで、もう夕方になつていたが、散歩に出かけることにした。すると、犬と数回すれ違つた。犬にはすべてリードと飼い主がくつつけられていた。私が子供のころは、この辺りにも野良犬が出ていたような気がするのだが、最近は少しもそんなことが起こらない。

晚餐はいつもより多めに、キノコをいつもより多めに食べた。すると満腹のせいか、いつもより狂つたせいか、私は眠つてしまつた。夢は見なかつた。次に起きてもまた病院にいるんじゃないかな。そんな気がした。

2011年10月22日（前書き）

これは作者の田舎詩ではなく、創作作品です。

2011年10月22日

10月22日(土)

なんだかもうすべてが嫌になつてきた。それというのも酒がないせいで、きっとそうだ。それでも思わなければこの無力感、脱力感に説明がつかない。そんな思い込みが頭を支配してしまつていて。正直、今日は日記を書くのをやめようとしたと思った。でも意地で今、書いている。体力がなくなつていても書く気でもないし、とても嫌なことがあつたわけでもない。それでも書く気にならず、結局23日の早朝という時間にこれを書いている。

22日、起きると榎本なごみが枕元に立つていた。なぜ立つているのか尋ねてみると、私のころが急に心配になつたから、らしい。どうしてそんなに私なんかに構つんだ、それとも飲酒していないそれで見えていた幻覚だらうか？「飲んでないんだね」飲んでないと幻覚が見えるようになる症状を離脱というらしい。アルコール中毒用語である。それにしてもどうして枕元に立つているのか。そろそろはつきりさせないといけないような気がしてきたので、尋ねてみた。お前はいつたい何者なのか、と。親の仕事相手に同姓同名の人間がいるが、関係があるのか。どうして私に構うのか。どこで私を知ったのか。その優しさの裏に何が控えているのか。私は複数の質問を一息に榎本なごみに伝えた。一気にそんなに応えられるわけがないのに。

矢継ぎ早の質問に、榎本なごみはたつた一言答えた。「私は、当たり前の存在じゃないんだよ」一言なのに何も分からなかつた。それとも、一言だつたから何も分からなかつたのか。その答えを言い残すと、榎本なごみは部屋から出て行つた。それから私は、眠つた。一日中、ずっと寝ていた。日が昇り切つても日が落ち始めて、部

屋の中で朦朧とベッドに潜っていた。

晚餐の席で母に伝えられて明らかになつたのだが、榎本なごみは一日中家にいたらしい。私の家族に何を言つたわけでもなかつたらしいが、榎本なごみは母に晚餐を作つてもらつていた。私の知らぬ間に。榎本なごみが何なのか知つているのか、と母に尋ねてみた。「知らない」と帰つてきた。じゃあどうして食事を饗したのか。「不思議ねえ。でも、あの娘、不思議な魅力があるのよね」魅力に対して不思議なんて言葉は適応されるものではない。私は榎本なごみが帰つてから数時間後に晚餐を食べ、それに混じっていたキノコで狂つてまた寝て、そしてついさっきまでまた寝ていた。

2011年10月23日（前書き）

この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件とは一切の関係がありません。

2011年10月23日

10月23日(日)

そんなにやることがないなら本でも読んでいればいいのに、最近は昼夜も寝てばかりいる。こうなつたらいつそのこと、このひたすら眠つているといつ自己の姿を現代アートとして提出してしまつ、というのはどうだろ、と思いついた。ステージ上ではバンドが激しい演奏、そして老人ラッパーがライムで現代社会をディスり、お行儀のよろしくない格好をしたヒップホッパーたちがリズムを刻んで体を動かしている、そんな中心で、私は布団を敷いて眠つているのである。この異様な空間で寝るという行為。この非常識さこそが現代アートたり得るのではないか。そんな夢を見た。狂った人間の夢なんてこんなものである。

夢に出てきた老人ラッパーのティティールはかなりしつかりしていて、顔中ぼうぼうに伸びた髪の毛やもみあげや髭を編みこんで顔の8割を隠し、それでいて激しい声で……夢の話はむなしので現実の話へ移ろうと思う。現実の話も大概むなしものであるが。現実がむなしくない人間なんかこの世に数人しかいない気がする。つまり実は私は正常なのではないか。

現実の世界で、私は少しウォーキングを行つた。寝ている間に歩いて、歩き終わつて帰つてきてまた寝たのである。キノコを食べた直後眠るように狂つてしまつという状況を回避するために、寝だめ、という策を思い付いたのと、単純に眠いという二つの原因が重なつてこんなことになつたのである。だから私は歩いた。歩いている間は誰ともすれ違わなかつたし、何の特別なことも起こらなかつたので、この段落は一行で済ませていはずなのに、こうしてだらだらと書いてしまつてゐる。そんなに日記を書いていたいのが、私は。

じゃあ小説家にでもなればいい。きっとなれないと思つが。編集者が狂人の書いた小説を読んでくれるとは思えない。

小説といえば、今日は図書館まで歩いたことを記録し忘れていた。昨日図書館へ行かなかつたので、今日行つてみよう、と思い、いつも自転車で通る道をわざわざ時間をかけて歩いたのである。そして図書館でペンネームを猿といつ作家の別の小説を借りてみた。「このキノコ人間が、」という、児童文学とは明らかに方向性が違うらしい、吐き捨てるような言い方のタイトルだった。

そして晚餐後、眠らずに本を読もうとしていたのに、結局ついさつきまで意識を失つていた。またキノコを食べて狂つて寝てしまつていたのだ。これを防ぐ方法はないのか。本当にないのか。

2011年10月24日（前書き）

この作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件とは一切関係ありません。

2011年10月24日

10月24日（月）

午前中は寝ていた。このまま眠るように死ねたら、死にざまとしてはましなほうだ。しかし私はまだ死にたくない。そして夢を見た。雑誌の文字が小さくて、顔を近づけている、という、非常に面白くない夢だつた。どうしてこんなことを夢に見るのか。私は自分の金で雑誌を買って読む、ということこそ数か月実行できていない行為にあこがれを抱いているのか。それにしても夢にしては現実的すぎやしないか。そしてあまりにもつまらなくはないのか。これから雑誌に関連した何事が起こる前触れなのか。そうとでも妄想しないとこの夢があまりにも不懐でならない。つまらなさのあまり、夢に対して感情移入してしまつた。

午後、ハローワークへ行つてみた。今日は私の担当となつた中年女性の担当者が出勤している曜日だからである。そこで仕事を見つけてもらおうとしたが、そこで私は弱音を吐いてみた。狂つてしまつた自分が働ける自信がない、と。「やる気がない限り、働くどうしても働くなんてことできないわよ」と返されてしまった。私はきっと、現状に甘えているのだろう。現状が悪くないと、心の奥底では感じているのだろう。酒を禁じられ、金銭の所持を禁止され、やることと言えば寝るか図書館で借りた本を読むか、そんな寂しい老後のこのような現状に。打開したくないわけがなかつた。

ハローワークからの帰り道、現状の象徴とも言い表せる榎本などみとすれ違つた。彼女は高校の制服を着ていて、二人の友達らしき同じ制服を着た人物と並んで歩いていた。私とすれ違う際、視線すら向けなかつた。きっと私と知り合いであることが友達に露呈することが恥ずかしいのだろう。私だって自分が狂つていることが露呈

するには恥ずかしい。そして働いていないこと、働く気がないとを言い当てられてしまったことが恥ずかしい。この富崎という田舎において、働いていない人間は全員不審者である。そんな不審者たる私なんかに道端で親しげに話しかけてくる人物が表れでもしたら、まず私のほうが不審がる。きっとろくな目的ではないだろうから。

夜、それも深夜、晩餐が終わつていつものキノコのせいだ氣を失つて目覚めてから、電話がかかってきた。出でみると、榎本なごみからだつた。「今日は無視して「ごめんなさい」と謝罪された。榎本なごみは私に氣を使いすぎなのではないだろうか。それにしてもどうしてこんなに氣を使つてくれるのか。私は高校生の命を救つた覚えなどないし、高校生ではない人物の命を救つた覚えもない。榎本なごみは私に恩があるわけではないのだ。私が一体何をしたというのだ。不審である。

2011年10月25日(前書き)

この作品はフィクションであり、作者の生活とは一切の関係がありません。

2011年10月25日

10月25日(火)

今は秋、それも冬の迫った秋のはずである。それなのに窓を閉じていると暑くて、暑さのあまり目を覚ましてしまった。体中汗をかいていたので、シャワーを浴びることにして、階下に降りて、浴室に入った。すると一匹のなめくじが私を出迎えた。「あ、すいませんが蛇口ひねつてもらえますかね。私、手がないもんで」なめくじは温水を浴びても平気なものなのだろうか。「私のようなもんにとつて水分は命の源ですからね」それから私となめくじはシャワーから放出される湯を浴びた。なめくじは、気持ち、気持ちよさそうに見えたが、なめくじに顔と呼べる部位など存在しないので、私が狂つた頭で勝手にそう思つただけなのだろう。

それから、本に取り掛かつた。今日は読書くらいしかやることがないのである。しかしながら集中できなかつた。昨日の夢に雑誌が出てきたことから、体が雑誌を求めているのかもしれない。そう思つたので私は外に出て、本屋へ向かつた。本屋までは家から2キロ歩かなければならなかつた。秋にしては暑い気候が、喉から水分を奪つたが、私にはお金がないのだ。本屋でテレビブロスという雑誌を読んでみたが、知らない人間が充実した現状をフランクな口調で語つていたので、私はなぜか腹が立つた。どうして知らない人間の日常なんか知らなければならないのだ。こんなにも人を不快にしてしまう日記および現状報告の文章をどこにも公開していない私は正しい。

晚餐を食べていると、母が塩を瓶ごと持つて食卓から出でてき、すぐに戻ってきた。どうしたのか、と訊いてみると、「風呂場になめくじが出た」と帰ってきた。母はなめくじが嫌いだったのか。ま

あ、不思議なことではない。テレビでなめくじ撃退用品のCMをやっているのを見たこともあるし、なめくじというものは基本的に人に嫌われるものなのだろう。私と一緒にだ。

2011年10月26日（前書き）

この作品はフィクションであり、現実とは一切の関係を持ちませ  
ん。

2011年10月26日

10月26日（水）

今日は病院へ行かなくてもいい水曜日である。病院へ行くのは隔週なので、今週の水曜日は自由、というわけだ。なので気が緩んだ私は午後まで眠りこけてしまったが、それは仕方のないことなのである。最近朝から晩まで寝てばかりで、ろくに図書館から借りた本を読めていない気がするので、少し気合を入れて本を読んでみることにした。猿というペンネームの作家が書いた「このキノコ人間が、」という本である。

読み進めていくにつれ、体がだるくなってきた。まるでアルコールを体に入れたときのような脱力感が襲ってきた。最近本を読まなかつたせいで変な疲労感に襲われているんだろうか、と思いつつ、水を求めて台所へ行き、麦茶でも取ろうかと（これは酒と違つて勝手に飲んでも怒られない）冷蔵庫を開けると、そこには缶ビールが四本ほど入っていた。たつた四本なので、一本でもなくなれば確實に無くなつたという事実は露呈してしまつだろう。だから私はこれを盗み飲むべきではない。

それから二十分後、私は外を歩いていた。足はふらついていた。久々にアルコールを体に入れたせいである。そして缶ビールを勝手に飲んだ私は、逃避行を開始していた。逃避行と言つても近所をふらつく程度のことしかできなかつた。家に帰れなくなるほど遠くへ行つてしまつと、私はきっと餓死してしまうに違いない。そんな気がした。きっと私がいなくなつても探したりしないだらう、私に冷たい私の家族は。

逃避行は夜まで続いた。というか夜までしか続かなかつた。アル

ホールのせいで歩くのがつらくなつて、夜には家に戻つてしまつたのである。案の定、缶ビールを勝手に消費したことは母にばれており、今日は夕食を抜かれた。だから今日はあの味のない食べる気の狂うキノコは食べていない。それでも、いつも晚餐を食べ終えるころになると、いつもの癖でベッドに寝転がつた。すると天井になめくじが張り付いていた。無事だったのか。「九死に一生を得ましたよ」昨日のなめくじであることが自分でもわかることが不思議だつた。

2011年10月27日（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物・団体・事件とは一切の関係がありません。

2011年10月27日

10月27日（木）

今日も毎週のようにふれあいサロンへ連れて行かれた。そこには元編集者がいたが、今週はおとなしい様子だった。誰とも喋っていないし、何もしていない。まるで狂人というより廃人のようだつた。一方で私も、誰とも喋らず読書をしていた。「このキノコ人間が、」の続きである。すると編集者が近寄つてきて、「そんな本読むなよ」と突っかかってきた。「猿が書いた小説だぞ」誰が書いたって小説は小説だろう。むしろ猿が書いた小説こそ、読みたがる人は多いのではないかだろうか。「猿はだめだ。猿はだめだ」ならば誰が書いた小説ならいいのだろう。「絵になる人間が書いた小説だ。それが一番売れるんだ」もう編集者ではないくせに、元編集者は本の売り上げのことをぼやいていた。ところで、現在編集者はどんな生活をしているのだろう。「……妻に捨てられたよ」結婚できていたのか。あんただつたのに。ならば私も、いつか結婚できるのかもしない。「結婚には社会性が必要だ。俺も君も、今は狂つてるんだぞ。結婚なんかできるわけないだろ」言わせてみればそうだった。編集者は狂つたから結婚生活が維持できなくなつたのだ。それからも編集者はぼやき続け、結局読書はあまり進まなかつた。

帰ると榎本なごみが絵になるポーズで食卓に座つていた。このような人間が本を描けば、元編集者が言つていたように売れるのだろうか。本の売り上げも作者のルックスが握つているのか。だとしたら空しいものがある。しかし綿谷りさや斎藤……なんとか、とにかく元水島ヒロだった誰かが書いた小説は実際売れている。やはり元編集者の言つていたことはあながち間違いでもなさそうである。

絵になるポーズで食卓に座つっていた榎本なごみは、私の家族に受

け入れられているようだつた。誰も食卓に他人がいることについて何も言わないし、疑問の視線を向けることもしない。何を言って私の家族に取り入つたのだろう。家族と仲の良くない私には想像もつかない。そんな榎本なごみに、一日連続でなめくじと話したことを報告した。報告するほどのことでもないが、ほかにやつたことと言えば読書とネットと睡眠のみである。「それは良くない兆候だねえ」と榎本なごみは言った。「なめくじは不吉な動物なんだよ」私はそんなことを知らなかつた。しかしそれをネットで検索して確かめる気にはなれなかつた。検索すれば、きっとなめくじの画像が大量に画面に表示されることだろう、一匹だけ視界に入つてくるならまだ大丈夫なのだが、一度に大量のなめくじを見るのは、少しつらいものがある。だからこの件に関しては、とりあえず心には留めておく程度に留めておくことにした。

2011年10月28日（前書き）

この作品はフィクションです。作者の日常とは一切の関係を持ちません。

2011年10月28日

10月28日（金）

田覚めしばらぐの間、今日が土曜日だと勘違いしていた。なぜだろう、今週は日付けがゆっくりと進んでいる気がする。病院へ行かなかつた、ただそれだけのことと、体感時間の流れは緩やかになるものなのだろうか。それとも酒をほとんど飲まなかつたことが原因だろうか。私は酒を飲むと眠る。なぜなら、酒を睡眠薬がわりに使つてているからである。このよつたな酒の飲み方は、きっとよくない。良くないが、私の体がいまさら故障したところで、いつたい誰が心配するというのだろう。

麦茶を飲もうと冷蔵庫を開けると、麦茶が入つている大きな容器の底に一匹のなめくじが沈んでいた。これはさすがに飲んで大丈夫な代物ではないだろう、と思つた私は麦茶を流しに捨てた。流しにはなめくじが残つた。なめくじは私に言つた。「おや、私の体液が入つていた水は飲めないと？」当たり前だらう、人間の体液入りの麦茶すら飲む気が起こらないのだ、人間以外の生き物の体液入りの麦茶など誰が飲みたがるものか。「それは残念だ。私の粘液には狂いを強制する力があるというのに」私は思わず訊き返した。

晚餐の後、キノコのせいでふらつく足を引きずつて自分の部屋に戻り、机の上にスタンバイさせておいてなめくじの体をひと撫でした。するとなめくじの体の粘液が指に付着した。私はそれを舐めた。すると急に、狂つてぼやけていた世界が鮮明になつた。あまりにも急に鮮明になつたので、軽い恐怖すら覚えた。そして、狂いは起らなかつた。「効果観面でしょう」なめくじは得意げな顔で（なめくじに顔と呼べる部位があるのか疑問だが）そう言つた。顔はともかく、声色は得意げだった。私は、そうだな、と答え、夜を何もせ

すに過ぎない。狂わずに過ぎない世界は、こんなにも退屈なのか。

2011年10月29日(前書き)

この作品は作者の創作であり、作者の口述ではありません。

2011年10月29日

10月29日(土)

朝、起きたら文学的出来事が私を待ち受けていた。私の部屋には小学生入学時に買ってもらつて今も使つている机がひと揃えあるのだが、そこになめくじがいたのだ。寝起きで出会う机の上のなめくじ。これって文学にならないだろうか。そんなもんが文学になるなら文学はもっと門戸が広いはずである。文学なめんな、と私は自分に言い聞かせた。そしてなめくじは声を発した。「何なら、私に定期的に水を供給していただくのと引き換えに、体液を好きな時に好きなだけさしあげますよ」と、それは提案だった。私は、その提案には乗らないことにした。そんな取引を交わしたら、私はなめくじの体液依存症になつてしまふ可能性がある。アルコール依存より響きが病的で、私はそれが嫌だつた。「そうですか、それは残念ですね」そう言つと、なめくじはカタツムリが這うような速度で私の机から去つていった。私はそれをずっと見ていた。他にやることがないからだ。

相変わらず狂っていた私は、狂おしいほどにアルコールを欲していた。飲めば吐くことは明らかなのに、それでも酒が飲みたいのである。それと同時に、私は気が付いた。私は自失したいのだ。私は私でなくなりたいのだ。私は自分が大嫌いで、狂つてまで自分を忘れてしまいたかったのだ。と気づくと、私はなぜか泣いていた。酒が欲しすぎて悲しくなんかないのに泣いていた。悲しくない。本当に悲しくない。

脇過ぎに、チャイムの音が鳴つたので玄関の扉を開けてみた。するとそこには誰もいなかつた。しかし、私が扉を開けると同時に、何かに触れられた気がした。それは人間のような温度を持っていて、

柔らかくて、それが気持ち悪かったので、私は直ちに扉を閉めた。いつたい何が私に触れたのか、見えなかつたのでまったくわからなかつた。

晚餐の席において、私はいつものようにキノコを食べた。すると私は狂い、いつもと同じ風景が見え、それから気を失つた。そして深夜に起きだして、日記を書き始めた。机の上には何もいない。なめくじもない。なめくじは私を見捨てたのだろうか。そもそも、なめくじは私をどうしたかったのだろうか。

2011年10月30日（前書き）

この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・建物とは一切関係ありません。

2011年10月30日

10月30日(日)

今日は八回トイレに行つた。うち三回は吐くためである。気温が下がってきたせいか、胃が飲んだ水を戻そうとばかりしている。もちろん吐くものは水ばかりである。そのうち晚餐も吐くようになるのだろうか。そうなつたら私は栄養失調に陥つて死ぬ。でも家族にとつて、それは良いことなのかもしれない。父と妹は相変わらず私を無視し続けている。

朝、起きると家族が出かけていた。家に誰もいなかつたし、靴も私のものしか置かれておらず、鍵もかけられていたので、家族が私を置いて出かけたことは確実である。この前は動物園だつたから今回は近所のイオンモールあたりかな、と予測をしててみる。家の近所には、田舎らしく非常に巨大なショッピングモールがあるのだ。そのショッピングモールの周辺は田んぼが取り巻いている。田んぼの中には突如現れる近代的なショッピングモールの姿は、とても違和感がある。しかし地方のショッピングモールは巨大なものと相場が決まっているようで、千葉も埼玉も熊本もショッピングモールは大きいらしい。逆に東京のものは小さいらしい。これらはすべて、インターネットで仕入れた情報である。私の情報源は新聞とテレビとインターネットで仕入れた情報である。私の情報源は新聞とテレビとインターネットで仕入れた情報である。私の情報源は新聞とテレビとインターネットで仕入れた情報である。

「……」、チャイムが鳴つたので私は玄関の鍵を開けた。家族はまだ帰ってきていない。扉を開けると、そこには榎本なごみが立っていた。立っているだけで入ってこない。榎本なごみは私に触れた。「今日は、見えるんですね」榎本なごみは相変わらず口調が一定しない人物である。私の妄想の産物だからかもしれない。妄想の産物だから、設定が気分によって変わるのだ。

榎本なごみはすぐに帰り、その直後に家族が戻ってきたので、私は鍵を閉めた。勝手に鍵を開けたことが知れたら怒られるかも知れなかつたからだ。母は晩に、お土産、と称して食卓に宝楽饅頭とキノコのソテーを並べた。宝樂饅頭とは東京では今川焼と称される宮崎特有の和菓子である。あんこが皮も破れよどばかりに詰め込まれているため、一個一個が重く、一個も食べれば満腹になる。それで食卓には三個並べられていたので、私はそれを三個腹に詰め込み、さらにキノコのソテーも食べた。そして狂った。まるで狂うのが義務であるかのように、私はキノコを食べたのだつた。

2011年10月31日(前書き)

この作品は作者の手元ではありません。

2011年10月31日

10月31日（月）

週明けである。今日から日中の人通りが減ると思うと、思わず外出たくなってしまう。これは狂いが解消されてきた証拠だろうか、それとも酒を摂取しなくなつたからこんな活発なことが思いつくようになったのか。私は散歩へ出てみようと思いついた。そんなことよりハローワークへ行くべきではあるが、気分が乗らなかつたので私は無目的に外を歩き回つた。そしてすぐ家に帰つた。寒かつたからである。寒さのあまり、冷たい空気が胃を刺激して、歩きながら一度吐いた。唾と唾液しか嘔吐物には含まれていなかつた。

猿というペンネームの作家が書いた小説「このキノコ人間が」を読み終えた。読みづらい文章が余白は許さんとばかりにぎっしりと書きこまれた、退屈ではあるが嫌いではない小説だつた。人が殺される様子が子細にグロテスクに描かれている小説よりは好みである。しかし普通の娯楽小説に比べれば退屈である。ペンネームが普通だつたら、きっとこの本は売れなかつただろう。というか、この本は売れたのだろうか。図書館にある本は卖れた本であるとは限らない。

久々にメールを開き、猿にメールを出してみた。内容は小説の感想である。猿というペンネームの作家が書いた小説は、嫌いではないが退屈でした、みたいな文面を作成して送信した。メールには出会い系業者の広告メールが届いていたのでそれらはすべて削除した。すると猿からのメールしか残らなかつた。

晚餐の席に出されたのは肉まんだった。そんなに母は私のために料理するのが嫌なのだろうか。しかしキノコのサラダは添えられて

いた。私はキノコを食べて狂わなければならぬ。狂つていなければ平常心を保てない。なめくじとのやり取りで、私はそれを確信した。

2011年11月1日（前書き）

今日の更新内容は現実とは一切の関係がありません。もちろん昨日分も、一昨日分も、それ以前もです。

2011年11月1日

11月1日（火）

パソコンでインターネットを用いて筋肉少女帯の歌を聴いていると不安な気持ちになつてくる。たとえ昼でも、である。深夜に比べて感受性が落ちると一般に言われている昼のほうが、狂っている私としては不安になる率が高い。それとも昼間に不安になるようなことをやつしているのが原因か。例えばインターネット等。

実は家からは時間をかけねばイオンモールまで歩いていくことができる。なので歩いてみた。一時間近くは歩いたと思う。到着しただけで私は疲れ果て、入つてすぐの食料品売り場で空腹に悩んだ。それでも私は奥に進んだ。せっかく苦労して到着したのだから、少しは見て回らねば損、そんな風に考えたのである。周囲は田んぼばかりで、特に見るものもないことだし。そして私はイオンモールの奥へ奥へと進んでいった。よく知らないブランドの洋服店、サンリオのキャラクターショップ、小規模な楽器店などを経て、私は最奥のゲームコーナーにたどり着いた。そこで私は人がプレイしているポップンミュージックをひとしきり眺めた。私は泣いていた。何をやつているんだと、私は泣いていた。

そんなにゲームができるのが悲しいのであれば働くべきである。私は金曜日には必ずハローワークへ行つて仕事を探そう、と心に誓つた。金曜日は遠いが、明日は病院へ行つて大きく心変わりする可能性が高いが、それでも一応誓つたのである。しかしきつとこの決意は心変わりすることだろう。私はそんな人間だからだ。これは狂つているとか関係なく、生まれつきそうなのである。そういえば、以前医師が言つていた。人間には狂いややすいタイプというものが存在する、と。私はそうなのだろうか。自問したところで答えが出る

わけがない。覚えていれば明日の病院で尋ねることにする。

ゲームセンターからの帰り道、イオンモール内で元編集者とすれ違った。すれ違っただけで、言葉も交わしていなければ目も合わせていない。元編集者は背広を着ていた。何の活動をしていたのだろうか。それから一時間弱歩いて家に帰りつくと、母と新しい編集者が打ち合わせをしていた。私は空気のようにその脇を通り抜けて自分の部屋に戻つていつた。居間から漏れ聞こえる打ち合わせの音声によると、母の新しい本がもうすぐ出版されるらしい、とのことだつた。タイトルは忘れたが、忘れる程度にインパクトの薄いタイトルだったことは確かである。

晚餐の席では牛丼が出された。これは牛丼の素を使って作られたものだろうか、やはり母はもう私にちゃんとした食事を作るのが嫌になつたのだろうか。分からなかつたが、とにかく刻んだキノコは混ぜ込まれていた。私はそれらをまとめて食べた。そして狂つた。狂つたまま意識を失つた。気を取り戻した現在。午前三時である。

2011年11月2日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の現状とは一切の関係がありません。

2011年11月2日

11月2日（水）

概念。眠りという概念。しかし晩餐に出されたキノコのせいであ  
狂つて深夜まで意識をなくし、そのまま日記を書きながら朝を迎  
える毎日を迎える私は、正常に眠れているのだろうか。狂つて気絶す  
ることは、眠りとは呼べないのではないだろうか。だから私はこの  
ところ、午前中から午後にかけて寝ることが多いのではないだろう  
か。そんな分析しても、自分の役にしかたない。いや、自分に対  
してどんな役に立つかすら想像できない。とにかく明日は祝日だ。  
朝のテレビのニュースを見ていた、それに気が付いた。

病院へ行つた。自分は狂いやすいタイプなのか、と私は医師に尋  
ねてみた。昨日思つ着いた質問内容を奇跡的に覚えていたのである。  
「あなたは先天的に狂いやすい体质なんですよ」と医師は教えてく  
れた。それを掘り下げる質問をしようと思つたが、どう掘り下げた  
ものかわからなかつた。そして掘り下げ方がわからないまま、黙つ  
ていたため、そのまま診察を打ち切られてしまつた。やはり世の中  
の人間は私を話すことが嫌なようである。

家に帰つてパソコンのメールを開いてみると、猿からの返信が  
届いていた。「ご感想ありがとうございます。今度出る新刊をお送  
りしたいと思うのですが、どうでしょうか」送るにしても、私の家の  
住所を知つているのだろうか。きっと知つているのだろう。どうや  
つて知つたのかはござらない。私は、ぜひ送つてください、と返信  
を返した。重ね語である。

晚餐の席で出されたのはアイスと冷やし固められたキノコだった。  
さすがにこれは抗議したほうがいいだろうか、それとも抗議したこ

とに腹を立てて「じゃあもう作らない」と言いたいがために、こんなメニューを饗したのだろうか。「文句ないの?」と訊かれた。妹に。久方ぶりに妹から話あつけられた。なので私はびっくりし、しばらく言葉を返せないでいた。数分立つてから、やつと、ある、と言一言だけ返すことができた。「じゃあ言えば?」そんなことを言う資格は私にはない、と伝えた。「へー。どっちつかずなんだ。じゃあ死んだら?」妹はよく私に死ねといつ。子供のころから言われ続けてきた。なので慣れている。慣れているので傷つきもしなかつた。

2011年11月3日（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物・団体・事件とは一切の関係がございません。

11月3日（木）

今日はふれあいサロンの曜日なので車でふれあいサロンが内包されている保健センターまで連れて行かれた。すると保健センターは閉まっていた。私を車で運んだ私は忘れていたのだ、今日が祝日であつたことを。閉まつたままの保健センターの入り口でこれからの方までどうすればいいのかわからず途方に暮れていると、元編集者がある氣で現れた。元編集者も閉まつているため真つ暗な保健センターの中を見て呆然となっていた。しばらく呆然と立つていた。帰らないのだろうか。「帰つてもなあ。離婚したから一人だし」自分が結婚していたことがある、ということを探しに自慢したくてそう言ったのだろうか？「まさか。そんな自慢、してもお前は悔しがらないだろ」確かにそうである。私は結婚に幻想が抱けない。しかしそんな私の性質を見破れるとは、まさか元編集者は私に興味があるのだろうか。「まさか。狂つた人間が結婚なんてできるわけがない、俺はそう思つただけだよ」しかし、元編集者も狂つてゐる。「ああそうさ。俺は猿先生が猿だったショックで狂つたさ、だから結婚していられなくなつた。

それきり、何も話さずに私たちは夕方まで待つた。何の刺激もない、つらい数時間だつた。母は夕方迎えに来て、迎えに来た母に今日は保健センターが休みだつたことを伝えたが、「そう」としか言わなかつた。まあ、母が今更どんな理不尽なことを私にやつても不思議ではない。晚餐にアイスを饗したことすらあるのだから。

家に帰りついた私は、パソコンを立ち上げてワードを開いてみた。私の新しいノートパソコンにはオフィスがあらかじめインストールされていた。私はワードに何かを書こうかと考えてみた。しかし何

も思いつかなかつた。そもそも何かを書いたとして、それを誰に読ませたらしいのか、思い当るところがどこにもなかつたのである。とりあえず、メール友達と呼べないこともない、しかしこう呼ぶと相手は嫌がるかもしれない、そんな程度の関係性のある相手である猿に向けて何かを書いてみることにした。すると、するすると書くことができた。「このキノコ人間が、」の冒頭と、全く同じ文面が。私はそれを削除し、ワードを閉じた。

晚餐には一汁三菜が出された。まるで定食屋で饗されるようなまともな食事である。昨日の晚餐を見た妹が母に何か進言でもしてくれたのだろうか。「そんなわけないでしょ」尋ねてみると、妹は言った。妹は私に優しくなどない。きっと母が気まぐれでも起こしてまともに飯でも食わせてやろうか、そんな気になつたのだろう。

2011年11月4日（記書き）

この作品はフィクションであり、作者の田辺豊ではあります。

2011年11月4日

11月4日（金）

朝、起きると母に呼ばれた。そういうれば朝に目覚めるのは久しぶりだ。そんなことを考えながら呼ばれるがまま、命じられるがままに私は朝の食卓に座つた。母は私の正面に座つていた。そして私の目の前にはキノコが置かれていた。「昨日、食べさせ忘れていたわ。今食べなさい」どうしても食べなければならないのか、と私は尋ねてみた。「当たり前でしょう」母は言つた。だから私はそのキノコを口に入れた。相変わらず赤いくせに味のないキノコだった。

目覚めたのは夕方だった。私は食卓に突つ伏した状態のまま目を見ました。目の前には猿がいた。と思つたらそれは榎本なごみだった。どうして榎本なごみはいきなり表れるのだろう。いつも。いつも。「私はあなたにとつて都合がいいでしよう?」その通りである。「だからだよ」自分は妄想である、と宣言したも同然の発言だった。私は悲しかつた。少し、悲しかつた。しかし涙を流すほどのものではなかつた。うすうすそんなんじゃないかとは予想していたからだ。

それが喜びであれ悲しみであれ、感情の激しい動きは行動の原動力になる。私はパソコンのワードを開き、オリジナルの話を少し書いてみた。後のことなどは少しも考えないまま、登場人物を三人登場させた。この三人は恋をするかもしれないし、殺しあうかもしれない。登場人物には勝手に動いてもらつことにした。

晚餐に出されたのはカレーだった。適当である。テレビを見ていた妹に、晚餐に何を食べたのか訊いてみた。「焼きナス。あとそぼろの肉じゃが。味噌汁」やはり母は私の料理に限つて手を抜いていた。そういえば、と私は晚餐の中にキノコを探してみたが、見つか

らなかつた。キノコの処方は一日一回と決まつてゐるのだろうか。

2011年11月5日（前書き）

この作品は作者の田尾豊ではありません。

2011年11月5日

11月5日（土）

私が書こうとしている小説の三人の登場人物の性別の内訳は、男女である。女は榎本なごみに似せて描写した。他の人物に似せると私を罵倒するだけの存在になりそうだったからだ。登場人物たちは勝手に動き始め、三人で動物園に向かつた。しかし男の一人が財布を忘れていたため一人だけ入場料を支払うことができず、そのまま三人は公園で夕方まで過ごした。残り一人は男の代わりに入場料を出してやるつもりはないようだつた。変な話である。

見ることもないのに午後のワイドショーを見ていると、パソコンでタイピングする猿の話題が出ていた。あのサルかも知れない、と思つたが、やはり猿の顔の違いなど分からなかつた。しかしあの猿が私とメールを交換している猿かもしれない、そう考へると、見たくなくなつたので私はテレビを消した。知り合ひがテレビなんでものに出てゐるなんて、なんとなく嫌だ。

それから図書館へ行つてみたが夕方になつていたので閉館間際だつた。私は「このキノコ人間が、」を返却し、急ぎ足で猿の別の小説を探してみた。すると「私とカエルについて」という文庫本を発見したので借りてみた。

晚餐にはシチューが出された。シチューのみであり。サラダも白米もない。もし私だけシチューのみという晚餐なのであれば、一人前のみのシチューを作ることはほかの二人と同じメニューを作るより手間がかかることなのではないか、と考えつつシチューを口に入れてみるとキノコが入つていた。食感的には邪魔だったが、味がないのでそれ以上の感想はなかつた。相変わらず私はそれから狂つた。

深夜に目覚め、「私とカエルについて」を少し読んでみると、驚いたことに恋愛小説であるらしかった。

2011年11月6日（金曜日）

この作品はファイクションです。ですってば。

2011年11月6日

11月6日（日）

想像力が、創造力が湧いてこない。小説を書こうとしただけで私の気力は枯渇してしまったらしい。だから今日は書かないことにする。と決めていたら、パソコンの調子が悪くなつた。変換機能が狂つて、漢字に変換しようとしているのに半角カタカナに変換されてしまい、そのまま勝手に確定されてしまう。人の狂いは電子機器にも感染してしまうものなのだろうか。

だから今日はパソコンを閉じてひたすら小説を読んだ。「私とカエルについて」内での二人はつかず離れずの距離を保つたまま中盤まで差し掛かつた。しかしありぱりパソコンの調子が気になるのでもう一度文字を入力してみたが、結果は同じで、やはり半角カタカナで確定されてしまう。神が文章を書くなどでも言つているのだろうか。

どうしてもパソコンの異常動作が気にかかるてしまい、とてもワードを開いていることなどできない。仕方がないので登場人物たちには頭の中で動いてもらい、それを手書きで書き記しておくことにした。榎本なごみに似せた女の登場人物が男の登場人物に唐突に殺されそうになつた。いつたいどうした。錯乱でもしたのか。

晚餐の席でパソコンの異常について母に話していると、そこに父が食いついてきた。父と話すのは何か月ぶりになるだろう。「見てみなさい」と父が言うので、私はパソコンを父に見せた。「箱はないのか」と父は問うてきた。そういえば榎本なごみが持つてきたパソコンは箱に入っていた。父はそれを探つた。するとサポートセンターの電話番号が記されていた紙が発見された。「明日、電話し

てみなさい」父は言った。父はそんなにパソコンが好きだったか。頭の中を探つてみたが、今まで私にそんなそぶりを見せたことはなかった。新発見である。

2011年11月7日（前書き）

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体・事件とは一切の関係がありません。

2011年11月7日

11月7日（月）

起きると異様に汗をかいていた。何か嫌な夢でも見たのか、それともパソコンの調子が悪いのがそんなに心配なのか。起伏のない今的生活の中、パソコンの調子が悪いのは大事件である。それ故、こんなにも体が勝手に慌ててしまっているのだろうか。とにかく目覚めたのは十時過ぎだったので、昨日父に発掘してもらったサポートセンターへの電話番号を使って電話した。そして言われるがままに「ツール」から「プロパティ」を選択し、「プロパティの設定を規定値に戻す」を選択した。すると文字入力機能は正常値に戻った。

午前中にニュースを見た。動物園から珍しい猿が逃げ出した、というニュースである。ニュースを主にインターネットで仕入れている私としては、テレビで初見であるニュースを目にする事は稀である。地域ニュースだったからだろう。最近の私は、自分が住んでいる地域のニュースを取り扱っているサイトをあまり見ない。逃げ出した猿は目がパツチリしていて背筋がピンと立っているのが特徴、とニュースは報じていたが、私には猿を見分けることなどできない。時折人間だつて見分けられなくなるくらいなのだ。

私が人間を見分けられないことがあるのは、狂っているからではない。と思う。これは先天的なもので、人間のパーツの特徴を頭に留めておくことができない脳というものが存在する。私の脳はそれに該当している。と、私は病院の初診時に告げられた。病院の初診時には、簡単な知能テストのようなものを受けた。人間の顔のパツが描かれたパズルを完成させよ、というテストで、私は一分以上かけてパズルを完成させ、しかも右目と左目が逆であることに指摘されるまで気づかなかつた。パズルの成績はきっと平均以下だつた

のだろう。まあ、人間の顔が多少分からないくらいで生きていくのに苦労はしない。そんなことより狂ってしまっていることのほうが重大な問題である。

文字入力機能が治つたので、文章の執筆を再開させた。架空の人間が架空の物語を演じるのだから小説と呼んでもいいような気もあるが、それは本物の小説に対して申し訳ない気がするのでこれからは文章と表記する。ただ文字が並んでいるだけの一物なのである。その文章の中で、登場人物を今日も勝手に動かせた。前回は殺し殺されかけていた男と女の登場人物が、今日はベッドで一人寝していった。どうやら私が完成させようとしているのは男と女の愛憎劇であるらしい。冒頭の動物園のくだりはいつたいなんだつたのだろう。

晚餐の席で生姜とキノコのスープが出された。私は汁を少し飲んだだけで昏倒した。そういうえば、昨日の晚餐にはキノコが含まれていなかつた氣がする。一日置いてキノコを食べただけで、こんなにも激しく狂うものなのか。狂いへの耐性が、私はまだ完成されていないようである。

2011年11月8日（記書）

この作品は作者の口述ではありません。

2011年11月8日

11月8日（火）

郵便受けを覗くのは私の役割ではない。しかし、今日はなんとか郵便受けを覗いてみた。すると一通だけ私宛の荷物が届いていた。それだけを持ち、残りは郵便受けの中に放置して部屋に戻った。荷物は手紙にしては分厚く、それ以外のものとしては一つしか思い当る大きさのものがなく、その思い当るものとはハードカバーの本だつた。封を開いてみると、それはやはりハードカバーの本だつた。表紙には大きなゴシック体で「このキノコ人間が。」と書かれていた。作者は猿で、訳者の欄には母の名が書かれていた。いつたい母は猿の何を翻訳したというのだろう。それにしても、タイトルである。私がこの前読んだ「このキノコ人間が。」の「、」が「。」に変わっただけである。こんなにも似偏ったタイトルの本を出してもいいものだろうか。それともこの本は「このキノコ人間が。」の続編なのだろうか。そんなもの、読んでみなければわからない。なので読み終えてから考えることにした。

しかし読書とインターネットばかりの日々にいい加減嫌気がさしてみたので、少しは気が晴れることを期待して金はないが外を歩いてみることにした。やはり平日なだけあって、人の姿は少ない。それ故、すれ違う人間の一人一人が印象に残りやすい。私がすれ違う相手にしても然り、だろう。今日は学校をさぼっている風の小学生くらいの男とすれ違った。相手は私をすれ違いざまに凝視していた。私はどう思われたのだろう。きっと不審者と見られたに違いない。狂った人間は不審者に見られがちである。

帰つてきたら来客があつた。扉を開くと「初めまして」と来客が言つた。しかしそれは榎本なごみだった。「どうして私の名前を知

つているんですか？あてずつぱりで当たるとしたら、それはすごいことですよ」私も榎本なじみの態度を不審に思った。どうして関係がリセットされてしまったのだろう。

晚餐の席で生姜とキノコのスープが出された。その汁を飲んだだけで、私は昏倒した。そして深夜に目を覚ました。机に突っ伏したまま目を覚ました時、主菜は片づけられていたが、スープのカップだけはそのままだった。今日は狂いの発作が激しい。そういえば、昨日はキノコを食べていなかつたような気がする。一日抜いただけで、狂いに対する耐性は落ちてしまうものなのだろうか。以前はそんなことはなかつたはずだ。どうしてなのか。

2011年11月9日（複数枚）

この作品は田畠とこつ形式をとっていますが、作者の田畠ではなくあつません。

11月9日（水）

今の自分に何ができるのか？履歴書を買つ金もなければ何かをやろうという気持ちすら起こらない、パソコンを使って文章を書いているがそれを見せようとしている相手は猿なのだ。しかも猿は動物園を脱走した。あの猿なのは分からぬが、猿が私の書いた文章メールで送信でも読んでくれるとは限らない。私は何もできないのだ。そう考えると泣きそうになつたが、止めておくことにした。まるで自分が何もできることを認めるみたいだつたからだ。

毎じる田を覚ますと、自室の階下の居間で母と誰かが話している声が聞こえてきた。こつそり見に行つてみると、母と元編集者が話していた。しかもその内容は仕事の話のようである。どうして編集者をやめて狂人の仲間入りをしたはずの編集者が母と仕事の打ち合わせなんてやつていてるのか、どうしてなのかわからなかつたので見つからないように部屋に戻つた。昨日の榎本なごみのことといい、どうもおかしい。もしや、と思つてしばらく待つてみると、階段を上つてくる足音が聞こえてきた。

ノックもなしに部屋に入つてきた（元）編集者に私は尋ねてみた。この部屋の何かを破壊するつもりなのか。「よく知つているね」この前退職したのではないか。「そんなわけないじゃないか」やはり、編集者との関係もリセットされてしまつている。そこで、編集者から聞いた話をしてみた。猿というペンネームの作家は本当に猿であるらしい。と。「そんなわけないだろ。あの猿先生が猿なんて。それにしても、どうして僕が猿先生を尊敬していることを知つているんだい」上から目線で編集者は言つた。そして続けた。「それにしても、この部屋にはこれ以上破壊できそうなものがほとんどない

なあ「私の部屋のものは編集者にあらかた破壊されてからそのままになつてゐる。修繕費や代わりのものを用意する金などを私を見損なつてゐる私の家族が用意してくれるわけがない。壊されていなものと言えばノートパソコンくらいだ。」といふわけで、編集者はきつとノートパソコンを破壊するだろ。しかし、私はそれを死守するつもりである。例えどんなにみつともない格好になろうとも、泣きながらしがみついて破壊するなこの野郎とズボンの裾を摑むつもりである。「そりやあ不気味だ。ぞつとするね。分かつたよ、やめておこひ。君がこれ以上不幸になるとも思えないし」そうだろ。か？と思つたが、せっかく引き下がつてくれるのだから、と、私はそれを口に出さずに編集者が立ち去るの一歩も動かすに見送つた。

晚餐の席に鍋が出された。具はワインナーと白菜と肉団子と鮭とネギと豆腐と糸こんにゃくと練り物の団子と、とにかくなんとか名称のわからない鍋だつた。私の取り皿にだけ、キノコが入つていた。父も妹も、私と同じ鍋をつついた。まるで今まで何事もなかつたかのように、私と普通に言葉を交わした。何があつたんだろ。

2011年11月10日（前書き）

この話は作者の口述ではありません。

2011年11月10日

11月10日（木）

仮説が浮かんだので、実践してみることにした。仮説と言つてもそれはもう簡単なもので、あの操作をやつたらまた同じことが起ころんじやないか、という仮説である。なので私は実践してみた。パソコンの文字入力機能の「ツール」から「プロパティ」を選択し、「プロパティの設定を規定値に戻す」をクリックした。何かが起きた気配はなかつたが、母が私を呼ぶ声が聞こえた。ふれあいサロンへ連れて行かれる間際にこの操作を行つたのだ。

ふれあいサロンでは、以前働き始めたことを自慢げに語つていた男は来ていなかつた。人が話しているのを本を読みながら聞いたところ、仕事が忙しくなつた、らしい。きっと木曜日に清掃のシフトが入れられたのだろう。それは幸福なことだろうか。私は当人ではないので分からぬ。何もやることのないサロンで、そんな話を聞いていたので、「このキノコ人間が。」を読むという作業はあまり進まなかつた。

帰つてくると榎本なごみが表れた。チャイムを押して玄関に現れたのである。「初めまして」と彼女は言つた。どうやら仮説は真実で、パソコンの文字入力設定を規定値に戻すと私にかかる人間の環境もリセットされるらしい。メカニズムは分からぬ。そんなことを考へている私を前に、榎本なごみは首をかしげた。

そのまま榎本なごみは晚餐に同席した。家族は驚くほどフレンドリーに榎本なごみを受け入れた。榎本なごみとはいつたい何者なのか。昨日はまともに言葉を交わしてくれた家族に尋ねてみたが、答えは返つてこなかつた。私は晚餐に交じつっていた味のないキノコを

口に入れ、氣絶するほどの狂いが始まったのを自覚した。

2011年11月11日（前書き）

この物語は作者の日記ではありません。作者と登場人物には何のかかわりもありません。

2011年11月11日

11月11日（金）

気が付くと私はベッドのままショッピングモール内を移動していた。ベッドには動かすためのレバーが備え付けられていて、それを操ることで私は寝ころんだままショッピングモール内を自由自在に動き回ることができた。しかし、ついにベッドを出なければならぬ時が来た。尿意が襲ってきたのだ。私はベッドのままトイレに入り、ベッドを何とか傾けて用を足そうとした。しかしベッドに寝転んだままだと何をどうやってもどうにもならない。仕方がない、ベッドから降りるか、と思い、ベッドから降りるとそこは現実世界で、私の部屋だった。夢の話で段落を一つ使ってしまったのだ。なんとなく無意味な日記なのだろう。いや、夢日記は無意味ではないかも知れない。

私の周囲に起じる出来事は、すべて本当の出来事ではないのではないか。夢に妙なりアリティがあつたため、そんなことを考えた。編集者はもちろんのこと、榎本なごみも本当に存在するものではないのではなかろうか。パソコンの文字入力機能の設定をリセットしたことでリセットされなかつたことと言えば、ふれあいサロンでの光景くらいだ。しかしふれあいサロンは週に一度しかない。私はこの悪い夢のような現実を生きていかなければならないのか。そういう考えると寝たくなつた。しかしあう日覚めてしまつて眠くなかった。

こんな時は無理矢理にでも何か行動を起こしたほうが良い、そのくらいの知恵は持ち合わせている。私は指を動かすことになった。猿に見せる（といっても猿がまだ動物園にいるという保証はないが）。とこうか猿の正体は不明なのが）ための文章を書くことにしたの

だ。登場人物の男は女をあつさり殺してしまい、もう一人の男が警察を呼んだ。どうしよう。このままでは単なる犯罪劇で終わってしまう。しかも何のトリックもない。私は新しい登場人物をこさえることにした。明日までに。

晚餐後の狂いのあまりの気絶から目覚めると、頭の中に新しい登場人物が誕生したので慌てて深夜にパソコンを起動してワードに書き付けた。通報した男の妹である。女を殺した男をかばつて、通報した男の妹は女を殺した男と二人で逃避行を開始した。通報した男は一人を追い始めた。これで、まだ物語を続けることができる。私は安堵した。直後、どう物語を続けるつもりなのか、と自問して、安堵は吹き飛んだ。

2011年11月12日（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物・団体・事件とは何の関わりもありません。

2011年11月12日

11月12日(土)

寝ている夢をよく見るようになった。最近昼まで寝てばかりいるせいなのか。昼まで寝ているうちに晚餐後に気絶して眠っているのである。一日の半分は寝て過ごしているかもしない。それでも、誰も困らないのだから睡眠時間はなかなか減らない。誰かにとつての大切な人に慣れるよう努力すべきだろうか。だとしたら、どう努力すればいいのだろうか。金もないのに。

私が書いている文章の現在の登場人物は、逃避行を続ける男女とそれを追う男の三人である。追う男に手がかりを渡すため、私は逃げる男に殺した女との思い出の品を落とさせた。これで文章の展開に少しばかり緊迫感が出るのではないか、と思ったのである。緊張感のない文章は、読まされてもただただ苦痛を感じるだけだろう、きっと。

見知らぬ男女が訪ねてきた。扉を開けると見知らぬ男女が経つて、男が叫んだ。「助けてください！」そして私は、なぜかその明らかに怪しい男女を家に上げてしまった。男女に水を与えると、それを飲んでしばらくの間は落ち着いた。しかし、すぐに男が慌てだした。「思い出の品がない。思い出の品が」それはいったいなんなのか。「それはたいへんだわ」と女も慌てていた。そういえば、私はまだ文章の登場人物の男が落とした思い出の品を「思い出の品」としか書いていなかった。それがなんなのか、思いつかなかつたからである。私は慌てる二人を残して自室に戻り、「思い出の品」を「手品用のハートのエースのトランプ」と書き換えた。降りると男は「トランプがない！」と騒いでました。

晚餐の間、自室に男女をかくまつておいた。どうしてこんなことをやつてしまふのか、自分で自分が謎である。変に情が移つてしまつたりしてしまつ前にさつさと男女を追つ男に引き渡してしまわなければならぬ。そうしなければいつまでもだらだらと逃避行が続いて、起伏の少ない文章になつてしまふではないか。そんなことを考えながら食べ終えた晚餐後、部屋に戻ると、ほとんどのものが編集者によつて破壊された部屋で、男女が破壊されていないノートパソコンを開いていた。男女は、やばい、みたいな顔をしていたが、私は晚餐に出たキノコのせいで狂いが回つて倒れそうになり、それでもこらえようとしたがこらえきれずに倒れた。男女によつてパソコンが荒らされてしまうのではないか。そんな不安が頭をよぎつた。

2011年11月13日（前書き）

この作品はフィクションです。作品内作品も当然フィクションです。

2011年11月13日

11月13日(日)

深夜のことである。狂いから覚めてみると男女の姿は消えていた。ノートパソコンは開かれっぱなしで、スクリーンセーバーが作動しないなかつた。画面は真っ黒だつた。私はスクリーンセーバーを「なし」に設定しているためだ。それでも起動していることが分かつたのは、電源ランプがついていたからだ。マウスを少し動かして真っ黒のスクリーンセーバーを終了させてみると、ワードが開かれていた。どうやら男女は私の書いた文章を読んでいたらしい。それどころか書き足されてすらいた。逃げる男女は無事に逃げおおせ、それからというもの幸せに暮らしましたとさ、めでたしめでたし。と、書かれていた。私はそれを消した。すると部屋に男女が表れた。「私たちの未来を消さないでください」女は言つた。しかし、それだと文章が面白くならない。「面白くないでいい。平穏で、平凡でいいから、そんな穏やかな生活を送れるように、そう書いてくれないか」男はわがままを言つた。しかし、人殺しが平穏を手に入れられる、なんて展開が、許されるわけがないので、私はそれを却下した。無下に却下したので、そろそろ襲い掛かってくるかな、と思つたが、男女は脱力しただけだつた。そしてしばらく経つと、女が口を開いた。「それじゃあ、」

それからしばらく交渉は続いた。そして交渉の末、妥協案として、男女の逃避行がまだ続く、と私は書き足することにした。そしてさつそく逃避行は続いた、と書き足した。すると男女は部屋から逃げ出した。私が男女は捕まつたと書かない限り、男女は男から逃げ続けるだろう。人殺しを警察に通報した、世間的に正しい行いをした男から、ずっと。しかし、ただ走らせるだけでは単調でつまらなくなってしまうので、私は男女に出会いを用意することにした。手つ取

り早いところで編集者に似た男を登場させた。男は男女を自宅にかくまつた。そしてその夜、編集者に似せた男は男女から金品と金を奪おうとした。男女は逃げ出した。

ひどいことを書いてしまったな、と思つてゐると、男女が部屋に戻ってきてまた抗議を始めた。その時は晚餐後だったので、晚餐で食べさせられたキノコのせいで倒れる寸前だった。「人の不幸を書くなんて信じられない」と女は小説というものを否定するようなことを言つた。小説というのは大体人の不幸を書くものだ。それなのに、この人物ときたら。とにかく、パソコンに触らないでほしい。いくら文章を書き換えたとしても、この部屋から逃げ出す男女と違つてこの部屋に残り続ける私は、いくらでも文章の内容を書き換えることができるのだから。それだけ言つと、私は倒れた。今日はほとんどの部屋から動かなかつたのに、怒涛の一日だった。

2011年11月14日（前書き）

この作品はフィクションであり、登場する人物・団体・事件は架空のものです。

2011年11月14日

11月14日（月）

猿に宛てる文章をどのような結末にしようか、などと考えていたり文章に出てきた逃げる男女に翻弄されたりしているうちに昨日は終わつてしまつていて、今日はすでに週明けになつてしまつていて。働いていないと時が経つのが異様に早い。いや、働いているときも時が経つのが異様に早く感じられた気がする。しかし働いている間だけは時が経つのが異様に遅かつた。子供のころからずっとそうだ。面白くない時間ばかりが長い。不公平だ。誰に文句を言えばいいのだ。自分の感性か？

ハロー・ワークへ行き、私の担当者になつてしまつた中年女性に、人と顔を合わせなくともいい仕事はありませんか、と尋ねてみた。これを口にできただけでも大きな進歩である。こうして少しでも自分を褒めないとやつていられない。別に私なんかがやつていられないがまともに世の中は回つていくことが、ますますやつていられない気分にさせる。とにかく人と会わなくていい仕事を一つ、紹介してもらつた。エクセルを用いてパソコンで文字入力するアルバイトである。エクセルの使い方なら授業で習つたことがある、と、日記には書いていないが、以前、中年女性に伝えていたので、このアルバイトが紹介されたのだ。

家に帰り、そのことを母に話し、決死の覚悟で、履歴書を買う金が欲しい、と頼んでみた。すると母は、自分の部屋から履歴書を持ってきた。また働き始めることがあつた時のためにと、私が狂い始めると同時期に買っておいたらしい。ありがたいが、久しぶりに金銭を手にする機会を失つてしまつた。

ここまで事が運んでしまっては履歴書を書かないわけにはいかなくなってしまったので、私は履歴書を書いた。狂つて仕事を辞めてから現在までの空白期間が痛い。趣味特技欄に書いてあることが大嘘であることも痛い。面接は明日である。そして明後日は通院日である。今週は忙しくなりそうだ。

晚餐を榎本なごみが作っているのを偶然目撃した。そういうえば、こんなことが以前にもあった氣がする。でもその時は晚餐ではなく昼食を作ってくれたのではなかつたか。それにしてもどうして榎本なごみが何の違和感もないかのように家に溶け込んでいるのか。母は榎本なごみをどう思つているのか。そういうしていりううちに晚餐が完成してしまい、榎本なごみは私と家族を食卓に読んだ。榎本なごみが作ったものはポークビッツとほうれん草の炒め物である。母は私の席にキノコ粥を置いた。私だけはキノコを食べる、というメッセージなのだろう。

榎本なごみは母に言つた。「キノコ、食べなきゃいけませんか?」私が、だらうか。榎本なごみの席にキノコ粥は置かれていない。きっと、私が、キノコ食べなきゃいけませんか、なのだらう。「あたのためもあるのよ」と、母は榎本なごみを向いてそう言つた。どういうことなのかわからない、ということにしておこう。と、私は心に決めた。

2011年11月15日（前書き）

この物語なフィクションであり、現実とはずいぶん違います。

11月15日（火）

今日は面接、明日は病院と、今週は急に忙しい。しばらくの間、週にいくつも家から出なければならないイベントがあったことはほとんどなかったため、そう感じられてしまうのである。面接は午前十時に行われた。そして失敗した。向こうの「何か訊きたいことはありませんか」という質問に、「特にありません」と答えてしまつたのだ。きっと熱意無き人間に見られただろう。「結果は一週間以内にご連絡します」とのことだったが、良い連絡が来るとはとても思えなかつた。十五分間の面接で、私は疲労困憊し、悪い気分に囚われてしまった。

そんな不安を文章にぶつけた。感情をぶつける相手がいるのは良いことである。先々月あたりの「こと」と比べればかなりの進歩と言つても良いのではないか。ただし問題は、進歩と言つても実質何も結果らしい結果を残せていないところにある。状況は何も変わつてない。何も好転していない。

文章の中で、今度は男女を追う男にスポットを当てる。妹との思い出を書いてみた。追う男は幼少期、いじめに遭っていた妹をかばい、「一生俺が守つてやるからな」とありがちな台詞を口にしていた。そんな妹は、人を殺した男と一緒に逃走中である。世の中そんなものである。

晚餐の席に当然のように榎本なごみがいた。榎本なごみは私に尋ねた。「今、何に熱中しているんですか」そのくらい、知っているではないのか。榎本なごみは現実の存在ではないらしいし。「あなたの口から確かめてみたいんですよ」それならば答えるが、今は

文章を書くこと、である。生産性はほぼゼロである。どこかの賞に宛てる当てもなければ、不特定多数に公開するつもりもない。「私としゃべることには、熱中できませんか」 榎本なごみは寂しいのだろうか？ そんなことはあるまい。榎本なごみは高校生で、学校に友達がいて、しゃべる相手には欠いていない筈である。何度も目撃したことがある。どうも、ついさつき書いたことと矛盾しているような気もするが、とにかく榎本なごみには榎本なごみの生活というものがある。私なんかに構っている暇などあるのか。「あなたが見たのは、私のモデルですよ」 そうか。じゃあ榎本なごみは一体なんだ。「それはですね、」私はとっさにその先を遮った。なぜかその先を知るのが怖くなつたからだ。

2011年11月16日(前書き)

この作品は作者の田尾ではあります。

11月16日（水）

夢の中で私は、アルバイトをしていた。単純作業のつらいアルバイトだった。確か車と子供と食べ物が関係していたと思う。おそらくお子様ランチの車の形をしたプレートに食べ物をひたすら乗せていく、そんなアルバイトだったと思う。もちろん夢の話なので、実際にそんなアルバイトは存在しない。ほかのみんなは一般用の盆に普通の食事を載せているのに、私だけお子様ランチである。ある日、私はそんな仕事が嫌になつて、一日さぼってしまう。罰則として、同じ班の人間全員の配給食が抜かれることとなり、私はますます肩身が狭くなる。しかしこれ以上休むともっと罰則が厳しくなるので、休むことができない。そんな夢を見た。久々の悪夢らしい夢だつた。

「苦役列車」なんか読むんじゃなかつた。

酒の味は好きではない。酔うために私は飲んでいた。その酔うために飲んでいた酒を、私は欲していた。酔いたかつたのである。酔えるなら酒でなくとも構わない。錠剤とかでもいい。世の中には粉末状の酒がある、そんな話を聞いたことがある。それで酔えれば酒を飲むよりきっと楽だろう。台所の冷蔵庫を開く。酒はもちろん入っていない。

面接の結果がもう出た。私が病院から帰ると、母が、面接した先から電話がきたことを教えてくれた。結果は、「今回はご縁がなかつたということです」とのことらしい。縁の問題で採用不採用が決まるのであれば、私は手当たり次第あちこち受けまくつていれば縁のある会社が見つかって再び働き始められるはずである。つまり私はきっと、狂っているから、という理由で不採用になつたのだろう。列車は苦役方面へ向かっている気がする。

「面接、落ちちゃいましたね」と榎本なごみになぐさめられた。なぜか榎本なごみは昨日からずっと家にいる。帰る様子はない。何者なのかわからない相手がずっと家にいるのは不思議である。不可解である。「でも、大丈夫ですよ」いつたい何に対しても大丈夫と言っているのか、私には分からない。

晚餐になつてもやはり榎本なごみは帰らない。「今日、病院はどうでした?」なんて世間話すら降つてくる。いつも通り、40分待たされて5分の診察で処方箋をもらつて帰つてきた、と私は正直に答えた。「その医者、私より藪ですね」榎本なごみは医師だったのか。「いえ、そんな存在じゃありませんよ」じゃあ一体なんなんだ、と訊くと正体が明かされるかもしれないのに訊かないでおいた。謎の存在でいてくれた方が今のところは気が楽だ。晚餐のメニューは味のないキノコが入つたチキンライスだった。お子様ランチと違つて旗は立てられていなかつた。

2011年11月17日(前書き)

この作品はファイクションです。

2011年11月17日

11月17日（木）

自分がいなくなつても世の中は何も変わらない、そんな人間は世の中に五十人や百人や、そんな程度ではない筈である。そんな人々をもつと役立てられるように世の中がなればいいと思う。具体的には、すべての人間が他人と関わらなくてこなせる程度の仕事を用意する。その内容までは、まだ思いつかない。だからこうして日記に書いているのである。日記とはほかに書いても無駄なものを記すものだ。

ふれあいサロンへ連れて行かれた。そういえば2週間ぶりである。この前仕事を始めたことを自慢していた男は今週もおらず、代わりに水をがぶ飲みしている男がいた。理由は分からなかつた。男には誰も話しかけなかつた。やがて男は、水を飲み終えると、酔つたような足取りでふれあいサロンを出て行つた。男が飲んでいたのは2リットル入りペットボトルのミネラルウォーターだつた。ペットボトルの表記が正しいのであれば、その筈である。酒ではないはずだ。酒臭くはなかつたし。

帰ると相変わらず榎本なごみがいた。榎本なごみが家にいる限り、編集者は現れないのではないか。そんな気がする。キヤバが決まつているんじやないのか。そんな気がする。一度に登場する架空の人間は一人までと決まつているのではないか。そういう決まりがあるような気がする。

晚餐に出されたのは野菜とキノコが入つたラーメンだつた。もちろんコスト削減のため袋ラーメンである。「タンメンですね」と榎本なごみは言つていた。おそらく違うと思われる。私はそれを黙つ

て食べ、気絶した。自室で目を覚ますと、隣に榎本なごみが寝ていた。私に付きまとつことで、榎本なごみに何のメリットがあるのか尋ねてみたかったが、榎本なごみは眠っている。

2011年11月18日（前書き）

この作品は作者の口述とは違います。

創作です。

2011年11月18日

11月18日（金）

世界は区切られている。宇宙から見れば地球に国境なんかないんだ、なんてだれが言い出したのかは知らないが、国境線は存在し、県境も存在し、番地だつて区切りで作られている。私が出歩ける範囲の番地は決められている。私が歩いて帰つてこれる範囲が、私が動ける区切りである。それ以上出ることは、私にはできない。金がないからだ。金がないから電車にも乗れないし、歩いて脱出するには富崎県は面積が広すぎる。私が住んでいるのは富崎の海岸線沿いの中心にある県庁所在地なのである。北へ出ようにも南へ出ようにも西へ出ようにも歩きでは一日や一日では済まない。船に乗るには電車に乗るより金がかかる。金もなければ免許もない私には、近所から脱出する手段がないのだ。

そう思つと富崎が監獄であるような氣すらしてくる。そうつぶやくと、「そんなことないですよ」と、相変わらず家から出て行こうとしない榎本なごみが言った。自分がその一言を期待していたから、榎本なごみはそう言ったのかもしれない。そう考えると自分が嫌になる。私は自分に都合のいい妄想を出すことしかできないのか。「家のほうが居心地がいいですよ」と榎本なごみは続ける。榎本なごみは悪魔なのかもしれない。もしこの世に悪魔が実在するとしたら、きっと美形だろう。そうでなければ人間を騙すことなどできない。

そして今日の晚餐。今日は家から出ることがなかつたのであまり食欲はわかぬが、朝も昼もいつものように食べなかつたので食べなければならなかつた。一日食事を抜くと、きっとそれが二日三日と習慣化してしまつて私はきっと死に至る。それに晚餐は雑煮だつた。流し込むように飲み込んでしまえば簡単に食べることができた。

餅と一緒に入っていたキノコもほぼ丸のみである。キノコの中の何か嫌な物質が頭に回つて氣絶しようとすると、榎本なごみが私の隣に寝転んだのが分かった。氣絶中の私に何かするんじやないか、と思つたが、そう尋ねるより前に私は氣絶してしまった。

2011年11月19日（前書き）

この作品はフィクションであり、作者の田辺豊ではあります。

2011年11月19日

11月19日(土)

日が空いてしまったので、そろそろ文章を書くことを再開しなければならない。そう思ったので、さっそく再開することにした。逃亡中の男女は海岸線沿いを走っていた。あくどい男に騙されて金を奪われた拳句襲われそうになつたことにより、世の中は善人ばかりではないことを心の底から思い知つた二人は、盗みを働いた。自分たちを襲つた男のように、人を襲い、車を奪つたのである。一人は逃亡者として、車で海岸線沿いを走っていた。……というところまで書いた。そこから先は、あとで考へることにした。

「書くことに何か意味があるんですか」と、文章を書いていた私に榎本なごみた尋ねてきた。何かしている、という実感が欲しくて書いているだけである、と私は答えた。「じゃあ、その文章の感想を述べさせていただきますとですね」なにが「じゃあ」なのかは知らないが、意見は貴重なので聞いておくことにした。「あなたはとても文章が下手です」当たり前である。創作の文章など、作文で書いたきりなのだから。

晚餐の席のことである。榎本なごみはいつものように自分は何も食べずに、私が食べているところをじっと見つめていた。ずっとこのなのだ。だからここ数日、なんとなく食べづらさを感じている。榎本なごみは食べなくて平気なのだろうか?「もう、私の正体に気付いているんでしょ?」そう、私はもう既に榎本なごみの正体に気が付いている。一応尋ねてみただけだ。一応。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8369v/>

---

このキノコ人間が。

2011年11月20日17時45分発行